
バカとマフラーと召喚獣

ネス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとマフラーと召喚獣

【Nコード】

N5677Q

【作者名】

ネス

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作です
昔から木下家に仕える神木家。
その神木家の千里君の物語です！

暇つぶしにでも読んでいただけたら幸いです。
初めての投稿でいたらないことも多々ありますがよろしく願います！

プロローグ 春ですな春ですよ春なのさ！

春です。穏やかな風。舞い散る桜。……あつ紹介遅れました僕…いえ私の名前は神木恵里かみきえりと申します。

今年から優姉と秀兄のいる文月学園へ入学することになりました。

今からすつごく楽しみなのですww

……そうそうただいま庭で（バカみたいに）素振りしているのが残念ながら私の一歳年上の兄、神木千里かみきせんりです。

あれで神木家次期当主なのですよ

そういえばもうすぐお昼ごはんです。時計は現在11時50分を指しています。そろそろお昼ご飯を作りますか……ん？

カレンダーに何か書いてあります……なにになに……（重要！テスト学校9時まで集合）と書いてありますしかも日付は……今日ですか……

僕には心当たりがないので兄さんに聞いてみましょう！

「兄さー……ん！」

「……1161……1162……」

むう気づいてくれません……こうなったら！

「去年の夏優姉の水着姿見てぶっ倒れたバカあ「おおおおおい！

！……！なに大声で恥ずかしいこと言っただよ……！」

「だって気づかないのが悪い！」

「気づかないのが悪い……じゃない……！だれかに聞かれてたら恥ずかしくて死んじゃうだろ（俺が！）」

「じゃあ死ねww」

「ひどっ！そんなんだからお前は男にもてずに女子にもてるんだぞ！」

「うっうるさいなーせっかく人がイイコト教えてあげようと思った

のに」

「イイコト??？」

「兄さん今日カレンダーみた??」

「カレンダー??いや見てな…はっ」

兄さんは何か思い出したのか一瞬驚いた顔になって…どうしたのでしょうか??どんだん顔が青ざめていきます。

まるで優姉を怒らせたかのようです。

「兄さんどつたの??」

「俺今からアメリカ行ってくるよ……………泳いで」

「ちょ兄さん正気??」

「H A H A H A 何をそんなにあわてるんだい？俺は正気だYOだからエリの胸もまったいらにみえ（バキッ!!）…あれおかしいな腕がけっして曲がらない方向に…」ガクッ

どうしたんでしょう？兄さんは倒れてしまいましたww

えっ？私が何かしたんじゃないかって??そんな！わたしはとおー

ーってもかよわ「いやぜったいかよわくない！」（バキバキバキ）

「ぐはあ！」

いんですそんな男らしいことできません（あとで優姉に差し出してやる!）

ブログ 春ですね春ですよ春なのさ！（後書き）

ええつと人生初小説はいかがだったでしょうか？

楽しんでいただけたら幸いです！！

感想とかかおまちしております！

プロローグ2 リセット&ロードはとっても大事！

自宅庭にて・・・

「んでセンリ？あなたはどーして大事なクラス振り分け試験を休んだのか私にわかるように250文字で文中に“私がばかでした。縛るなりボコボコにするなり全身の関節をはずすなり好きにしてください”を必ず加えて私に簡潔に説明しなさい？」

「優ちゃん、それはもはや簡潔の域をこえてるよ・・・」

かろうじて簡潔に話したところで縛られボコボコにされ全身の関節をはずされるはず・・・こうなったら正直に・・・

「ええつと・・・まだ春休みと思って「エリ！こいつを縛る縄持ってきて！」

「すでに用意してるよ！優姉！」

そういうとエリはすっごく頑丈そうな縄を持ってきました。

やばい！もはや助かる見込みがありません！！頼みの妹にも裏切られました・・・こうなったら最終手段！くらえ・・・

「兄さんまさかとは思っけど逃げたりしないよね？・・・ね？」

？ギクツ！「そんなことしないよ！俺を信じる！！」よし！ポーカ

ーフェイスは得意なのさ！

「そう・・・私の目を見てもちゃんといえるのかしら？？」

「優ちゃんボクヲシンジテ！」

「兄さん・・・すごい目が泳いでますけど・・・」

しまったー！！

「センリ・・・嘘ついたんだ・・・そう・・・あれ？優子さん？目がキラッキラしてますよ・・・あれおかしいな寒気が・・・

「兄さんごしゅーしょーさまーではあとはお二人でごゆっくりー！」

そういうとエリはダツシユせ家に戻る・・・まって！おいてかないでー！！

「さっ家族エリの許可もいただきましたし・・・覚悟しなさいよ？センリ？」

そういうと優ちゃんは俺の腕をつかむ

「ちょ優ちゃん…その関節はそつちにはまがらな・・・」ガク…

その後センリの姿を見たものは・・・？いや俺まだ死んでないよ！！

つづく？

プロローグ2 リセット&ロードはとっても大事！（後書き）

2話目なのにプロローグ！・・・すみません（土下座）

小説って難しいですね・・・投稿している方々をすっごく尊敬します！！

がんばるので次もぜひ見に来てください！（遅くなったらすみません！！）

キャラ設定(前書き)

キャラ設定です！

すっごく大雑把なので…:すいません

キャラ設定

神木千里かみきせんり高校2年生

一応本作の主人公。神木家次男。

身長…普通

体重…軽め

髪…黒の肩につくくらい（いつも1つにまとめてます）

顔…中性的（母の遺伝らしい）

好き…鍛錬、ゲーム、漫画、料理裁縫などの家事全般

苦手…キノコ、雷、真っ暗な所、お化け、保体（保の部分）、英語

神木恵理かみきえり

神木家の末っ子です。

身長…普通

体重…普通

髪…黒の長めの髪（1つ結びが多いが友達や優子に遊ばれることが多々ある）

顔…中性的（言動が男っぽいためたびたび男子にみられる）

好き…優姉、秀兄、家族、スポーツ、

苦手…家庭科、英語、料理裁縫などの家事全般

家族構成は父母息子2人娘2人で父母はアメリカに出張中

長男は医大長女は…迷子（この二人は父似なので美男美女らしい）

んーそんなところでしょうか？

大まかすぎてすいません！！あとはみなさんの想像力にお任せします！

気づいたら訂正するかも知れません

第一話 童心へかえるっ！

全国のみなさん！！こんにちはセンリです！

生きてるってすばらしいですね！！…なんでいきなりそんなこと言うかって？

あのあとですね全身の関節をはずされて1日放置され遊びに来た秀に助けてもらうまでエリお手製

“サンドイッチ”という名の毒物を食わされ続けたからです（パンに野菜挟むだけなのになんで・・・）

今日から学校です！制服よし、マフラーよし、弁当よし、さていきますか！

ちなみにあれから優ちゃんから口きいてもらえません…あれ？なんでだろう涙が…

「おはよーなのじゃセンリ…って何登校しながら泣いてるのじゃ！！」

「おはよー秀・・・シクシク」

「そのようすじゃとまだ姉上に口きいてもらえないのじゃな」

「うん・・・グス」

「姉上も意地っ張りじゃの…まあでもおぬしがちゃんと試験出てたら姉上と同じクラスになれたかも

しれんのにの」

そういうと秀は俺の頭を撫でてくれる

そうそう忘れるとこでしたご紹介します。彼は木下秀吉きのしたひでよしといって俺ら神木家のご近所さんで幼馴染です。みためは女中身は男というちょっとした詐欺を

感じさせますね。ちなみに優ちゃんの双子の弟です！

「秀だけだよ〜なくさめてくれるのは。エリも優ちゃんも俺を置いて先にいっちゃおうし…」

「ほらほらいつまでも泣いてないでとにかく姉上と仲直りすることを考えるのじゃ。」

「わしも協力するから」

「本当？秀大好きだー！」

「そういつて俺は秀にハグする」

「周りから殺気やらなんやらとんでくるのは気のせいだ！」

「すこし秀の顔が赤いのも気のせいだー！」

「寝ぼけーたひーとがみまちがーえたのさー！」

第一話 童心へかえろっ！（後書き）

おばけなんてなーいさおばけなんてうーそさ！

この前某クイズ番組で問題になってました
アタックチャーンズ！！

第二話 現実逃避だって悪いことじゃない！…ちょっと目をそらしただけさ

…校門前…

「あつにつしー先生おはよーございます」

「だれが“につしー”だ」バコツ「イテッ！」

につしーこと西村先生の鉄拳が俺の頭に落とされる

「せんせーひどいじゃないですか！ハゲたらどうしてくれるんですか！」

「まだ若いから大丈夫だ！」

「しかし先生！今のうちから気を付けないと…神木家男児はハゲるか短命で親戚に

有名なんですから！」

事実おじいちゃんにはやくに亡くなったし父は昔から髪の量気にしてたし！！

「それは…すまなかつたな」

うん！先生も納得してくれたみたいだ！

でもなんでだろう？憐みの目で見られてるような…？

「まあそんなことはおいといて木下。ほらクラス分けの結果だ。」

「ありがとうございますじゃ」

秀に紙が渡される…何クラスだろう？CかDだと思うんだけどなー

「ほら神木も…まあお前は欠席でFクラスは決定なんだけどな」

「うう…Fクラスか…友達百人できるかな？」

「いや、一クラスだいたい50人くらいだぞ」

「あれ？そんなもんでしたっけ？」

「そんなもんだ…」

あれ？隣にいる秀まで俺のこと憐れんでる気がする…

「まっFクラスには坂本と吉井がいるから大丈夫だろう」

「ん？吉井って“あの”吉井ですか？」

「ああ“あの”吉井だ。まっ悪い奴じゃないんだがな・・・あんまり感化されるなよ」

「はい気を付けます」

そういうとにっしーと別れて秀と下駄箱へ…

「そういえば秀は何クラスだったの？まさかFとか言わないでよね？」

ゴトツ・・・

あれ？なんで秀の持ってた靴が落ちたんだろう？それにコツチをむいてくれない…

「秀ー？？どしたー？」

「…センリ…もしもじゃぞ。わしがFクラスと言ったらどうする？」

「えっ？もちろん・・・毎日秀にエリの手料理をプレゼントフォーユーするねww」

あれ？秀の顔が青ざめていますwwちなみに彼女の料理を食べて無事だった人は

今まで姉貴以外見たことありません！！

「空が青いのじゃ〜今日はいい天気じゃの？」

秀が壊れました…

「ちよっ秀！現実逃避しないでかえってきて〜！！」

第二話 現実逃避だって悪いことじゃない!…ちょっと目をそらしたただけさ(後

黒井さん!感想ありがとうございます!!すっごくうれしかったです!

いちおう主人公は優子とくっついてくれるといいなーと思っていましたが

はたしていつになるのか!はたしてくっつくのか!!

という感じで……(汗)

秀吉は…どうしようかな(激汗)

思案中です……

第三話 学園祭の漫才つてすべつてもやや笑えるときがあるよね

・・・Fクラス教室前・・・

なんとか現実に戻した秀をつれて教室前までやってきました。

途中Aクラスを覗いてきましたが…うん…豪華だね！

まっAクラスがあそこまで豪華ならFクラスはそこまでひどくない
だろう…たぶん…

「覚悟はいいか秀!？」

「も、もちろんじゃ」

ガラッ………パタン

よし！みなかったことにしよう！！そうだこれは夢だ！幻だ！いや
ーやけにリアルな夢だな！

「センリ！現実から目をそむけてはだめなのじゃ!!」

「いや！これがそむけられずにいるか！！まさかとは思っていたが
ここまでとは…」

秀に押されしぶしぶ中に入る。クラスの中でましな座布団とちゃぶ
台をとり廊下側から座る。

この失望感を紛らわすため秀には悪いが軽く睡眠をとろう

・・・数十分後・・・

「…リ…センリ！起きるのじゃそろそろHRの時間じゃ」

「むにゃ…あと5分…」

「いいかげんに起きるのじゃ！」バコツ！

「あう！…秀くチョップはないだろ」

「いつまでたつても起きんのがわるいのじゃ」

秀に叩かれたところがジンジンする…だれだよあいつにかわら割り
教えたやつ・・・あつ俺か！

周りをみてみると結構人が集まって先ほどより騒がしくなっていた

“ガラツ” おつまただれか来たぞ！

「すみません、ちよつと遅れちゃいました」

「早く座れこのウジ虫野郎！」やばつ…この2人おもしろい！

「なあ秀？あの2人誰？」

「ああ、明久と雄二じゃな」

「につしーの言ってた？」

「そうじゃ」

なるほど。これはこれはなかなか楽しい一年になりそうだな

第三話 学園祭の漫才ってすべってもやや笑えるときがあるよね(後書き)

またまた感想ありがとうございます！

灰狼さん！参考になる意見ありがとうございます！！

誤字脱字はがんばってなおしていきたいと思います！

更新は…今学校が休みなので早いのですがはじまっちゃうと遅くなると思います(汗)

面白いと言っていたで大変うれしかったです！！

第四話 自己紹介って終わった後に言いたいことでてこない？

その後担任の先生がやってきた。担任は福原先生だ…この先生にFクラスまとめられるかな？

「では、自己紹介でもしてもらいましょうか。廊下側の人からお願いします。」

廊下側か…って俺2番目じゃね？やっべ…何言おう…

そんなこと考えてるうちに秀が自己紹介を始める

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

笑顔で紹介を終える秀・・・あつ次は俺か！

「ええつと…神木千里っていいいます。帰宅部所属。今年一年よろしく頼む」

よし終わった！ああ終わった。緊張したー

「ところで神木君」

「はい。なんですか先生？」なんかおかしいところあったかな？

「君は何で室内でマフラーをつけっぱなしなんですか？」

「ああこれは俺のチャームポイントなので気にしないでください」

…怒られるかな？

「そうですね。では次の人おねがいます。」 いいのかよ！！

まあ許されたならいいか。実はこの黒のマフラーは去年のクリスマスに優ちゃんにもらったものなんですww

もともとエリにあげる予定だったらしいけど失敗したそうで俺がもらっちゃいました！

ということですね以降ずつとつけてます！！夏はどうするかって？もちのろんでつけてきますよ！！

心頭滅却すれば火もまた涼しってね!!

「……土屋康太」おっ自己紹介すすんでる。

土屋君かぁー去年はいろいろ世話になったな

たしか保険体育は学年トップだっけ?すごいなあ…ある意味…

「島田美波です。」おっ初女の子!…てか思ったんだがこのクラス女子1人しかないな…

そんなかで堂々できるなんて島田さんってあるいみ大物なんじゃないかと思う。

「趣味は…吉井明久を殴ることです」

…大物でした!!吉井、知り合って(一方的に)数十分だがごしゅーしょーさま!!

なんか君とは仲良くなれる気がする!

おっ次は吉井か

「ーコホン。ええーつと吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでくださいね」

「『ダアアーリイーン!!』」クラス男子の大合唱!…

吐き気が…

「ー失礼。忘れてください。とにかくよろしくおねがいます。」

吉井もそうとうこたえてるみたいだな…まあ無理もない…

第四話 自己紹介って終わった後に言いたいことまでこない？（後書き）

やっと自己紹介…遅くてすいません（汗）

もっと自分に文才があれば…いやあってもパソコン打つの遅いから

無理ですね（笑）

でも少しずつ早くなってる（気がする）ので頑張りますよww

第五話 友達同士でハグするのは女子だけなのでしょうっか??

ガラリ…自己紹介中突然ドアが開いた

「あの…遅れて…すいません…」

「…えっ!?!」

周りを見てみると全員の頭に“ハテナ”のマークがついている。

「なあ秀。あの人だれだ?」小声で秀に尋ねる

「ああ、あの人は姫路瑞希といって学年上位にいつもおるはずなんじゃがなぜFクラスに…」

なるほど、なんでみんなに“ハテナ”がついたのかわかった。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします。」

「は、はい。」そういうと姫路さんという人は緊張しているのか体を小さくして

「あ、あの姫路瑞希といいいます。よろしくお願ひします。」

うん…小動物みたいでかわいいな…

そんなこと考えてるとある男子生徒が手を挙げて

「はいつ!質問です!」

「あ、は、はいつ。なんででしょう?」

「なんでここにいるんですか?」

うん…俺も思った。うちの姉さんじゃないんだから学校内で迷子になるなんて

ましてAクラスとFクラスだ間違えるはずなんてないはず…

「そ、その…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」なるほど。たしか途中退席は無得点だったっけ?

まあ俺なんて学校にさえいってないんだがな!

まわりも納得したようにうなずいていた。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいで』

『ああ化学だろ。アレは難しかったな。』

『俺も弟が事故にあったときいて実力をだしきれなくて』

『だまれ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かしてくれなくて』

『今年1番の大嘘をありがとう』

・・・ククツこのクラスバカばつかだ。

姫路さんは自己紹介を終えて空いてる席に座る…おっ吉井達の近くか
：吉井がなんかあからさまにがっかりしてる。どんな話してるんだろっ？

休み時間になつたら声かけてみるか！

「はいはいその人たち静かにしてくださいね」

吉井達が注意される

「あつすいませ」バキツ・・・バラバラ

あつ教卓が崩れた…どんだけボロいんだよ…

「え…替えを用意してきます。少し待っていてください。」
そういうと先生は教卓をとりて教室をでていく。

「おい。神木。」

ん？俺か？

「お前朝秀吉に抱きついてたろ？」

「んー…たぶん。」

「…なにっ！！」「…」クラスの男子の殺気が俺に集まる。俺なんか悪いことしたかな？

「「総員！！あいつを殺せええ！！」」

なんだなんだ？？？みんなしてカッターやらちやぶ台やらもって俺を本当に殺す気か！！

「おい！俺が何をしたっていうんだ！！」カッターの猛攻をよけながら言う。

「だまれ！！秀吉に抱きつくなんてわいせつ罪に値するっ！」

「いやまて！秀は男だ！友達に抱きついちゃいけないのかよ！」

「秀吉は“秀吉”だ！・・・あーあ秀がひっそり泣いてるよ。気にしてるのに・・・」

「しゃーない！！正当防衛だから母さんも怒らんだろ！神木流武術みしてやるよ！！」

説明しよう！神木流武術とは古来よりいろいろな格闘技を混ぜ合わせた武術で・・・

まあようするに勝つためなら木刀や手裏剣など使用してもいい・・・ぶちやけなんでもありな武術なのである。

というわけで俺はどこからともなくトンファーをだす。

「さあ、覚悟しやがれ！！」

第五話 友達同士でハグするのは女子だけなのでしょうっか?? (後書き)

あんまり男同士でハグしてるのは見たことないですね
女子同士はけっこう見るんですが・・・

第六話 企業秘密ってTVで見るとさほど秘密でないと思う

……数分後……

「あいかわらず、すごいのお」

「はあ……はあ……やっぱ大人数は疲れるよ。」

俺はFクラスメイトの屍の束の上にいた。

だいじょぶ！気絶だけにしといたからww

「はあーあなたすごいのね」

「ええーっと……島田さんだっけ？お褒めいただき光栄です」

「ところであんた。トンファーなんてどこからだったの？」

「へっへーん！それは秘密さ。あつでも借りたかったら貸すよ。他にもね木刀やスタンガンにナイフに手裏剣……」

「あんただけは敵にまわしたくないわね……」

まわりを見渡すと被害にあわないよう端っこに姫路さんがいた。

「あつ姫路さんごめんね。驚かせちゃった？」

「あついえ……ちよつとびっくりしただけです。ええつと……」

「そっか。俺の自己紹介の時いなかったもんな。俺の名前は神木千里っていうんだ。」

こっちは木下秀吉。今年一年よろしく。」

「よろしくなのじゃ」

「あつ、よろしくお願いします。神木君に木下君。」

うん！友達が2人増えた！！あと98人

ガラッ

「わっこれは何の騒ぎなの？」

あつ吉井がかえってきた。どうやら坂本と二人で廊下で話してたら

しい。

「よ…吉井…あいつが、神木が…秀吉に抱きついたらしい…」ガクッ
そういうと屍Aは力尽きた。…あれ？吉井から殺気が…

「神木君。初めて会った君には悪いが今ここで死んでもらう。」

ああ…まためんどいことに…

- - - 数秒後…

「すごいな神木。あのバカ明久をたった数秒でボコボコにするなんて」

「ありがとう坂本。でもこれは正当防衛ってことでいいよね？」

「大丈夫だろ。襲いかかったあいつらが悪いんだし。」

「でもよかった。代表まであんなのと一緒にじゃなくて。坂本強そうだから正直負けるかも…って思ってたんだ。」

うん。よかった…さすがにクラスの男子全員相手だときついもんな。

「でも、どうして俺襲われたんだろ…？」

「ああ安心しろこれはあいつらの“病気”みたいなものだ。」

「そっか。それはしかたないね」

「いや、センリよ。それで納得するでない」

そんなこんなやってるうちに先生が教卓（ボロいけど）を持ってかえってきた。

第六話 企業秘密ってTVで見るとさほど秘密でないと思う(後書き)

やっと先生かえってきましたね

じっさい教卓って重いから掃除のときとか運びたくないのはわたし
だけでしょうか

? (笑)

第七話 テストの珍解答って狙うと難しい!!

バカテスト

問 以下の問いに答えなさい。

『調理のために火をかける鍋を作成する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムのかわりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

『正解です合金なので鉄ではダメというひっかけ問題なのですが姫路さんは引っかけかりませんでしたね』

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

『そこは問題ではありません』

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（すごくつよい）』

教師のコメント

『すごく強いといわれても』

神木千里の答え

『問題点・・・妹に料理をさせたこと
合金の例・・・どんな金属を使っても彼女の手にかかれば無力であ
る』

教師のコメント

『その答えが出るのにいったい何台の鍋が犠牲になったことでは
う・・・』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「さて自己紹介の続きをしてもらいましょかね...ってみなさん先
ほどよりボロボロみたいですがなにかありましたか？」

「いえ。大丈夫、いつものことです。」いやこれがいつもだったら
いやだよ俺。

「そうですか。ではつづきを...」 納得するの！？先生！！

まあそういつつ自己紹介が再開される。

「坂本君。君が最後ですよ。」

「了解」

クラス代表の自己紹介か。やけに気合が入ってるみたいだけど...

「Fクラス代表の坂本だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなよ
うに呼んでくれ。」

うん。ここまでは普通だ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

坂本はゆっくりとまわりを見渡す。その視線の先は…なるほど。こいつが代表でよかったと俺は思う。

うちの代表は大物だ。（島田さんとは違う意味で）

「Aクラスは冷暖房完備の上リクライニングシートらしいが……」
坂本は一呼吸おいて……

「……不満はないか？」

「……大ありじゃっつ!!」「」

2年F組男子生徒の魂の叫び。…あつ島田さんと姫路さんと秀は耳ふさいでる。

みんなそれぞれAクラスとFクラスの大きな違いに文句を言っている。

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれはクラス代表としての提案だが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

おっいきなりAクラに仕掛けに行くのか？

『勝てるわけない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいればなにもいらぬ』

なんか余計なこと聞こえたが無視しよう

「大丈夫だ。かならず勝てる!いや俺が勝たしてみせる!!」

坂本は自信たっぷりと言う…その自身はどこから来るのだろう？

第八話 いい人なのに損な人って世の中にどれくらいいるだろう

「根拠はある。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろっているからな…」

たとえば…おい。康太。豊に顔つけて姫路のスカートのぞいてないで前に来い。」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

いや土屋…いまさら否定しても…

「こいつは土屋康太。あの有名な寡黙なる性職者^{ムツリーニ}だ。」

おっ周りがざわめいている。やはりムツリーニの名は有名だったか。たしか男子生徒からは畏怖と畏敬を。女子生徒からは軽蔑をもって挙げられるってだれか言ってたな

「姫路の実力は説明するまでもないだろう。みんなだってその実力は知ってるはずさ。」

うん…秀に聞くまで知らなかったけどね！

「えっ、わ、私ですか？」

「もちろんだ。期待してる。」

姫路さんは緊張しているのかおどおどしている

「木下秀吉だっている。」

「わ、わしか!？」

秀は呼ばれないだろうと油断してたみたいだ。

『おお……!』

『木下優子の双子だったな!』

いやまて!双子だからって両方頭いいとはかぎりんぞ!

現に秀はFクラだし！

「当然俺も全力を尽くす！」

『たしか坂本って小学生のころは神童とか呼ばれてなかったっけ？』

『実力はAクラスが2人もいるってことか！』

そうなのか？そんな風にはみえないが…

「それに吉井明久だっている。」

………シン………

あっしらけた。なるほど、ここでオチか。

「ちよつと雄二！！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！！まったくそんな必要ないよね！」

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたことない』

「ほら。せつかくもりあがっていたのに。

僕は雄二とちがつて普通の人間なんだから普通の扱いを……ってなんで僕を睨むの！？」

ドンマイ吉井。残念だが俺にはお前が普通の人間に見えない！

「なんだ。みんな知らないのか。こいつは“観察処分者”だ」

『………それって、バカの代名詞なんじゃ………』

「ち、ちがうよ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で……」

「そつだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するなバカ雄二！」

そんななか姫路さんがおずおずと手を挙げて

「あ、あの。それってどういふものなんですか？」

うん。バカの代名詞っていうくらいだから彼女が知らないのも無理はない。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうった類の雑用を、特例としてもものに触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

でも足とかに物を落としたりしたら操作してる本人にも何割か痛みがかえってくるらしい…

『しかし召喚獣がやられると本人も苦しいってことなんじゃないか？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないんじゃないか？』

「気にするな！どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ！」

「雄二そこは僕をフオローするセリフをいうべき」「なるほど」「」

「みんな納得しないでよ！！」

「まっとにかくだ。まずは俺たちの力の証明としてDクラスに宣戦布告しようと思う！！」

第八話 いい人なのに損な人って世の中にどれくらいいるだろう(後書き)

あれ？オリ主さんあんまりしゃべってない(汗)

つ、次こそはもう少し活躍してくれるはず・・・だといいなあ

第九話 使者蘇生！！ ……早口で言えます？

「というわけだ明久。宣戦布告の死者：使者まかせたぜ！」

「ねえ雄二。僕には一瞬死者って聞こえたんだけど！」

「まあそんな小さいことは気にするな！ちよつとほかのクラスの女子を見に行く感覚で行って来い！」

「でも下位勢力の使者ってたいていひどい目に合うよね……」

「大丈夫だ。俺を信じて行って来い！」

「本当に信じていいの雄二？」

「ああ」

「わかった。んじゃちよつといつてくるよ。」

吉井……お前絶対将来詐欺にかかるタイプだぞ！

「坂本いいのか？使者が吉井で」

「ああ、大丈夫だ。俺は明久の幸せは大っ嫌いだが不幸は大好きなのさー！」

まあ代表がいいっていうならだいじょぶだろ

—————数十分後

「騙されたあつー！」

ものすごい勢いで教室に帰ってきた吉井。けっこうボコボコにやられたみたいだな。

「やはりそうきたか」

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想どおりだったんじゃないか！」

「当然だ！そんなことも予想できなくて代表がつとまるか！」
ふむ…坂本は性格悪いが頭の回転はすごい早いみたいだな。

「吉井君大丈夫ですか？」

「あ、うん大丈夫。ほとんどかすり傷だし」
姫路に声かけてもらって吉井は嬉しそうだ。

「吉井、ほんとに大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、よかった。……うちがまだ殴る余地はありそうね。」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

吉井は忙しい奴だな

それよりこの二人はもしかしたら吉井に気があるのか？

「なあ秀。あの2人つてもしかして……」

「姫路はわからんが島田は去年からじゃ。見てのとおり明久は鈍感、
加えて島田はツンデレじゃから

去年はなにもなかったがの」
なるほど。

「おい。おまえたち今からミーティングするから屋上行くぞ。」

「あっおい坂本」

「なんだ？神木？」

「俺も参加していいの？」

「当たり前だ。大事な戦力だし、秀吉とも仲いいみたいだからな」

「そか。ありがとう。じゃあ俺トイレ行ってから来るからみんな先
に行つてて」

「わかった」

そういってひとまず俺はみんなと別れた。

第十話 妹が兄をあまり敬わないのは之自然の摂理！

.....学園長室

そこには学園長と仮面をつけた文月学園生徒がいた

「以上で？」

「ああ、あと今年もいつも通り頼むよ。ただし、バレるんじゃないよ。」

「はい。了解しました」

「期待してるよ“ガードイアン守護者”」

—————屋上

ガチャ

「遅いのじゃセンリ」

「ゴメンゴメン。ちょっとトイレ混んでて」

「さて、神木も来たことだし話を始めるか。」

「坂本。俺が来るの待っててくれたのか！」

「ん…まあな」

「そか！サンキュ！！雄二」

そっか〜正直はぶられたらどうしようと思っただけどよかった〜

「よし。作戦を説明するぞ。特に明久。しっかり聞いとけよ」

「なんで僕だけ名指しなんだよ！ねえ神木君」

「えっーとバカだからじゃない？…それと…センリでいいよ。1年に妹もいるし。」

「えっ妹がいるの??」わぁ都合のいいとこだけ聞いたなこいつ。

「ああエリっていつて胸がなグサッ

「何余計なこと言ってるのかな?バカ兄!!」

痛い…背中にクナイが…

「…っておい!なんでおまえがここにいるんだよ!授業は?」

「先生休みで自習中よ!」

そうか…自習時間は教室で自習しろよ。

「へえー神木の妹?かわいいじゃん」

「島田さんダメだ!近づくと暴れ…すいませんでした!!」

あぶないあぶない、次は眼球狙おうとしたなあいつ

「そのバカ兄さんの妹の神木恵里です。兄がお世話になってます。」

「できた妹さんですね。」

「そーねー」

いや女性陣のみなさんそいつは歩く人間兵器ですよ

「そうそう秀兄、優姉から聞いたんだけど…Fクラスだってね?」

おおっ…秀が青ざめてる…あっ逃げた!

ガシッ 逃げる秀を簡単に捕まえるエリ。

「はいはい逃げないの!!主君の失態は部下の失態…ということのみなさんすいません。ちょっと秀兄借りていきますね」

逃げるのを諦めた秀をずるとひっぱって2人は屋上から消えた。
…途中秀が助けると言っていた気がするがすまん!俺まだ死にたくないよ!

「まあいつものことだから気にしないで！」

(いつものことなのか…！) ああみんなの言いたいことが手に取るようにわかるよ……

第十話 妹が兄をあまり敬わないのは之自然の摂理！（後書き）

最近すっかりPSPがほしいんですが周りに全然売ってない（汗）
はやく入荷しないかな？

第十一話 火事場の馬鹿力は油断できません！

雄二の作戦が説明され今俺たちは試験召喚戦争をやっています。もちろんのごとく俺と姫路さんは無得点のため現在テストを受けています。

ピンポンパンポーン

ん？放送か？

『連絡します、船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。』

???として吉井は体育館裏にいるんだ？

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

ああこれは完全に吉井いけにえ作戦ですな…

バキツ あれ？隣から何か固いものが折れる音が…

「あつすいません神木君。シャープペンが折れてしまったので借り

てもいいですか？」

「あ…ああどうぞ」

「ありがとうございます。」

おいおい姫路さん…シャー芯じゃなくてシャープペン折ったんすか…

ん。でも今の反応からするに姫路さんは吉井のことが…なるほどねえそれより隣からすごい怖いオーラが出てるんですけど…!!??

「なあ姫路さん？」

「なんでしよう？」姫路さんの目が笑ってません!!

うう……ビビるな俺…!

「今の放送な、たぶん雄二の作戦だから本気にしないほうがいいよ」

「なっ、なんのことでしよう」

そういつて凶星を突かれたのをごまかそうとする。うん。バレバレ

だ。

「さあな。なんのことだろうな」

よし！！だいぶ寒気が引いてきた。これで俺の命は保障された！

テストを受けること数十分・・・

先生から終了が告げられる。

「よし！やっと終わった！！お疲れ姫路さん！」

「はい。神木君もお疲れ様です。」

うん、ほんとテストだけなのにすっごい疲れた！！

ガラッ 雄二が教室に入ってきた。

「二人とも終わったようだな。早速だが姫路にやってもらいたいことがある。」

「はい？なんでしょう？」

「なあ雄二俺にはー？」

「神木は保険だ。とりあえず今回はクラス分け直後しか使えない“裏ワザ”を使おうと思う。」

「「裏ワザ？？」」

「そう！裏ワザだ！もう明久たちには言っているから。姫路いくぞ！」

「あっはい！」

あー…俺置いてけぼり??

第十一話 火事場の馬鹿力は油断できません！（後書き）

小学生の時友人がシャーペンを折ったことがあるのですがその時彼女の握力は20もありませんでした。・・・不思議ですね！

第十二話 本人の知らないところでは動く!!

『うおー！ー！ー！』

しばらく教室で待っていると大歓声が聞こえてきた。

どうやら勝ったみたいだな〜。べ、べつに一人は寂しくないんだからな！

「センリお疲れなのじゃ！…ってなんで泣いておる!？」

「あっお疲れ秀。これは心の汗だよ！」

「そ、そうなのか？」

「そうだよ。俺が一人で教室にいるのに勝ってもだれも呼びに来てくれないのが悲しいなんて思ってないし！」

(悲しかったのじゃな…)

「まあそんなことはおいといて！秀早くしないとおいでくぞ〜」

「わわっ待つのじゃ」

「先に靴箱にいるからな〜」

「了解じゃ」

今日はいろんな意味でハードだったからホント疲れた(特にテスト中！)

いやまさか姫路さんがあそこまでの殺気を出せるとは思わなかったよ…

要注意人物だな〜…っとたしか靴箱はそこを右だっけ？

センリが曲がるとよく知るあの人物がいた。

「優ちゃん？帰ったんじゃないの？」

そつえば今日はエリと二人で買い物に行くと言ってたような…

「エリを待ってたのよ。まだ終わってないみたいだから」

「そか…ってか優ちゃんとひっさしぶりの会話だ！！うれしすぎるっ！
「そういえばDクラスに勝ったそうじゃない？」

「あーうん。そうみたいだね」

「さすが優ちゃん。もうそんなことは知ってるんか」

「なんで他人ごとなのよ」

「だって俺教室で放置されてたんだよ…」

「あー思い出したら悲しくなってきた…」

「それもそうね。クラス分け試験の日程をまちがえるような大馬鹿
さんは役に立たないものね」

「グサツ！ うう…もしかして優ちゃん

「ねえ？まだ怒ってる？」

「……」

「優ちゃんは俺から目を逸らすそして沈黙、それはたぶん肯定なんだ
ろうな」

「ねえ優ちゃん。賭けをしない？」

「賭け？」

「そう。俺たちは今打倒Aクラスを目指してる。そして近いうち勝
負をしかけるだろう。」

「そこでだ。俺と召還獣で勝負だ！」

「勝つたら？」

「相手に望みを1つ叶えてもらう！」

「それで俺は優ちゃんに許してもらおうんだ！！」

「その賭け乗ったわ」

「よし優ちゃんもやる気のようにだ。…ただこの勝負は俺にとってもす
っごいハイリスクである。」

「なぜなら…」

「でもいいの？あなたにしたらすごい不利じゃない？…特に保体と
か」

「そう…俺は優ちゃんより学力は低いし保体（特に保のほづが）でき

ない!

「だ、大丈夫だ！見てろよ絶対勝って見せるからな！」

「そう。なら期待だけはしてあげるわ」

「おう！俺の実力見て驚くなよな！」

そういつて俺は門のほうへ向かう

・・・よし今日から勉強時間増やさなきゃな

「ねえ秀兄？あの二人さ結局仲直りしたの？」

「うむ…いまいちよくわからんのじゃ」

「「おのれ神木！木下さんと仲良くおしゃべりしやがって！！」」

「

「うおおぬしらいつのまに!？」

「明日FFF団は活動を開始する。記念すべき最初の罪人は神木セ
ンリだ！」

「「「おおー!！」」」

裏でこんなことがあっていいるのをセンリは知る由もなかった・・・

第十三話 廊下を走ってはいけません！こけると痛いから…

翌朝Fクラス教室内にて・・・

ガラッ

「おはよー・・・？つてこれは何の騒ぎ！？」

そこには黒い装束をまとったクラスメイトの山とその頂上に山を作った本人神木がいた。

「おう明久か。あいかわらず時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二…つて違う！なんで朝からこんなことになってんの？」

「ああこれはだな」

「よ・・・吉井隊長・・・」

雄二が説明しようとするのと山の中から吉井に声がかけられる

「神木です・・・あいつ昨日木下さんと靴箱で仲良く話してました・・・制裁を・・・」ガクッ

「く、工藤君！・・・ちくしょう神木君め！仇はとってやるからな！」

「なんだ吉井も敵かよ…てかよく工藤つてわかったな！へんなのかぶつてるから普通にわかんないぞ」

「神木君、覚悟！！！」

「だからなんでこのクラスはこうなんだ・・・よつと」

吉井のカッター攻撃をよける

「あーもーこうなったら」

そついうとセンリは天井に向かってクナイを刺す

「どこを狙っているのかな神木くゴフッ」

吉井の真上からタライが落ちてきて直撃する

「よっしゃ！成功だ」

「いつの間にこんなの仕掛けておいたのじゃ？」

「ふっふっふもちのろんで昨日さ！」

「あいかわらずじゃの……」

「くっ神木君……このうらみいつか必ず……!!」

「そういえば今日のテストの監督船越先生らしいぞ」

吉井は超高速で廊下へ逃げた。

「そういえばセンリはもうテストを受けてるから受けなくていいんじゃないのか？」

「そうそう。という事で俺は今から空き教室にいるから昼休みになったら呼びにきてくれるとありがたい」

「了解した。ちゃんと勉強しとくんだぞ」

「わかってるよ」

そういつてセンリは教室をあとにした

第十四話 コーンポタージュのコーンは曲者だ!!

「あっライ先輩こんにちは!」

「おう!神木か」

紹介しよう!彼は文月学園3年の高橋たかはし来先輩です

彼にはいろいろお世話になっていきます。

「あいつかわらず女みたいな顔やな」

「なっ!そんなこと言ってるから1年の時俺を女と間違えて告白したりするんですよ!!」

秀吉も1回告られてたっけ?

「カツカツカ!そんな昔のことわすれたわ!...ところで神木。サボりか?」

あいつかわらず切り替えはやいな...

「違いますよ!自習なので空き教室で勉強しようかなーと思いましたが」

「そうかそうか。んで噂のFクラスはどげん?」

「そうですね...個性が強いですが60点と言ったところでしょうか?」

「そうか。次はどこをねらってるん?」

「たぶんBクラスですね。」

「ああ。あの卑怯のトコね」

「そうですね。何もされないといんですが」

「まっ気をつけときな」

「はい!ありがとうございます。では俺はこれで!」

「おう。またな」

...もしかして先輩...サボリ?

キーンコーンカーンコーン

おっ昼休みか!そろそろ教室出る準備しないと

ガラツ

「神木、飯の時間だぞ」

「あつ雄二に島田さんありがとね」

「吉井達は先に屋上に行ってるわ。瑞希がみんなにお弁当作って来てくれたらしいの」

「ふえ？そうなの？」

「へえ姫路さんって奥手かと思ってたのに意外と・・・」

「俺達はどうで飲み物買いに行く予定だったんだが神木来るか？」

「うん！手伝うよ」

・・・自動販売機前

「・・・ところで神木？あんたいったい1人で何本飲む気よ！しかも全部コーンポタージュ！」

「えっ？4本だけど…だめかな？」

「い、いや…だめってことはないだろうけど…お前そんなにコンポタ好きなのか？」

「うん！大好きだよ！！それにもうすぐ夏じゃん？自動販売機からコンポタ買える季節はあと少しなんだ！だから今のうちに飲みだめしとかないとなあって思ってる」

「だからって飲みすぎだ！」

「そうかな？・・・おいしいのに」

「明久達が全部食ってるかもしれないね…ちょっと先に行ってるぞ！」

「そういつて雄二はダッシュで階段を昇っていく」

「あつ坂本ずるい！」

「まあまあ島田さん。俺は弁当作ってきちゃったからもし無くなつてたら半分あげるよ」

「そおなの？ありがと神木」

「いえいえ。…ところでさ島田さんって吉井のこと好きなの？」
ゴソツガラガラ

「…島田さんが動揺して持っていたジューズを落としてしまった
「なっとなっとなんでそんなこと聞くのよ！！」

「へ？違った??」

「いやち、違わないけど…」

「じゃあ好きなんだね？」

「…そうよ」

「そっか〜そんな予感してたんだよね」

「でも肝心の吉井が気づいてくれないのよね」

「そだね！吉井は鈍感そうだからね〜それに島田さんも素直になら
なきゃ」

「わ、わかつてるわよ！…でも」

「なら小さい目標からクリアしていこ？そだね〜まずは下の名前で
呼び合うようにするとか」

「下の名前…ねえ」

「そうそう！塵も積もれば山となるっ！だよ」

「そうね。神木ありがとね」

「いえいえ、どいたまして…ところでさ島田さんが落としたジ
ューズ転がって行っちゃったけど大丈夫？」

「えっ…ってそんなことはもっと早くいいなさいよ！！」

俺達は転がっていったジューズ集めに奮闘していった

第十五話 扉を開けるとそこは・・・？

なんとか1階まで転がっていったジュースを集めみんなのいる屋上に向かった・・・

「すまん！みんなおまたせ？…？つて秀！！大丈夫か！？なにがあつた！」

そこには今にも死にそうな雄二とかなり重症の秀がいて吉井とムツツリー二が必死に看病をしていた

「秀！秀！！」

返事がないこれはいつたい・・・

「あー神木君？これはかくかくしかじかで・・・」

「なに！？本当か！」

吉井は島田さんに聞こえないようにこっそりと教えてくれた。（やさしいな！吉井）どうやら犯人は姫路さんの料理らしい…

秀が食べ終えた容器を見てみるとなんだか煙のようなものが出てくる気がする…

あつ！その煙を吸った鳥が…見なかったことにしよう！うん！

「なんだーみんな瑞希の弁当食べつくしちゃったんだ…ねえ神木、弁当半分もらつていい？」

「あつうん。いいよ！はいコレ」

そういつてお弁当の半分以上を島田さんに渡す

「ありがとwwではいただきまーす！…ん！おいしい！！」「ほ、ほんと！？よかつた」

生きるため（笑）一生懸命覚えた料理だけどおいしいといってもらえるとすつごいうれしい！

「あつ島田さんいいな！僕にも！」

「だめよ！！吉井たちは瑞希の食べたじゃん」

「ぶー」

「…もう！一口だけだからね！」

「ほんと！？わーい島田さんありがとう」

「はあなんかこの二人見てるとなご「お姉さまをたぶらかす豚のお
いがしますっ！！」めなかつた！！」

「誰だあの鬼のようなオーラを纏ったやつは！！！？？」

「み、美春！どうしてここに！？」

「殺します…吉井明久覚悟っ！！」ヒュッヒュッヒュッ

「すごい！1つでも当たれば警察沙汰なのにカッターを躊躇なく吉井
へむけてはなっ

「わわっちょ清水さんカッターは危ないって！！」

「コロスヨシイコロス」

「…どうしようなんか怖くなってきた

「ま、まあまあ清水さんという人落ち着いて…」「オマエモオネエ
サマヲ？」「いいえ私は無関係です思う存分吉井を痛めつけてくだ
さい」

「ちょ！神木君裏切るなんてひどいよ！」

「吉井！！俺も長生きしたいんだ」そう、この若さでまだ死にたく
ない！

「オトコハミンナテキデス！！フタリマトメテ…」

ピンポンパンポン

『2・D清水美春さん清水美春さん。西村先生がお呼びです。至急
職員室まで来てください』

「チッ！しかたありません今日のところは手を引きますが次にお姉
さまに近づいたときは…コロシマス」

そういつて清水さんは職員室へ向かっていった。

とりあえず鉄人先生ナイス！！

第十六話 お弁当にから揚げがあった日はなんとなくテンションが高い

なんとか命が助かった俺と吉井：俺Dクラス戦いなくて正解だったのかもれない

吉井は島田さんがさりげなく残してくれたからあげを食べてる。…あいつからあげ1個でこんなに幸せそうに食いやがって！照れるじやねーか／／／

「そついえば坂本、次の目標だけど…あいてはBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

秀の目覚めと姫路さんが帰ってきたタイミングで島田さんが問うやはり次はBクラスのようだ

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

そりゃそつだろう。優ちゃんをはじめAクラスには久保君や学年主席の霧島さんなど高得点者が多い

そんな人たちが束になればFクラスの考えてることなんてきつとまるわかりだ。

「そんじゃうちの最終目標はBクラスってこと？」

「いいや、そんなことはないAクラスをやる」

「雄二さつきといってる事が矛盾してるよ」

「おつ吉井は矛盾なんて言葉知ってたのか！えらいぞー！うん。すつごいびつくりした。明日は雨が降るかもしれない

「ひどいよ神木君！僕だつてそれくらい知ってるんだから」

「明久の場合ゲームで覚えたのじゃろう」

さつきまでお茶をがぶ飲みしてた秀が言う…そうか！お茶には殺菌

効果があつたづけ？

「というかゲームか…もしかしたらこいつとは話が合うかもしれない
「あ…話を戻していいか？…つまりだ、クラス単位では俺達の勝ち目はない。だから一騎打ちに持ち込もうと思う」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるかしってるよな」

「え？も、もちろんさ」

「こいつ絶対忘れましてたつて顔してる…あつ！こつそり姫路さんが教えてる。やさしいな」

「設備のランクを落とされるんだよ」どうどうと言う吉井

「…まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「そんな常識を知らないお前は非常識なのか？」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「神木、トンファー貸してくれるか？」

「雄二、今ならペンチもつけてやるぞ」

「ちよ、二人とも！」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「よかつたな吉井！姫路さんがいなかつたらお前の命はもう…」

「つまりうちに負けたクラスは最低の設備を手に入れられるってことさ。そこでこのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「雄二、それは交渉というより脅迫の間違いではないか？」

「まっ一騎打ちのほうが個々の能力の高いFクラスはなんとか勝てるかもしれない…たぶん」

「Bクラスに勝つたら設備をいれかえない代わりにAクラスに試召

戦争を仕掛けてもらうよう交渉するそしてAクラスにはBクラスとの
試召戦争のあと攻め込むぞといった具合だ」

「なるほど」

「まっあとの細かいことについては後々説明する。・・・で明久。」
「ん？」

「今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告してこい」

「断る！！雄二がいけばいいじゃないか」

「やれやれじゃんけん決めてるか」

「じゃんけん？・・・よし乗った！」

「なんかいやな予感がする・・・」

「ただのじゃんけんじゃつまらないから心理戦ありでいくぞ！」

「わかった。それなら僕はグーをだすよ」

「そうか。それなら俺はー！ー！お前がグーを出さなかったらブチ
殺す」

「やっぱり・・・」

「いくぞじゃんけん」

「わああっ！」

「やはり雄二が勝った。」

「決まりだ！逝ってこい」

「絶対いやだ！そして今‘いつてこい’の発音おかしくなかった？」

「大丈夫だ。Bクラスは美少年好きが多いらしいぞ」

「そっか。それなら大丈夫だね」

「大丈夫・・・なのか？」

「でもお前不細工だし」

「失礼な！！365度どこから見ても美少年じゃないか！！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「なるほど！後頭部か！」

「3人なんて嫌いだ！」

こいつ本当に高校生か？

「とにかく頼んだぞ！」

その後あまりにもかわいそうなので俺は宣戦布告についてく事にした。

第十七話 一度でいいから「まきびし」とかまいてみたい！

Bクラスの前・・・

「ね、神木君！もし僕に何かあつたら助けしてくれるよね？」

「さあてどうしようかな？」

俺はあくまで付き添い兼偵察だからな

「まっ一応逃走用に煙球やるよ。ほらっ」

煙球3つが入った袋を投げ渡す

「3つもくれるの？神木くんはやさしんだね」

「いや、1つハズレがあるから気をつけるよ！」

「前言撤回！何のためハズレなんかつくるのさ！？」

「まあ落ち着けて！何のためかといわれると・・・面白いからに決まってるじゃないか！」

もちろん自分用はそんなことしないけどな！

「よし！僕行ってくるよ」

ガッツポーズを決めながら決意をあらわにする

「よし逝ってこい！」

「なんかまた発音がおかしかった気がするんだけど・・・まあいいや行つてきます！」

そういつて吉井はBクラスに入っていった・・・

さてと・・・中の様子は・・・と

「あれ？センリじゃない？こんなところでどうしたのよ」「ふえ？」

「へーこの子が優子の言ってた神木君？」

後ろを振り返ると優ちゃんとその友達がいた

「ええーつと・・・優ちゃんこちらの方は？Aクラス...の人？」

「そうよほら、愛子、自己紹介」

「へへ、ボクの名前は工藤愛子だよ。よろしくね神木君」

「ボク」という発言からするにボーイッシュな子と推測！

男装が似合いそうだなーと思いつつこっちも自己紹介しなければ

「神木千里だ。どうやら俺の事は優ちゃんから聞いてみたいだね」

「ふーん『優ちゃん』ね・・・これはただならぬ関係の予感！ねえ優子、もしかして付き合ってたりするの??」

フッフと工藤さんは俺達を観察しながら言う

「そ、そんなことあるはずじゃない!!」

・・・そんな全力で否定されるとちよつと傷つく

「そっぴいえば優子が言ってたんだけどさ...それ!」ピラッ

工藤さんはスカートをめくって見せる

ガタンッ!!

センリは正面から倒れた

「おお！想像以上の反応だね」

「く、工藤さん！お、お、女の子がそんなはしたないこととしてはいけないのです！」

「大丈夫だよ下にスパッツはいてるし」

いや、そういう問題じゃないんだが・・・

俺はその、女の子にそんなに耐性がないというか家族とかは大丈夫なんだけど・・・

「あら？センリまだ意識あったの？この前なんか「ちょ、ストップストップ！それ以上は言っちゃだめだつて!!」・・・まあ俺だつてこの前のことがあつてからみんなに迷惑かけたし、それなりに慣れ

ようと・・・」

「なれようど?」

あれ?なんだろう寒気が・・・

「ちよつと愛子、私急用ができたから先に教室に帰ってて」

「あ、うん」

「さっせんり、その話向こうでじっくり詳しく聞いてあげるから来なさい?」

「ふえ?ちよ、優ちゃん手首は、手首はその方向には絶対曲がらないって!ちよ・・・」

俺はそのまま引きずられながら人気のないところへ連れて行かれた・

・

「そついえば神木君はどうしてあんなところにいたんだろう?」

その後ろで吉井がボコボコにされていることを工藤さんは知ることがなかった・・・

第十八話 開封後はお早めにお飲みください

「だいたい、あんたが誤解を招くような発言をするのがいけないんじゃないの！」

「はい。ごもつともな意見です、だから！腕はそつちに曲がらないつて！！」

俺はあのあと人気のない講義室まで連れて行かれなんとか優ちゃんの誤解を解くも、今にも腕の関節が外れそうになっているのです・
・優ちゃん、腕を上げたな！

「まっいいわ、そろそろ午後の授業が始まりそうだしわたしは教室に戻るから…それと、例の約束忘れないでよね」

優ちゃんは俺の腕を開放し、扉の前で俺に告げた

「ああ！正々堂々勝負だ！」

「じゃまたね」

俺は優ちゃんと別れた後、置いてきてしまった吉井の事を思い出し急いでBクラスへ向かった

・・・向かったつもりだったんだが廊下で吉井に出会ってしまった

「あつ！神木君！！」

「おう、吉井か！・・・こりやまた派手にやられてんな」

「ひどいよ！置いてくなんてっ！君がそんな人とは知らなかったよ」

「まあまあ落ち着けて、俺にもいろいろ事情があったんだ。…そだ、コンポタあるぞ飲むか？」

さつき1本飲み損ねたんだよな

「前言撤回。君はすっごい優しい、救世主だ！！」

コンポタ1本でこんなに喜ぶやつ俺以外で初めて見た。

そついや吉井の食生活つてすつごい荒れてるつて秀が言つてたな

「ん？コンポタ飲まないのか？」

「うん。帰つてから少しづつ飲もうかと」

「そうか？でも早く飲まないと賞味期限切れたらすつごくすつぱくなるぞ」

「へ？そうなの？」

「ああ。3年前の話だ、冷蔵庫に入れていたコンポタ。それをある日急に飲みたくなつたんだ、しかしよく見ると賞味期限が1週間切れていた。冷蔵庫に入れてたんだし大丈夫だろうと高をくくつていた俺は一気に飲もうとした。そして口の中にいれた瞬間、甘みではなく酸味が口いっぱいに広がり俺は生死を彷徨つたのさ」

「なるほど！賞味期限は大事つてことだね」

うん、納得してくれたみたいだ・・・2割ほど嘘だつただけだな
(生死のところ)

「そついや、なんで煙玉使わなかつたんだ？」

「・・・あつ！」

どうやら忘れていたらしい・・・

第十八話 開封後はお早めにお飲みください（後書き）

東北の地震について

他国の人や地震にあわなかった地域の方々の積極的な支援や活動を耳にするたび自分も何かできることはないのかと感じております。とにかく今は自分にできる事（物資の個人的な輸送は混乱を招くらしいので募金や節電）を頑張っていこうと思います

第十九話 卵に醤油は常に常備！

「雄二…言い訳を聞こうか？」

午後のテスト終了後（俺は講義室から戻ってきたところ）吉井はボロボロになった服装で雄二に詰め寄っている

「ふむ…まったくもって予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！！」

吉井は雄二に襲いかかるうとするが…

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

雄二の1撃で吉井は動かなくなる…痛そうだなあ

「先に帰ってるぞ。明日もテストなんだからあまり寝てるんじゃないぞ」

そういつて雄二は教室を出ていく

吉井は…当分動けそうにないな

「秀一、俺たちも帰るぞ」

「うむ、わかったのじゃ」

— — —

「秀、テストどうだった？」

「うむ、自分なりにがんばったのじゃ」

「そうかそうか、明日の結果が楽しみだな」

「うっ…エリに言うのは勘弁してほしいのじゃ」

「さてさてどうしようかなー・・・つと秀！あそこのスーパー卵すつごく安い！買ってくるからちよつと待ってて」

「了解なのじゃ」

ちよつと通りかかったスーパーでタイムバーゲンがあつた。

これはもう夕飯はオムライスに決定だな！ちなみに俺はケチャップかけない派だ！

卵をなんとか4つ手に入れてホクホクしていると見知っている2人が見えた

「雄二と…霧島さん？こんなところで会うなんて奇遇だね」

雄二は霧島さんに追われているようだった

「か、神木か？助かった！翔子をなんとかしてくれ！！」

「ふえ？なんで？」

「・・・神木、私たちの仲を邪魔をするの？」

「・・・もしかして二人は付き合ってたの？」

「そんなわけ「うんww」って翔子！お前なに勝手に！！」

「そっかーそれは知らなかったな（ニヤニヤ）」

「おい！神木！勘違いするんじゃないぞ！これは翔子が勝手に・・・」

「

「あつ霧島さん、この卵安かったから1つ譲るよ。これで雄二においしい手料理でも作ってやりな！」

「わかった。神木いい人」

「どつたましてー」

そういつて卵を1つ譲ると霧島さんは雄二を引きずりながら帰って行った

・・・でもまさか雄二が霧島さんと付き合ってるなんて驚きだなんだでもつて少し…いやかなりうらやましいな…

俺もいつかは彼女ができるのかな？あいつにもいずれ・・・まっとかく待たせている秀のそこに行かないとな

第二十話 卵焼きはだし派？砂糖派？醤油派？

「さて、皆、総合科目のテストご苦労だった」

ところ変わって次の日、教壇の前で雄二が堂々と皆の前で言っている今日は午前もテスト、そして今さっき昼ご飯を食べたばかりだ。もちろん今日の弁当はハムエッグさ！

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺るきは充分か？」

あれ？今言葉のニュアンスがおかしかったような？

「「おおーっ！！！」」

すごい気合いだ・・・

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。そのため開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない」

「「おおーっ！！！」」

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共！きつちり死んで来い！」

「「「「おおーっ！！！」」」」

今あきらかに士気があがった！！すごいな姫路さん！

キンコーンカーンコーン

Bクラス戦始まりの合図が鳴り響く・・・ってか思うんだが他クラスは授業が始まるのに試召戦争なんてしていいのだろうか？・・・まっいいか

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！！」

「「サー、イエッサー」」

雄二の合図でクラスメイトはBクラスを目指して駆け抜けていく

「さて、俺もそろそろ行こうかな？」

「おい、神木。」

「なに？雄二」

俺ら以外誰もいなくなった教室で雄二が話しかけてくる

「お前昨日はよくも・・・と言いたいところだがまあ水に流してやるう」

「いやいやむしろ感謝してほしいくらいなんだけど」

「まで、なにか勘違いしてるぞ。俺と翔子はまだつきあってない」

「ほう、まだ？」

「ゲフンゲフン これからもだ！！」

咳払いで誤魔化すけど少し顔が赤い、どうやら複雑な事情でもあるのだろうか

「まっとにかくだ、昨日のことはクラスのみんなには黙っといてくれ」

「ん、りょーかい」

まあばれたらばれたでクラスメイトは暴動を起こすだろうしな

「んで？俺つちになんかあるんでしょ？」

「ああ、とりあえず今日はお前に俺の護衛をしてほしい。Bクラス代表は噂通りの卑怯者だ。俺1人だといろいろ危ないからな」

「なるほど、まっBクラス相手にどこまでできるかわかんないけどがんばるよ」

「失礼しまーす。Fクラスの坂本君はいますか？」

「誰だっ！」

「おおっと待った。そう警戒しないで。Bクラスの使者です」

「使者だと？」

「はい、うちの代表が“早く帰りたいから4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する”という協定を結びたい”そう言ってたんだけど」

「ふむ・・・いいだろう。」

「そう？んじゃ調印結ぶため講義室まで来てくれる？」

「ああ」

(ちよ雄二、いいの？そんな条件受けちゃって)

(姫路のためだ。あいつは体力が少ないからな。勝つために体力は必要不可欠だ。念のためお前もついてこい)

(わかったよ)

そういつて俺と雄二は教室を後にする

第二十話 卵焼きはだし派？砂糖派？醤油派？（後書き）

silverさん！感想ありがとうございます！！

設定等好きになっていただけてすっごいうれしかったです（*、

、*）

秀吉に関してもいろいろ考えているので楽しみにしていただけたら
と思います

これからもよろしく願います！！

第二十一話 念には念を入れましょう

協定の調印を終え教室に戻るとすでに秀と吉井がいた

「うわっ」

教室を見渡すとちゃぶ台が壊されていたりシャーペンなどもへし折られていた

「ひどいね、これじゃ補給がままならない」

「うむ、地味じゃが、点数の影響に出るいやがらせじゃな・・・つとセンリどうしたのじゃ？」

「生まれてきたことを後悔させてやる・・・」

「ちよっ落ち着くのじゃセンリ！おぬしはいつもカバン持ち歩いとるからちやぶ台や座布団以外被害はないじゃろう」

「ふふふ、秀の物を壊したことは俺たち一族を敵にまわした事も同じっ！！」

「お、落ち着くのじゃ。おぬしが勝手に行動してしまえばせつかくの作戦が無駄になってしまうのじゃ」

「むっ：秀がそこまで言うのなら」（あとで殺すぜってー殺す）

「はあ先が思いやられるのじゃ」

その後雄二は協定の内容を吉井たちに話した

「なるほどね」

吉井は少し納得したようだが何か腑に落ちない様子だ

「明久、とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かかされているのかもしれん」

「ん、そうだね」

そういつて2人は教室をあとにする

「なあ雄二？俺も前線に行ってきたいいかな？ほらぼちぼちみんな戻ってきてるし」

「ふむ、まあいいだろう。協定を結んできたってことは今日は何も

してこないだろうしな」

「よし！んじゃ行ってくるね」

「いいか、今日のノルマは達成してくれよ」

「ん、りよーかい」

そういつて俺は前線に向かっていった

第二十二話 言葉って大切だね

ふんふふーん

え？なんでテンション高いかって？そりやもちろん根本君をぼこ…
失礼。八つ裂きにできるからだよ！

とっ、とにかく戦況を把握してみよう！

ええーっとまず吉井のところは…島田さんが人質になっていて秀の
ところは大丈夫だな

さてどつちに加勢しようかな…ってなんで島田さん人質になってん
だ！？

と、とりあえず吉井のほうへ行ってみよう

「そこで止まれ！それいじょう近寄るならこの女を補修室送りにす
るぞ」

「くっ」

どうしよう下手に動けば島田さんが補修室に…

ん？廊下の隅に見慣れた人物が…「オネエサマオネエサマオネエサ
マ」うん！気のせいだ！

「清水、こんなところで何をしている。Dクラスは授業中のはずだ
！さあ来い」

「ああーお姉様ー！！」

西村先生ナイスです！！できるだけそいつをどこか遠くへお願いし
ます！！

「吉井、この状況どうする気だ！？」

お前なら、きつと島田さんを…

「総員突撃用意っ！！」

「ちよっと待てい！！俺の期待を一瞬で裏切んじゃねー！！」

この状況で女の子を見捨てるなんて男として最悪だぞ！

「ま、まで、吉井！」

敵もだいぶ焦っているな。大丈夫俺も内心冷っ冷だ！

「コイツがどうして俺たちに捕まったのか知ってるか？」

なるほど、島田さんのことだきつといい理由に違いない

「馬鹿だから？」

「殺すわよ」

うおっ離れていてもこの殺気！さすが島田さん！

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かっていったんだよ」

やっぱり優しいんだな。もしかしたら彼女はお姉ちゃん気質の持ち主かもしれない

「島田さん・・・」

「な、なによ」

島田さんは照れているのかほんのり顔が赤い

「怪我した僕に止めを刺しに行くなんてあんたは鬼か！」

「「違う（わよ）（だろ）」」

思わず島田さんとハモツてしまった。

たぶん日頃の行いのせい…なんだろうな

「ウチがあんたの様子を見に行ったら悪いっての！？それでも心配したんだからね！」

本音をぶちまけて顔が真っ赤になってる

なんか春だなーって感じた。いいな！

「島田さん、それ…本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

だが戦況はまったくもって変わってない

さあここは腕の見せ所だぞ吉井！

「へっようやく分かったか。それじゃおとなしく…」

「総員突撃ーっ！！」

「『どうしてだ!?!』」

「あの島田さんは偽物だ!変装している敵だぞ!」

いや、待て吉井。あれは絶対本物だぞ!!!

「おい待てつて!!!コイツ本当に本物の島田だつて!」

「黙れ!見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!」

あーあ…俺助けないからな吉井。

みんなが島田さんを人質に取っていた2人を倒してるあいだ俺は先ほどから無言でもものすっごい殺気をばらまいている島田さんの縄を解いていた

「神木君!!!何しているんだ!それは偽物だぞ!」

「なあ島田さん。どういう情報が流れてきたんだ?」

「『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』つて聞いて心配したのに…」

「包囲中止!これ本物の島田さんだ!」

吉井、俺はお前の頭の中がどうなっているのか知りたいぞ!

「島田さん大丈夫だった?」

「………」

「あー、島田さん?」

「……なによ」

なんか悪い予感がする…

「僕、本物の島田さんだつて初めから気づいていたよ」

その日俺は学校生活で初めて一方的な虐殺を目の当たりにしました

第二十三話 「よそはよそ、うちはうち」人生で1回は言われる気がする

とりあえず、いろんな意味で瀕死の吉井と点数とやばい人たちを教室に戻してつと

俺達は秀たちに合流する

「む、センリか。前線に出てきたのじゃない心強い」

「ああまかせてくれ」

秀とやり取りしているうちにもBクラスの方々は俺たちの前に立ちふさがる

「増援か？まつしよせんFクラス、俺たちに敵うわけないぜ」

おつ随分自信满满だな。雄二の考えにはあんま賛同できねえが肩書クラスきだけが実力じゃねえって事見せつけてやるよ

「秀、援護する。サモン試獣召喚」

目の前に魔方陣と俺の召喚獣が姿を現す

真っ黒なコートとマフラー、俺の分身が出現する

『 Bクラス 増？ 光一 VS Fクラス 神木 千里
数学 125点 390点 』

「なっ！この点数…お前本当にFクラスか！？」

「ふふふ…さあて増？君？Fクラスを襲撃した犯人をご存知かな？」

「センリ…目がすっごく怖いのじゃ」

「くっ…だがお前の召喚獣武器持ってないじゃないか！」

そう、俺の召喚獣は武器を持っていない…今はな

「ふはははは！神木流武術見せてやるぜ！」

そういつて俺の召喚獣はコートの中からナイフを数本出し増？君に向かって投げる

ポフン

音をあげて増？君の召喚獣が消える

「くそ、俺がこんな奴らに負けるなんて」

「戦死者は補習！」

どこからともなく現れた西村先生に増？君は連れて行かれる…先生、お疲れ様です！

「木下君、神木君ってすごいんですね」

「ああ、苦手な科目もあるようじゃが目的のために努力する奴じゃ」

「そういえばこんな点数取っているのに私名前すら聞いたことなかったんですが…」

「あーそのことなんじゃが…センリは目立ちたくないと理由で真ん中くらいの点数を取っていたらしいのじゃ」

「えっ!？」

「ほれ、成績優秀者は廊下やら教室やらに名前が載るのがいやだったらしい…そのことに気付いた時の姉上はまさに鬼のようじゃった

…」

「木下君も大変なんですね…」

第二十四話 今日からカレーに突入します

とりあえず時間になったので“協定”どおり休戦になる
雄二の作戦通り何とかBクラスの教室前まで攻め込んだ

「ところでセンリ、ずっと思ってたんじやが」

「ん？どした？秀」

「今回の戦闘でおぬしだいぶ目立っつつたみたいじやが…よかった
のかのう？」

「…あっ」

.....

「ここは…どこ？」

「あっ吉井君。気づきましたか？」

どうやら吉井が目覚めたらしい

頭にはでっかいタンコブがありそれを姫路さんが氷で冷やしている

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に
頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして運ばれてきたんです
から」

姫路さん、それ正解！！すごい洞察力だな！！

まああの怪我は吉井の自業自得なんだがな

「そついえば試召戦争はどうなったの？」

「今は協定通り休戦となっておる。続きは明日じゃ」

「まっ誰かさんがボコボコにされて意識失っていたおかげで作戦通

りうまくいったぞ」

「ちよつと雄二！それじゃまるで僕が足手まといみたいじゃな」
「そ
うだが？」

「ひどい！せめて最後まで言わせてよ！！神木君も笑ってないで何
か言つてよ」

「んーもう吉井が悪くていいじゃないか？」

「味方がいないっ！」

「はいはい、すねてないでさっさと姫路さんに治療してもらいな」

「はい！吉井君ちよつと痛いかもしれませんが我慢してくださいね」
そういつて吉井のタンコブを消毒する姫路さん

うわっ吉井すっごい嬉しそうだ

「んで結局今のところ順調ってこと？」

「そういうことだな」

ガラッ

ムツツリーニが教室に入ってきた

そついえば雄二に偵察頼まれていたな

「ムツツリーニ、どうだった？」

「…Cクラスが怪しい動きをしている」

「まさか漁夫の利を狙うつもりか？」

どうやらCクラスは勝った相手と試召戦争するつもりなのだろう

「雄二、どうするの??」

「ふむ、一応Cクラスと協定結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませ
るぞとか言つて脅しとけば俺たちに攻め込む気もなくなるだろう」

「それに僕らが勝つなんて思つてもないだろうしね」

「よし、じゃ今から行くか」

「秀吉は念のためここに残つといてくれ」

「ん、なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「ああ、万が一のための作戦のためにお前の顔がばれない必要がある」

「よくわからんが雄二が言うのなら従うのじゃ」

「すまん」

「あー雄二？ごめん俺は帰るね」

「なにかあるの？神木君」

「俺が今帰んなきゃ我が家の食卓は地獄となる・・・」

そう、妹の手によって・・・

「そ、そうじゃの！明日の試召戦争にひびくのじゃ！」

「そうか、お前が来たほうが心強かったがしかたない。気をつけて帰れよ」

「うん！ありがとーんじゃまた明日ー」

第二十四話 今日からカレーに突入します(後書き)

エイプリルフル!!

本日3回だまされました!(笑)

第二十五話 2日目のカレーはコクがでてうまい

「しまった！こっちは行き止まりか！」

Bクラス根本の策略によりCクラスにて罠にかかった雄二たち

吉井たちは雄二達を逃がすため追っ手を引き受けたがあともう少しで教室つてところで待ち伏せにあってしまっ

「ははは！坂本討ち取ったりー！！」

「さ、させません！美波ちゃんや吉井君たちの死をここで無駄にはさせません！」

（いや、あいつら死んでないんだがな！）

「「試獣召……」」

「はいー！！2人ともそこまで」

「だっ、誰だ！！」

突然の乱入者に全員の視線は1つに集まる

「えっ？なんか視線が痛いんすけど……まあいいや“試召戦争監査委員会”略して守護者のセルシウスっていいいます！」

「……はあ……？」「」「」

（（ここはいろいろツツコむところなのか……？））

説明しよう！

これは作者が勝手に考えた設定なのですがこの学校には試召戦争管理委員会というものをもうけており、いくら戦争といえど度が過ぎるもの（いじめや物品の破壊等）もいままであって学校問題になっており、それを見かねた学園長が各学年で1人か2人を選んで活動させている、いわゆる試召戦争のために動く生徒会みたいなものらしい

ただし！その委員に選ばれた人物は偽名で名乗り正体をばれないように、そしてすべてのクラスを平等に見極めるよう努めなければならぬ

その特典？として専用の制服があり（活動するときは絶対着なきやいけないが）この服は特別な素材できていて召喚獣に直接攻撃できる（もちろん召喚獣からの攻撃も喰らいます）
ちなみに3学年の高橋来も委員であり、委員会をまとめる長だった
りもする

「ええーっと、その、試召戦争監査委員会さんがどうしてこちらに？」

「ああそうそうー！！コホン。Bクラス生徒がFクラスの物品の破壊及び教室への嫌がらせ等を行ったと報告がありましてその調査のためやってきたしだいでありマス！それで現在休戦中と聞きましてこちらに向かったわけでありマスがこれはどういった騒ぎで？」

「チツ…（そっういえば委員会の奴は召喚獣に触れる分召喚獣の攻撃も受けるって聞いたな。ならっ！）試獣召喚！！」

「おやおや、いきなり攻撃してくるといふことは何かやましいことでもあるのでしょうか？」

「うるせー！俺はここで坂本を討ち取らなきゃいけないんだっ！！」

Bクラス男子の召喚獣が自称セルシウスに向かって剣で斬ろうとする
しかし紙一重のところをよけられ反撃を喰らわせられる
もちろん殴られた分相手の召喚獣はダメージをうけていた

『Bクラス 山田真一

英語R 88点』

「なっ！140点あった召喚獣のスピードをかわすなんて・・・」

山田君が驚いている間に我に返った先生が召喚フィールドを消す

「ええつと山田君？ちよつと署（という名の生徒指導室）まで来てくれるかな？」

「えつちよっ」

そういつて自称セルシウス殿は山田くんをずるずると引きずりながら雄二たちの前から消えていった

「なあ姫路」

「なんでしょう坂本君」

「結局なんだったんだ？」

「さあ？」

さすがの元神童と学年2位にもこの事態には頭がついて行かなかつたようであった

第二十五話 2日目のカレーはコクがでてうまい(後書き)

捏造しません！

かなり自己満です

4月から学校がはじまるので更新遅くなります) > | < (

一応学生なので両立目指して頑張ります！

友達できるかな・・・(笑)

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
「ちよつと待て秀！まず話し合おう！そして落ち着いて考えなおせ
っ！自分をしつかり保つんだ！」
お前そんなだから優ちゃんの間違えられたり優ちゃんよりモテた
りして…とぼつちり喰らうのは俺なんだからな！！
「ふむ。やはり神木が障害だったか。情報通りだな」パチン
雄二の指ならしと同時に俺の前に見慣れた人物が現れる
「兄さん？秀兄の邪魔はさせないよ！」
そういつて俺にある写真を見せてくる…あれ？これは…

「あー神木妹、協力感謝する。」

「いえいえ、秀兄の邪魔をする奴はたとえ兄でも鬼でもボコボコに
します」

ピースしながら突如現れた神木妹こと神木エリは気を失ったあと口
ープでくるまれた兄を踏みながら言う

「か、神木君は大丈夫なんですか？」

「あー大丈夫ですよ。気を失っているだけです」

「ねっエリちゃん、どうやったの？」

普段ボコボコにやられている吉井はここぞとばかりに彼の弱点にな
りそうなものを聞く

「えつとですなー…」

「エリ…言ったらあの事秀にばらすぞ」

「チツ、もう起きたかバカ兄。」

危ない危ない、もうすぐで弱点がばれることだった…

えっ？何を見せられたかって？

それは…去年の夏に行った時の優ちゃんの水着姿…おっと鼻血が…

第二十七話 影響受けちゃったことありますか？

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

着替え終わった秀がカーテンから出てくる…もちろんその場で着替えようとしたのをまわりが全力で止めたのはいつものことだ！

「はうあー秀兄かわいいつ！！すごいかわいい！！持って帰りたい！！！」

秀のまわりには鼻血を出しながらカメラを構えるムツツリー二とケイタイで写真をとる妹が暴走していた・・・

「なんだか複雑なのじゃ」

そりゃそうだろう、だからやめとけって言ったのに…

「んじゃCクラス行くぞ」

「さ、坂本先輩！これが終わったら“例の約束”お願いしますねw
」

「わかってる。まあ俺には必要ないしな」

「なあ雄二？約束ってなんだ？」

「秘密だ。まっお前は家族なんだから帰ったらわかるさ」
ふむ。なんなんだろう…？

.....

「さて、ここからはすまないが1人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのか・・・」

あんまり乗り気じゃない秀

そりゃそうだろう、優ちゃんにばれたら俺も秀も…ああ考えただけでゾツとする

まあ俺としては優ちゃんの評判が悪くなるのはすごい嫌なんだが、こっちは縛られてかつ妹から殺気を常に向けられてちゃ動けねーよ…

「秀兄！頑張つて！」

「むう… エリに言われちゃ… 仕方ないのう」

「頼むぞ秀吉。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ」

「はあ… あんまり期待はせんでくれよ」

「本当に乗り気じゃなさそうだな… まっでもスイッチ入ったらあいつはすごいからな」

「雄二、秀吉は大丈夫なの？いくら演劇のホープでも…」

「吉井先輩？秀兄を侮辱するなら殺しますよ？」

「秀をバカにされたのが気に触ったのか吉井の背にクナイを突き付けながら言う」

「うん！秀吉なら大丈夫だね！！！」

「自分の危機を知ってか変わり身が早いな吉井！あいつ実はすごい奴なんじゃ…」

「静かに！秀兄がCクラスへ潜入しました」

「よし、気づかれないようにこっそり聞くぞ」

ガラガラガラ

「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！」

あ… あいつ家と学校がごっちゃ混ぜになってるな…

「さすがだな、秀吉」

「うん、これ以上ない挑発だね」

「さっすが秀兄！！かっこいい！かわいい！」

うん！一人なんか感想がおかしかったな！

「な、なによアンタ！」

「話しかけないで！豚臭いわ！」

「アンタ、Aクラスの木下ね？ちよつと点数がいいからっつていい気になってるんじゃないわよ」

ちよつと待て、ちよつとじゃねーよ！優ちゃんの方がお前の100倍すげーっつの！！

…しかし秀、もしかして昨日見たドラマのキャラ混じってねーか？
「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの！！」

うん！間違いない！昨日見たドラマ“ラブコメ学園”第23話、恋
多き女たちの戦い！！”のライバル役の演技うまかったもんな

「なっ！言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！
？」

「手が汚れてしまうのは本当に嫌だけど、特別に今回は貴方達を相
応しい教室に送ってあげようかと思うの」

（ねえ神木君。）

（なんだ？）

（演劇部ってここまでできないとだめなの？）

（・・・さあな？）

さすがに声帯模写までできなくてもいいと思うぞ

「丁度試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。

近いうちに私たちが薄汚い貴方達を始末してあげるから！」

第二十八話 いじめは許さないぞっ！

「これで良かったのかのう？」

教室に帰り、秀は日頃のストレスを発散しすっきりしたように言う

「ああ、上出来「秀兄かつこよかったよ〜！！さっすがだね！！」

エリが雄二の言葉を遮り秀を褒める

「まっ確かによくやったよ秀。優ちゃんの評判を下げるようなことをしたのは気に入らねえがな！」

「ううすまぬのじゃ。あ、姉上には秘密にしてほしいのじゃ」

「さて、どうしようかな〜」

「兄さん、コレいる？」

エリが俺に向かって一枚の写真を突き出してくる

へ、俺は買収なんかされないぜ！！

「絶対言わない。神に誓って」

アレ？おかしいな？口が勝手に…

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！！」

秀の声が戦場に響く

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』のこと。秀、頑張ってるな

I W W

えっ？俺は今どこにいるかって？…もちろんBクラスの天井裏さ！

なんか雄二に頼まれて『もしものための待機』だそうで

ちなみに天井裏は結構明るいから安心安心。

さてさて、下はどうなってるかな〜と…

「誰かー！！左側に援護を！！」

「私が行き…あつ…」

ふむ、やっぱり苦戦してるか…ん？姫路さんの様子がおかしいよう
な？

すると吉井が姫路さんに近づいていく

「姫路さん、具合が悪そうだからちよつと戦線から離れたところに
いるように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから体調管理に
は気を付けてもらわないと」

「…はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あつ…」

吉井は教室に向かつて走って行った。…なるほどね

「姫路さん、大丈夫？」

「あつ…神木君」

「あのね、きつと今から面白いことが起こるよ」

「面白いこと…ですか？」

「そつ！だから吉井の言うとおりちよつと離れててね」

吉井！お前の覚悟見せつけてやれ！

第二十九話 カニ、カニ、カニ

それから数十分後、雄二も戦場に出てきた。

「神木、作戦は少し変更する。姫路がやるはずだった事を「吉井がやるんだよね?」

「ふっ、さすがだな。まあ何があったか俺はくわしくは知らないが、アイツをあそこまで怒らせることを根本はしちやっみたいだな」
「そだね。女の子を泣かす奴はボッコボコにしてあげなきゃね」

熱い。まだ教室の入り口だが熱気がムンムンだ。

まあ俺がちよつと細工してクーラーから熱風を出させているんだけどね

ドンッドンッ

「お前らいい加減にしろよな！昨日から教室の入り口に集まりやがって！クーラーも壊れてるみたいだし暑苦しいんだよ！」

「どおした？軟弱なBクラス代表様はもうギブアップか？」

根本だけでなくまわりのBクラス生徒も暑くて汗をかきまくっている
ドンッドンッ

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ。頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「お前ら相手じゃ役不足なんだな。」

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお！」
ドンッドンッ

「負け組代表？それは数分後のお前のことだよ。」

すごい！言葉だけでこんなにイライラさせられるなんて！！
こいつら将来弁護士とかなれんじゃね？

「くっ！近衛部隊っつ！俺を守れ！」

「Bクラス山本が吉井と島田に試召戦争を仕掛けます！」

「しまったっ！」

「は、ははっ！驚かせやがって！…だが残念だったな！！お前らの奇襲は失敗だっ！さっさと降参しろよ！」

…そういえば昔母さんが言ってたな。

『人間、窮地におかれると自分を守ることに必死になるの。そのせいで周りが見えなくなっって普段は起こさない失敗をよく起こすようになるのよ』ってな！

ダンッダンッ！！

突如窓から2人の人影が現れる・・・ムツツリーニだ！

「……Fクラス、土屋康太」

「きっキサマツ……！！」

「……Bクラス根本恭二に」

「こ、近衛部隊はどうしたっ！！」

「残念だったね根本君、今ここで僕と戦っている山本君で最後だったんだよ」

「…保険体育勝負を申し込む」

「ムツツリイイイーニイイイッ！」

「試獣召喚」

『Fクラス	土屋康太	V S	Bクラス	根本恭二
保険体育	441点	V S	203点	』

第二十九話 カニ、カニ、カニ (後書き)

作者はカニがトラウマですww

第三十話 中学の頃の知人とかに会うとテンションが上がるのは自分だけでしょ

「明久、ずいぶんと思いついた行動に出たのう」

「ああまさかお前がここまでするとは思わなかったよ」

「うう…痛いよう…痛いよう…」

吉井の手はすんごく痛そうだ…

「なんとも…お主らしい作戦じゃったな」

「でしょ？ もっと褒めてもいいよ」

「ふむ…後のことも考えず自分の立場を追い詰める。男らしい素晴らしい作戦じゃったな」

「すごくかつこよかったぜ！ 俺にはマネできねーよ」

「…遠まわしに僕のことバカって言ってるやない？」

「まっそれが明久の強みだからな！」

急に吉井の後ろから現れる雄二 なるほど吉井の長所はバカか…

「さて、お待ちかねの“嬉し恥ずかし戦後対談”といくか。なあ？
負け組代表？」

「………」

うん、さすがの雄二も今までの鬱憤が溜まってるみたいだ。すっごく怖い

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントしたいところだが…今回の戦いはあくまでAクラス戦への布石。だからBクラスが俺たちの条件を呑めば解放してやるう」

「……条件はなんだ」

「お前だよ。負け組代表さん。」

な、なんだって！！

「ゆ、雄二。お前そういうご趣味が…」

「勘違いするな！ そういう意味じゃねえよ！！」

「んじゃどついう意味なんだ？」

「Aクラスに行つて試召戦争の準備があると宣言してこい！！ただし
宣戦布告はするな。あくまでも戦争の意思と準備があることだけ
を伝える」

「……それだけでいいのか？」

「ああ。……ただしお前がコレを着ていくことが前提だ」

すると雄二はどこからともなく上下ピンクのフリフリした服を出し
た。もちろんスカートはミニである。

「本当は制服にしたかったんだがな」

「……神木の妹に制服をもつてかれた」

なるほど。やつと謎が解けた。

しかし、そのフリフリは根本に似合うのか？

「ば、馬鹿言うな！！俺はそんなことしないぞっ！！」

……と言っているが、Bクラス諸君、どうかね？」

まあ俺もあんなの着て且つ優ちゃんのいるAクラスに行くとなりや
明日から不登校になるぞ！

「任せてくれ！Bクラス全員で必ずやらせよう！！」

「このチャンス逃すものですか！」

「これで教室が守れるなら根本の1人や2人生贄にしたって構わな
いな！」

根本、お前ここまで嫌われてるなんて、珍しい奴だな！

「よし、決定だな！」

「ちよ、待て！俺はまだ了解してな……ぐふう！」

「黙らせました！」

「お、おう。ありがとう」

根本はBクラス生徒に殴られ気絶する……殴つたのは女子だ。
いやあ、最近の女子は強いな！

「では、着付けに入るとするか。明久、脱がすの手伝ってやれ！」

「了解。」

数十分後・・・

「おい！ このスカート短すぎるぞ！」

「うるさいっ！ さっさとAクラスに行くぞ！」

根本の気持ち悪：失礼。吐き気のする格好でAクラスに連れてかれる
・・・優ちゃん大丈夫かなあ

「センリ、そろそろワシ等も帰るぞい」

「お、おう！」

ん？教室に誰がいる・・・ はっ！

（秀、隠れる）

（ど、どうしたのじゃ？いきなり・・・）

（いいから、こっちこっち）

そういつて廊下の窓を気づかれないように少し開けて中の様子を探る

Fクラス教室内・・・

「で、いつ告白するの？」

「え、ええっと・・・全部終わったら・・・」

（なるほど。姫路と明久じゃな）

（ああ。なんかいい感じだが・・・）

「そっか。それなら手紙より直接言ったほうが喜ばれるんじゃないかな」

「よ、吉井君は直接言われたほうが嬉しいですか？」

「うん。少なくとも僕は直接言ってもらったほうが嬉しいよ」

「本当ですね？ 今の言葉、絶対忘れないでくださいね！」

「え？ あ、うん」

（吉井、絶対気づいてないよな）

（ああ。惜しいことをしておるの）

「そういえば、吉井君。先ほど先生から吉井君に渡してほしいとプリントを預かったんですが・・・」

「え？ ありがとう。 何々… 『今回の試召戦争についてお話したいことがございますので至急生徒指導室へ来てください！ サボった場合、あなたの大事な人が目の前でいなくなるかもしれないかもよ風紀委員会より』… だって!？」

ガラッ

「おい！ その話、本当か!！」

「え、な、なんで神木君と秀吉がいるの?」

「そんなことはどうでもいい！ その話は本当なのか!」

「う、うん。ちゃんとここに書いてあったし…!」

「チッ!」

第三十話 中学の頃の知人とかに会うとテンションが上がるのは自分だけでしょ

長っ！そして中途半端ですいません（汗）

そしてそして！魔王さん！感想ありがとうございますっ！！

もんのすっごく参考になりました！そして同時にテンションもあがってますよ！！

頑張っ直していこうと思います

ほんと感謝感動です！

第三十一話 ニボシニボシニボシ〜 ニボシを食べ〜ると？

「チツ！！」

「どうしたのじゃセンリ。」

「どうもこうもない！風紀委員つていや、海谷かいたに 理緒りおの作った委員だぞ！」

「なんと！！」

「あの…そのリオつて人はお知り合いなんですか？」

「知り合いも何も…昔からやたらと木下家にちよつかいをかけてくる敵…いや、変態野郎だ！！」

「…へ？」

吉井も姫路さんも何のことかわからず首を傾けている

ガララ

「おうおう、人のこと変態扱いすんなよセンリ君。これでも一応先輩なんだから…な？」

「少し早く生まれたからつて調子に乗らないでください」モグモグ突然開いたドアから黒髪の男子と茶髪の小柄な女性が入ってくる…風紀委員だ。

「それは大変お赦しいお言葉で…つてアズちゃんも年下なんだから俺のことを敬つてよ！！」

「それは全身全霊で遠慮いたします」モグモグ

「ひどいな〜俺泣いちゃうよ〜？ つてかニボシ食べながら会話しないでよ」

「私からニボシを取り上げたら殺しますから。 さて今日はみなさまにご挨拶に来ました」

「そうそう。なかなか吉井君が来てくれないから俺たちから挨拶しに来たってわけよ あっ！ちなみにあの手紙の内容80%嘘だから

気にしないでね！」

「はあ……」

「リオ！俺たちに何の用だ！」

「おいおい熱くなるなよ。ホントは試召戦争については試召戦争監査委員会様がせにやいかんのやけどね。どうやら忙しいみたいだし？そこで今回は“教頭”のご命令で俺たちが出向いたってわけよ」

「…教頭だと？」

「そつ。一応顧問だしね。ねえアズちゃん“今回は特に何もありませんでした”でいい？俺もう帰りたいんだけど……」

「そうですね。今日はニボシが大安売りでしたし…では失礼します」

「じゃなー！ 秀吉君、センリ君、優子ちゃんによろしくなー！」

「「よろしくされてたまるかあぁー！」」

義なのだろう

それならその正義を最後まで見届けさせてもらいましょうか！

「さて、Aクラス戦だが…これは一騎打ちで決めたいと思う。やるのは俺と翔子だ。」

「反対ー！！反対ー！！ 先生、坂本君がおかしくなりましたー」
そんなことさせてたまるかあっ！俺と優ちゃんの約束をやぶることになっちまうじゃんか！

「そうだ！雄二の馬鹿が勝てるわけなああ！」

あと数センチで吉井にカッターが当たるところだった

まあ脅しだろう。いくらなんでも親友に刃物なんて…

「チツ！ 次は当てる」

・・・最近人をあまり信用できなくなってきたのはきつと、こいつらのせいなんだろうなあ

「なんで神木君には何も無いのさ！」

「まあみんなも知つてのとおり翔子は強い。まともになりあえば

100%俺たちが負けるだろう」

「ひどい！シカトなんて！！ シクシク」

「明久、黙って聞け。とにかく皆、俺を信じて任せてくれ。昔神童とまで言われた力を皆に見せてやる」

さて…どうしようか俺！

第三十三話 風邪はかかった時ツライのさ

あーもう！どうしようかどうしてくれようかつ！
とにかくどうにかして俺と優ちゃんが戦う機会さえあれば何とかな
るはずなんだけどなあ

どうやら雄二は日本史で一騎打ちをする予定みたいだ。キーワード
は『大化の改新』！

だけどそこだけ間違っても98や99点軽々と取ってくるだろうな
…学年1位だし

雄二が絶対100点取れるって言うんなら文句なしなんだが…

「そういえば坂本君、霧島さんとは…仲がいいんですか？」

「そういえばそうね。名前で呼んでたみたいだし…」

「ああそのことか。あいつと俺は幼馴染なだけだ」

いや待て！この前は夫婦って言ってなかったか？（言っていない）

「総員！！用意！！！」

「なっ！？なぜ明久の掛け声で全員が上履きを構える!？」

「だまれえ！男の敵！今ここで貴様に制裁を与えてやる!!！」

雄二の周りには俺、秀、島田さん、姫路さん以外の人間が上履きを
構え、今にも投げつけそうな殺気を出している。…一部靴下など持
ってるやつもいるが。

「待つんだ須川君。靴下は押さえつけた後に口の中に押し込むもの
だろう？」

「了解です隊長」

ちよつと雄二がかわいそうに見える

「あの、吉井君」

「なんだい？姫路さん」

「よ、吉井君は…霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃまあ。美人だし…」

「……」

「えっ！ちよつと姫路さん！？壁に刺さってたカッターを僕に向けてないで！！それと美波も教卓なんて危険なものをどうして僕に投げようとするかなあ!？」

お、お、女って怖っ！ 吉井もこの子たちの気持ちに気づかないのも悪いがどうか死なないことだけを祈っというてやるよ。

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆。」

秀が手をパンパンと叩いて少し静寂が生まれる。 救世主の登場か！？

「秀吉は雄二のことが憎くないの？」

「皆ちと冷静になるがよい。相手はあの霧島翔子じゃぞ。例の噂が本当なら…」

「雄二には興味が無いってことだろ？」（サンキュー秀。助かった）

「そういうことじゃ」（なに。今度ケーキでよいぞ）

「むしろ興味があるとすれば…」（まじか！ んー…しゃーない！ 今日持つてつてやるから）

「そうじゃ」（わーいなのじゃww）

全員（男子）の視線が一ヶ所に集まる

「ふえ？な、なんですか？ 私が何かしましたか？」

「いや…何かしたっていうか、何かされる？」

「???」

うん、世の中には知らない方がいいってことはたくさんあるしな！

「と、とにかく！今からAクラスに交渉にいくぞ！」

第三十四話 口より先に手が出ます

「一騎打ち?」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

ああ…優ちゃんの視線が痛いくらい突き刺さる…

「却下ね。普通に戦って勝てる相手に有利な条件で負けたらたまらないもの」

優ちゃんは相変わらず学校ではいい子ちゃんという仮面をかぶっている

これは昔から変わらない。小学校の時も中学校の時も優ちゃんは仮面をかぶっていた

秀も演劇界のホープと言われているほど役者だが優ちゃんもそれなりにすごいと思う

…んでもって秀と優ちゃんを見比べて必死に自制心を保とうとしている吉井!あとで覚えとけよ!

「賢明な判断だな。　そういえばCクラスとの試召戦争はどうだった?」

「えっ?　別に時間はとられたけど問題ないよ。」

「Bクラスとやりあう気はあるか?」

「Bクラスって昨日来ていた…あの?」

「ああ、アレが代表やっているクラスだ。」

「でも、BクラスはすでにFクラスと試召戦争していて負けているんですよ?」

「いや、一応『和平交渉にて終結』となっている。　ちなみに試召戦争監査委員の認可もある。」

そういうと雄二は一枚の紙を優ちゃんに見せた。

「うん、どうやら嘘じゃないみたいだね。…でもだからと言って代表同士の一騎打ちを引き受けるとは言っていないよ。　そうだねえ…

一騎打ちは一騎打ちでもせめて各クラス5人選んで1人ずつ戦うってんならいいかな？ もちろん三回勝てばその時点でそのクラスの勝利ってわけ。どうかしら？」

「ふむ…なら勝負する科目はこっちに決めさせてくれるか？ FクラスがAクラスに挑むんだ、そのくらいハンデをくれてもいいだろう？」

「え？ うーん…」

そうか、Aクラスを万能型とするならFクラスは特化型だからな。科目によってはなかなかいい勝負になるかもしれない。んでもってあの優ちゃんに口で互角に戦うなんて…さすが元神童！

しばらくの沈黙の後見慣れた人物がAクラスから出てきた

「…その勝負受けてもいい」

「？うわっ！」

ボーツとしていた吉井は驚いたのか声をあげた

「雄二の提案受けてもいい」

「え？ 代表いいの？」

「うん。でもその代わり条件がある」

「…なんだ？」

「…負けたほうは勝ったほうの言うことを何でも聞くコト」

「…こういうことをデジャブっていうのかな？」

俺が優ちゃんに言ったことにすんごい似てるってか同じっていうか…てか、吉井とムツツリー二は今の言葉聞いてすっごいはしゃいじゃってるし。

あの噂が誤解だったこと今すぐ叫んでやりたいが、それだと雄二の命にかかわるからやめとこう。

「じゃ、こうしよう？ 勝負内容の三つはそっちに決めさせてあげるから残り二つはうちで決めさせて？」

「わかった。一応教科の重複はアリってことにしておいてくれ」

「ちよっと待て雄二！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「心配するな。姫路には迷惑はかけない」

「・・・勝負はいつ？」

「そうだな・・・明日の10時スタートでいいか？」

「わかった・・・優子、交渉お疲れ様。きつと私だけだったらうまくいかなかった」

「いえいえ。クラスのためなもの」

「んじゃ交渉成立だな！俺たちも一旦教室に戻るぞー」

よし！ついに明日は優ちゃんとの対決だ！頑張るぞっ！！

「あ、ちよつと秀吉と神木君は残つといてくれるかな？」

「えっ！？」

(逃げたらどうなるかわかってるわよね？)

(・・・はい)

あー・・・今日生きて帰れるかな

第三十五話 占いの結果に左右されやすいのです

「はい！　じゃあ二人ともまずその上で正座しなさい？」

ええっと…俺と秀は今使われていない旧生徒会室にいる。ここは教室からも離れていて人通りも少ない。

まさにコソコソするのはうってつけの場所である。

そして優ちゃんが俺たちに座れと指定してきた場所は…拷問に使うような表面がギザギザした岩の上である。

うん。こんなところで正座したらすっごく痛そうだ…てか痛いので済むのだろうか？

「ちょ、あ、姉上？　こ、こ、こんなところに座ったら危ないのじや！」

「そ、そ、そうだぞ優ちゃん！」

「座りなさい？」

「はい…」

優ちゃんの威圧感に負けておとなしく座る俺たち。

やばい…優ちゃん笑顔なんだけど…笑顔なだけですっごい怖いんだが…！

「さて、まず秀吉。　Cクラスの小山さんって知ってるかな？」

ん？Cクラス？小山？　どっかで聞いた名前だな…ってもしかして…！！

「????　知らないのじゃ…って姉上！？　どうしてワシの腕をつかむのじゃ？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうして私がCクラスの人を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して…

あ、姉上！ちがつ…！その関節はそっちには曲がらなっ…」

…秀、お前の死は忘れない…！（注：秀吉はまだ死んでない）

そして今のうちに俺は逃げ…ってあれ？足が動かない…！　くそっ

！どうして！！

「センリ？ 逃げようとしても無駄よ。その岩、“尋問はかどーる君”は1度捕まえた獲物はこのカードを入れるまで逃がさない特別性なんだから！…でも代表はなんでこんなもの持ってたのかしら？」
「優ちゃん、霧島さんから借りたんだね…そして雄二、いつもご苦労様です！初めてお前を心から尊敬したよ。」

「さて、本題に入りましょうか…」

ああ神様仏様。あんたらの事あんま信じたことないがどうかこの命お助けください！！

「明日の試召戦争についてよ」

えっ？もしかして祈り通じたの？マジで！？すごっ！

「…なんでそんな嬉しそうにしてんのよ」

「えっ？だつてねえ…秀のあんな姿見たら『秀を止められなかった罰』死』つてなるよ！普通！」

うん。俺の反応は間違つてないはずだ。秀のあの目も当てられない姿。まさか学校でもお目にかかれるとは…

「私がそんな人間に見えると思う？」

「もちろ…」ギユ…

「見・え・る・と思う？」

「いいえ、全然見えませんっ！！」

すんごい力で腕を握られた(汗)優ちゃんリング砕けるんじゃない？

「だいたいアンタのせいで私はあのFクラス代表と交渉しなきゃいけなかったのよ！坂本君、変に頭冴えるから大変だったんだからね！」

「うう…スンマセン」

だよなあ 俺も見ていてハラハラしてたもんな

「罰として明日私が勝つたらお願いは2つ聞いてもらうんだからね」

「えっ？」

「もちろんあんたが勝つても1つしか叶えないから」

「わ、わかった」

どんな無茶ぶりさせられるかと思っていたからドキドキしたけどまあなんとかなったかな？

とにかく俺は明日勝てばいいことなんだ！ よっしゃ！がんばるぞっ！

「あつ、ちなみにその“尋問はかどーる君”は1度つながれると無理やり壊す以外はす方法ないらしいわよ…代表がカギなくしちゃつたらしくて！ あつ！ちなみにさっきのカードはダメーだから！んじゃまた明日さっさとはずして帰ってきなさいよね！」

…ああ！そっぴや俺今日占い最下位だったな！

第三十六話 慣れっていうのは恐ろしい？

「秀っ！秀っ！ おい！起きろよ！」

「むにゃ…もう食べられないのじゃ」

「ええい！ さっさと起きろっ！！」

バシーン

俺はハリセンを使い秀を起こす

「むっ！ 何事じゃ？ 火事か？ 敵襲か？」

「火事ならともかく敵襲ってなんだよ… まあいい。秀、さっさと抜けた関節戻して帰るぞ」

秀が寝ている間に（まあ寝ているというより気絶？）小型爆弾で…ええーっとなんだけ？ たしか“尋問はかどーる君”だったっけか？それを破壊したってわけさ。まあ爆発の音は小型なため威力などは通常サイズの10分の1にまで抑えてあるが、それでも起きなかつた秀はある意味すごいと思う

「ふむ、ちと意識を失う前の記憶があいまいなのじゃが…姉上のせいかの？」（コキコキ）

「ああそうだな。ってか真顔で平然と関節治すなよ。なんか怖いぞ」

「しかたないであろう？ 幼き頃からの習慣じゃからもう慣れてしまったのじゃ」

「いやな慣れだな…」

「お互い様じゃ」

ふと外を見てみると今にも雨が降り出しそうだ

急いで帰らないと洗濯物が大変なことになりそうだ

「秀、雨が降りそうだ！洗濯物のために急いで帰るぞ！」

「うむ。了解した」

「神木、ちと待ちい」

チツ！誰だこんな時に呼び止めるなんて…まさかりオカ？
そう思つて声が出たほうを振り向くと見慣れた姿があつた

「へ？…つてなんだライ先輩じゃないですか。俺はてつきりリオの
変態野郎かと思つてビックリしました」

「おつおつ、相変わらず仲悪いんやな。　とまあそんなことは
置いといて木下、俺ちいとばかり神木と話があるけん先帰つてても
らつててええ？」

「うむ、なにやら告白みたいじゃし、邪魔者は退散するかの」

「えっ！？そんなんですか？　まじそついつの困るんでやめてくだ
さい」

「いや、違つからな！！　でも真顔でハッキリそついわれると傷つ
くんやが…」

そついつと先輩は教室の隅で体操座りになる

「はいはい、うじうじしないでさつさと話してくださいよ。　んじ

や秀、俺の家の洗濯を取り込んでから帰つてね」

「了解なのじゃ〜」
ボタン

ライ先輩は秀がいなくなつたのを確認してから深呼吸をし、俺を真
剣な目で見つめる

正直この先輩が真剣なのはめつたにないのでこちらも自然と緊張が
走…

「実は俺な…好きな人がきてん。」

「はあ」

「なんや、人が一生懸命話しとるのに気の抜けた返事しおつて」

「先輩、俺の緊張返してください」

「???　緊張がどうかしたんか？」

「もついいです。　…んで今回の相手は誰なんですか？」

「今回の」とはなんだ！　俺はいつも真剣なんやぞ！」

「ちゃんと女の子なんでしょうね？」

「なんや？ 俺が一度でも男に告ったような言い方しおって」

「ここに被害者本人がここにいるんですけど？」

前にも言っただがこの先輩はパツと見男か女かわかんなくても気になつたらとりあえず告白

ちなみに俺も秀も被害者である

「カツカツカ！そんなこともう忘れた！ 俺は新しい恋に生きる！」

「あーあ先輩のせいで雨降ってきたじゃないですか」

秀大丈夫かな？

「んで？ この物好きに好かれたかわいそうな女の子って誰なんですか？」

「おっ！よくぞ聞いてくれた！ 聞いて驚くなよ！ 2-Fの…きつと女子だ！」

くそっ！テンションあがりすぎて俺の嫌味にまったく気づいてくれないなんて！

「…先輩。なんでそんな自信なさそうに“女子”って言うんですか？ しかも“きつと”って!？」

「そう！ そこが問題なんだよ！！ 見た感じ女の子なんだがな、心配になって前読んだ『男と女の見分けかた』についての本を思い出しながら確認したんや」

「そうですか」

そういえばそんな本図書室にあつたな…しかも最近一部男子生徒に人気とかなんとかって先生が言ってたっけ？

「それで確認のため本の方法でその子を見極めようとしたんだが…」

「ちよ、先輩？ もしかしてその方法って…」

「ああ、『見分け方その32…胸見りゃわかる』というのを試しとつたんやけど…ってなんで神木は今にも俺を斬りかかるうとするんねん!!??？」

「先輩？ その女子と全国の貧乳の方々に土下座してください!!」

そしてそのまま朽ちていってください！」

「な、なんや！？ 神木は胸ないやつが好みなんか！？」

「ソ、ソナコトナイデスヨ！」

べ、別に俺はあるかないかで聞かれればないほうがいいなあとは思
うが…って違う！今はその問題じゃなくて！

「なんとなく先輩の好きな人わかっちゃったような気がしましたよ。」

「2-F」、「女子？」…この2つのキーワードより3人までに絞ら
れる。

そしてそのうちの2人…まあ悲しいことに俺と秀は知られているか
ら候補から除外される。

…残るは彼女しかない！

「そうか！？ なら協力してくれ！」

「でも、あきらめてください。」

「なして!?!」

先輩にはかわいそうだが後輩としてきちんと説明しなければ…!

「彼女、“島田美波”にはもうすでに好きな人がいるからです」

「…??.??.?」

「なんで首を傾げるんですか！？ちゃんと聞いてましたか！？聞い
てましたよね!?!」

くそ！この期に及んで現実逃避か？

「ああ、ちゃんと聞いたつたで。でも、まだ“付き合っ”ないん
やろ?」

「ええ…まあ」

「なら大丈夫や！ まだ俺にもチャンスがあるってことやる?」

ライ先輩は眩しいくらい笑顔で自信ありげに言う

…なんとというポジティブシンキング!!

俺はこの時、少しだけこの先輩を尊敬した。

第三十六話 慣れっていつのは恐ろしい？（後書き）

キララさん、感想ありがとうございますw w

面白いと言っていただけなのでうれしすぎてテンションMAXです！
設定に負けない文を書けるように精一杯頑張るのでこれからもよろしくお願いします！

第三十七話 昔はコウモリ傘にあこがれて…

「お前に話してほんとよかったわ まあいろいろ協力してな？」

「はあ、あんまし期待しないで下さいよ」

「わかつとる けど俺はその“吉井明久”って奴には負けへんよ！
なんか今回の先輩はいつもと違う…相手が女の子と分かったからかな？」

「…そういえばどうして彼女を好きになつたんですか？」

「もちろん…企業秘密や／＼」

「あぁっと！？今まさに俺の必殺の左が目の前の人物をボコボコに…」

「…ちょスンマセン！自分調子乗りましたっ！」

先輩、俺を怒らせるとすっごい怖いんですよ？…まあ優ちゃんの方が怖いけどな！

「んじゃ教えてくれますよね？」

「ん…まあしゃーない。簡単にいうとやな…似とるんや、初恋の人に」

「へっ？先輩の初恋っていやたしか4歳のころ海外で一目惚れでしたっけ？」

そついや先輩はハーフだったけ？ たしかお父さんがイタリア人でお母さんが中国人で…

お父さんがお母さんを路上でナンパしてそのまま結婚したって言うてたな… ちよつと懂れる…

「そや。その子な、俺がすっごい困つてた時助けてくれたんや！
言葉はうまく通じんかったけど俺にとっては今も忘れられへんヒ
ーローやった人や」

先輩は日本に来るまでイタリアで暮らしていて今回の留学では独学

で日本語を勉強したらしい

「そうですか。まっ俺も“できる限り”協力しますよ。…ああそつ
いえばライバルはたくさんいるんで気をつけてくださいね」

「ホントか!？」

「・・・主に女子に。ファンクラブまであるんですよ」

「カッカッカッ! さっすが俺が惚れただけはあるな!」

「まあ暗殺されないように気をつけてくださいね」

「おう! 任せとき! んじゃわざわざすまんかったな」

「いいですよ。では失礼しますね」

んーなんか一気に疲れたな…恋愛相談なんて初めてされたからドキ
ドキした〜

そういえば“清水さん”のこと教えるの忘れてたけど…まっいつか!
さてさて帰るとしますか!

神木家にて

「ただいま…」

「うわあ兄さん。びっしょ濡れだねー大丈夫?」

センリが学校をでて30秒後、急に雨がひどくなった。

「エリ、タオル取ってくれ…」

「はいはい。」

その大雨で持ってきてきた折り畳みの傘なんてすぐさまコウモリにな
って役にたつてくれなかった。

しかも家に着くころには雨は小雨になってたし…つくづく今日は運
が悪い

「はい、タオル」

「ありがと 秀来た?」

「うん。洗濯取りこんでくれてたからお礼に兄さんが昨日作った

プリン食べてるよ」

「そか、よかつた〜 エリが取りこむと竹竿が折れ…っ痛ててて」
「兄さん？ 今日家庭科で兄さんのためにわざわざショートケーキを焼いてみたんだー もちろん食べてくれるよね？」

「ソウイエバ、タマネギカウノワスレタンダ。イマカライツテクルKARA!!!」

「ちょ、兄さん!？」

センリはそのまま全速力で外へ出て行つた

『その物体はショートケーキじゃない!!』と遠くで聞こえたのはきつと気のせいだろう

「チツまた逃げられた…でもこんなの秀兄にはあげられないしな〜」
エリの手元には真つ黒焦げの自称“ショートケーキ”があつた。
いつもは砂糖と白玉粉を間違えたり醤油とイカ墨を間違えたりする程度で

見た目も厚さ20センチの薄焼きせんべいや紙のように薄いホットケーキを作つてしまう程度(?)で
捨てるのはもつたないからいつもは無理やり秀吉やセンリに食べさせている

しかし今回は真つ黒焦げ…体にも悪いから、さすがに秀吉にはあげれないと思つていた(兄はいいかな?と思つている)

「エリ、どうしたのじゃ？」

「ひゃ…つて秀兄! ビックリさせないでよ〜」

「はは、すまぬのじゃ。ところでセンリは? 帰つてきたのじゃら?」

「んーなんか玉ねぎ忘れたつて言つてまた出てつちやつた」

「そつなのか? …ところでさつき後ろに隠したものはなんじゃ？」

「ふえ? ナ、ナンニモナイヨ」

「嘘じゃな。お主ら兄妹は嘘つくとき片言になることが多いからの。どれ？」

「あつやめてよ秀兄〜！」

秀吉はヒヨイとエリの持つていた“シヨートケーキ”を奪ってしまっ

「ふむ…これは…チョコレート…ケーキ？」

「シヨートケーキなの!!! おなか壊したら大変でしょ!? 返してよ!!!」

エリは“シヨートケーキ”を奪おうとするが

「パク」

「!!!」

秀吉は奪われる前にそれを食べてしまっ

「ふむ、中のイチゴもクリームもしっかり焼けておるぞ」

「…それってまずいんじゃない？」

そう言いつつもしっかり最後まで食べてしまっ

「ごちそうさま。まだまだセンリには及ばんがまた作ってくれんかの？」

「…わかった（ノノノ）（それは反則だよ秀兄）」

俯きながらおそらく赤面しているエリ

「うむ、楽しみにしているのじゃ」

次の日、秀吉は腹痛で学校を欠席した…

第三十七話 昔はコウモリ傘にあこがれて…（後書き）

今日は母の日でしたね！

自分はフリカケ製造マシンのなものをあげましたww

お菓子を砕いてごはんやらラーメンやらにフリカケるやつです！

まあ結局は自分が使うことになりそうです…

第三十八話 同音異義語がたくさんあって困る…

次の日神木家にて

神木センリの朝は早い。起床した後すぐ身支度を整え朝の素振り、そして洗濯と朝食作り、弁当も忘れずに。

両親は海外へ出ているため、これが毎日の日課である。(エリにさせるで大変なことになるのも一つの理由であるが)

「ごほっ…おはよう、エリ」

まだ眠い目をこすりながら起きてくるエリ

「おはよう兄さん…って大丈夫？ 顔色悪いし…もしかして風邪ひいちゃったの？」

「んー？ 大丈夫だ。すこーしフラフラすっけど今日は休めないしな。」

「(そっか、たしか優姉との約束今日だけ？) あんまり無理しないよね」

「おう！ 昨日の帰り際の秀よりは大丈夫…すいませんでしたあ！！
お願いだからあつつあつのフライパンで殴ろうとしないで！！」
危なかった！風邪より酷いことになることだった…

- - - - -

「それでは1人目の方からどうぞ」

ついに始まった対Aクラス戦

秀の休みを知り一時クラスに混乱が起こったが雄二があっという間におさえた

「ムツツリーニ、頼んだぞ」

「……………(スクツ)」

行け！我がトップバッタームツツリーニ！！

「んじゃAクラスからは僕が出ようかな？」

「！！たしか彼女は工藤さん…だったけ？」

彼女は俺の中での印象はもう“スパッツ”しかないんだよね(笑)

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「……………土屋康太」

二人は互いに手を握る。

「では、教科はなににしますか？」

「……………保健体育」

さすがはムツツリーニ！俺の苦手な保体を堂々と選ぶなんて！！

俺なんかテスト中に意識が飛んでしまうというのに…

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも僕だっ

てかなり得意なんだよ！……………実技でね」

あつ、クラスメイトの大半(女子と雄二と俺を除く)が鼻血だしてる

なんでだろう？実技って言ったら球技とかの方じゃないのかな？

それなら俺も得意なんだが…

「あれ？神木君だ！この間ぶりだね！

…！そういえば、保健体育が苦手なんだっけ？僕が教えてあげよ

うか？もちろん……………実技でね？」

その瞬間クラスメイトの殺気が俺に集中する。

なんで！？俺なんか悪いことしたかな？

もしかして“実技”って他の意味でもあるのか！？

ええい“聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥！” 恥ずかしいが質

問してやるぜ！

「工藤さん、質問があるんだが…」

「ん？なにかな？」

「ずっと思っていたんだが“実技”ってバレーとか野球とかスポー

ツの事じゃないのか？」

「……………」

「ククク…あははははっ」

俺の質問の後会場は急に覚めた雰囲気のもと工藤さんはツボに入っ
たのか1人で大爆笑している

これ俺のせいなのかな!?俺のせいなのかなあ!?

「あー…神木君?ちなみに君の保健体育の点数はどれくらいなの?」
吉井がおそろおそろ俺に声をかけてくる

「んーと、たしか平均して…5点前後かな?」

「俺、今まで神木の事いろいろ疑っていたけどなんか…ごめんな!」

「僕、君みたいなのやつ嫌いじゃないよ!」「俺もだ!」「俺も!」

なんかFクラスのみんながかわいそうな目で俺を見てくる

…くそ!結局わかんなかったしなぜかすんごい恥ずかしい! 聞か
なきゃよかった…

「はははははっ 神木君ってホント面白い人だね! ますます教え
てあげたくなくなっちゃったよ」

「前言撤回、やっぱり嫌いだ!」「俺も!」「俺も!」

またもや俺に向かって殺気を出すクラスメイト

俺はいつたい何を信じればいいんだろうか? 誰か助けてくれない
かな…

「愛子、そこまでにしときなさい。 神木君がかわいそうじゃない」
むっ!祈りが通じたか!?

「あれっ優子?この前まで神木君の事、下の名前で…」わわわ!ス
トップ!ストップ!」

(愛子お願い!そのことは秘密にしといて!)

(どうして?いいじゃん。)

(私にもいろいろあるのよ…)

(んーわかったよ。 そのかわり…「ゴニョゴニョ」)

(…わかったわ。私からよく言っておく)

(ん、交渉成立だね!)

(はぁ…)

???なんかあったのか?……ああ呼び方の事か!
あれは中学の頃から普通になっていたから忘れていたけど優ちゃん
は基本人前では俺の事苗字で呼ぶ。
俺や秀、エリなどしかない場合は名前で呼んでくれるんだけど…
まあ優ちゃんが決めたことだ!しかないと思っっている
けど、まあ寂しいちや寂しいかな?

第三十八話 同音異義語がたくさんあって困る…（後書き）

吹き抜ける風さん、感想&誤字を教えてくださいありがとうございます
ます！！

はい。清水さんは2年生でした！すみません！m（|）（|）m
オリジナル設定ではないのです。作者がバカなだけなのです！！あ
りがとうございますね！

最近いろいろ見直して誤字脱字を直してはいるんですが…なかなか
治らないですね（汗）

ご指摘ありがとうございますw w

第三十九話 蒸し暑い季節となりました。

「えーそろそろ始めたいと思っっているんですが…」

そう言うのはAクラス担任、高橋先生だ。…ちなみに苗字が一緒のライ先輩とはまったくもって無関係らしい。

「はい。試獣召喚つと」

「……試獣召喚」

二人に似た召喚獣が召喚される。ムツツリーニの召喚獣は忍びのような格好で小太刀の二刀流。

対する工藤さんはセーラー服に…斧？しかも馬鹿デカイ！

二人とも腕輪をしている。 どうやら400点は軽く超えているようだ

「理論派と実践派、どっちが強いのか見せてあげるよ」

そういいながら工藤さんの召喚獣は斧に雷光をまとわせながらムツツリーニの召喚獣を消そうとする

しかし、この状況の中で俺にはムツツリーニの顔は笑っているように見えた。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニ君？」

「やばい！これは負けるのか!？」

「……加速」

ムツツリーニがそう言うとその場にいたはずのムツツリーニの召喚獣がその場から消える

「えっ……?」

「……加速、終了」

その言葉を合図に工藤さんの召喚獣は倒れた

『 Aクラス	工藤愛子	VS	Fクラス	土屋浩太
保健体育	446点	VS	572点	』

やばい！点数高すぎて5、6回は見直したぞ自分！
なんで保健体育でそんな点数が取れるんだ！？

「そ、そんな…僕が…僕が保健体育で負けるなんて…!!」
その場で膝をつく工藤さん どうやらよっぽどショックだったみたいだ

「……工藤みたいな好敵手がこの学校に転校してくれてよかった。
ありがとう」

そついつつ工藤さんに手を差し伸べるムツツリーニ こいつ意外と紳士なんだな！

「へへ、こちらこそありがとう。次は負けないからね!!ムツツリーニ君！」

「……ああ。俺も負けない」

固く握手する二人。なんか青春漫画みたいですがさすがさだ！

「んじゃムツツリーニ君。勝者にはサービスしてあげるね。えい
!ピラッ」

「……………ブシュ……………!!!!」
前言撤回。ぜんぜんすがすがしくねえ!

ムツツリーニは鼻血の海に沈んでいった…ってちよつとこの出血量
やばくねーか!?

「ゴホツゴホツ、雄二、ちよつとこいつ保健室に連れて行ってくる
な!」

「あ、ああ任せた。お前の番までに帰ってくるんだぞ!」
「ゴホツ んあ、了解。」

……………

ムツツリーニを保健室に連れてって帰ってくるとちよつと2回
戦が終わっていた。

どうやら姫路さんと久保君の戦いだったらしい。

廊下で聞こえた姫路さんの『私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命になれるこのクラスが。』って言葉には思わずウルツッてきたな

んでもって結果は姫路さんの勝利だったらしい。よかった！

ということで次にFクラスが勝てばそこで試合終了。俺たちの完全勝利だ。

しかしこちらが教科を選べるのはあと一回。その一回は最終決戦にとっておかねばならない。

つまりもう俺たちの得意科目は選べないってことさ

「では三回戦を始めます」

「Aクラスは峰山梓が行きます」

Aクラスからはこの前リオと一緒にいたミネヤマ アズサって子が出るらしい。

…相変わらずニボシを食べているようだ。

「んじゃ、頼んだぞ明久。」

「ええっ！ 僕なの！？」

「坂本！ どうしてここで一番バカなアキなのよ！？ 私か須川が出てたほうがいいんじゃない？」

「大丈夫だ。俺はこいつを信じている！」

「ふう… やれやれ… 僕に本気を出させてこと？」

「ああ、もう隠さなくていいだろう。ここにいる奴らにお前の本気を見せてやれ！」

まじか！？ 吉井って頭よかったのか？

まわりの奴らも驚いてるようだし…

「この間は失礼しました。しかし貴方はこの学校一バカ…と聞いていたのですが」

「ふふん。今までの全然本気を出してなかったのさ」

「……」

「驚いているようだね。今まで隠してきたけど、実は僕……..
左利きなんだ」

その後吉井はフィードバックで吹っ飛んだ。その距離…金メダル級だぜ！！

第四十話 ゴール下なら得意なんですよ！

「あれ？ ここは…」

「吉井君！大丈夫ですか？」

「うん…なんか全身が三階から落ちたように痛いんだけど…」

まあそりゃそうだろう。なんたって400点台後半の方からおもいつきり殴られたのだからな！

「それはですね…」

「おつ吉井、気が付いたな！ お前アズちゃん怒らしちゃったんだろ？ なかなかやるなあ！」

「リオ！てめえ何しにきやがった！ ゴホッゴホッ…」

「はっはっは。センリ君、落ち着きたまえ。体調悪いんだろう？
…俺はアズちゃんの勇士を見に來ただけさ！ …あと授業めんどいからサボりに來た」

めんどいって…この人一応受験生なんだろう？ 大丈夫か？
するとリオの後ろから先ほど吉井と戦ったアズちゃんがやってきて
リオを蹴飛ばす

「先輩、私のためにサボってくれるなんて…とってもうれい
す！」

「ははははは… ちょアズちゃん！言葉と行動が違っ…！！」

アズちゃんはリオに笑顔を向けたまま思いつきり踏みつけていた。
へへん！リオめ！ザマーミロ！！

…

「では四回戦を始めたいと思います」

おっ！ついに俺の番だ！

「神木、頼むぞ！」

「おう！任しとけ雄二！」

絶対勝って優ちゃんに許してもらおうのさ！

風邪薬も効いてきたみたいで咳も止まったし頑張るぞ！！

「でも大丈夫なの？ 神木君は保健体育が苦手なんですよ？ もしソレを選ばれたら…」

「ん？大丈夫さ。 優ちゃんは保健体育を選ばない！」

「あら、そんな確信どこから出てくるのかしら？」

「確信もなにも真実だからな！ 俺はいつでも主を…優ちゃんを信じてるのさ！」

「…ねえ、今さらなんだけどさ、神木君と木下さんってどういう関係なの？ なんか普通の関係じゃなさそうだし…」

「あつそれウチも気になる！」

「そうか？ 別に大したことないんだが…」

「…神木君の家系はね、昔から代々木下家に仕えてきたの。まあ現代ではそんな上下関係なんてないし。

それでも…神木家は今でも木下家に仕えてくれてるの」

「まつそういうことみたいだ」

まあ俺はその理由だけじゃないんだけどな

「ふーん…って事はつまりは幼馴染ってこと？」

「そういうことになるかもな…ってなんでみんな（Fクラス男子、雄二を除く）俺に向けてカッターを構える！？」

「うるさい！この裏切り者！！ 今FFF団の名のもとに神木センを粛清するのだ！！」

「……………おおー……………！！……………」

ああもう！なんでFクラスはいつもこうなんだよ！！???

「チツ！最終手段…！！」カチツ ヒュ …… ドン！

「……………グハツ……………」

俺を襲おうとしたFクラス男子は俺特裁巨大タライの餌食となる。

丁度囲まれてた俺はみんなを盾にしてしゃがんだから痛くないの

さっ！

「あんたどうやってAクラスにこんな巨大タライ仕掛けてんのよ！！しかもみんな気絶しちゃってるじゃない！」

「企業秘密だ！あとこいつらはこれ以上バカにはならない！！）
きつと！！）」

「……はあ。まあいいわ。とつとと始めましょ」

「さて科目はどうしますか？」

うわあ……すごいドキドキする。　優ちゃんはどんな教科でくるんだろっ……

「科目は体育で……フリースロー三本対決をお願いします」

フリースローってたしかバスケのやつだろ？　見た感じ運勝負と思われるが高い技術と練習量が試される競技だ

「覚えてる？　小学校の時のフリースロー勝負」

おおっ……優ちゃんの目が笑ってない……ってか寒気が……

「小学校の頃だろ？　んーとたしか……」

.....回想.....

『はい、みなさん。今日の体育はフリースローをします。』

『『『ハイ!』』』』

『はずした人から見学に回ってくださいね。では一番を目指して頑張りましょう!』

『『『ハイ!』』』』

『センリ、秀吉、シヨウブするわよ!』

『えー ムリだよ。ボク今までユウちゃんに勝ったことないんだ』
『よ』

『そうじゃ、アネウエはツヨいからの。』

『つべこべ言わないでやるったらやるの!』

20分後…

7本目、すでにセンリと優子以外残っているものはいなかった

シュッ

『ナイスシュート優子ちゃん! じゃあ次は神木君ね』

『セシリ〜がんばるのじゃ』

秀吉は3本目あたりから見学になっていた

(どっしりよう、そろそろゲンカイかも…これでセシリが入れたら負けちゃう…)

『…エイ!』

セシリの投げたボールはギリギリのところに入らなかった

『あらあら神木君残念ね　じゃあ一番は優子ちゃんかな?　おめでと〜!』

『あーあはずしちゃった…でもさっすがユウちゃんだね!　また負けちゃったよ』

『神木、がんばったな!』

セシリは後ろを振り返るとクラスメイトのケンタがいた

『あっケンタ君!　おつかれ!』

『そっぴやお前、さいごワザとはずしたろ?』

『ケンタ君、それどっしりこと?』

“ワザと”という言葉に反応し優子はケンタに聞く

『そ、そ、ソシナコトナイヨ!』

『そうか？ お前この前は23連続で入れてたじゃないか』

『ちょ、け、ケンタ君！！ その話は内緒…って…』

『ふーん…それはどういう意味なのかしらね？』

『あのー…ユウちゃん？ どうしてボクの腕をつか…う、腕が決して曲がらない方向につっ…！！！！』

『ケンタ！ささっ 着替えに行くのじゃ』

『お、おう？ いいのか、神木の悲鳴みたいなのが聞こえるが…』

『つ、疲れておるのじゃ！ はやく教室に戻るのじゃ…！』

-. -. -. 回想終了-. -. -.

「オ、オボエテナイナ」

「そう、アタシはあの時思ったの。 センリはいつもアタシと勝負するとき手を抜いてるんじゃないかって」

「そんなことない！！ 俺はあの時本気だったんだ！」

「んじやなんであの時動揺したのかしら？」

「そ、それは…」

あの時、優ちゃんがフリースローしたときに体操服と短パンの境目

から一瞬見えた腹チラとかお、思い出してないんだからね！！

第四十一話

月に1度は風邪をひく

「とにかく!! 今回の勝負で白黒はつきりさせましょ?」

「わかった。…でもこういう場合ゴールとかってどうやって持つてくるの?」

「そのことは心配ありません。たしか今、観察処分者君が…」

ドンっ!!

「はあ、はあ、も、持ってきました…」

「はい、お疲れ様です」

どうやら吉井が持ってきてくれたみたいだ。アズちゃんにボコボコにされたばかりつてのに大変だな、観察処分者様は。よし!今度弁当のおかずを分けてやろう!

「では、必要なものもそろったようですし始めましょうか」

一応ルール説明だ。

基本のルールは普通のフリースローと同じ。

違うのはポイント制でゴール下なら1点、基本の位置からは2点、

3ポイントのゾーンでは3点

3回投げてポイントが多かったほうの勝ちってわけだ!

ちなみに俺と優ちゃんはちゃんと体操服に着替えた。

制服だとスカート…いいえなんでもありません!

まず1本目。

「私から行くわ」

優ちゃんは2点ゾーンへ向かう。まずは無難にってわけか…

シュ

きれいにシュートを入れる優ちゃん。
俺もがんばらなくては！！

「神木君、頑張れ！」
「おう！任しときな吉井。」

シュ

ふう…なんとか2点ゲットだぜ！…バスケ部にコツ聞いといてよ
かったあ

現在の点数：木下 優子 神木 センリ

得点

02点

02点

そのあと優ちゃんは普通に2点を入れる
んでもって二回目の俺の番…

とりあえず俺もここで無難に2点を…「あら、神木君は3ポイント
を入れる度胸がないのかしら？」

「ムッ」

「そうよね」 “お化け嫌いのお子様な” 神木君にはバスケは難し
かったかな？」

「ムムムムムッ！」

くそっ！　ここまで言われて負けてられるか！！

シュ

「うし！　3点ゲットー！」

危ない危ない。　あと右に少しずれてたははずすところだった…

「（なによ。あんたはやればできるのに何でいつも本気ださないのよ！）まあいいわ。　勝つのは私なんだから」

そういつて三本目、優ちゃんは2点を決める。

よくよく優ちゃんの手を見てみるとそこにはママや突き指の後があった。

どうやら2、3日前からずっと練習していたみたいだ…

現在の点数…　木下　優子　　神木　センリ

点数

06点

05点

最後の俺の番！　ここで2点以上入れればFクラスの勝ち。　1点でも引き分け。　はずせば負けだ。

優ちゃんに許してもらったためにも、Fクラスのためにも…俺は勝つんだ！

俺は二点のゾーンに立つ。

両クラスの視線が集まる。

それなのに周りは物音一つなくシーン

やっついる。

ふっ、血の気が引いてくのを感^じる…緊張しているのだらっ。

「…やっつや…」

シュートした瞬間、視界が歪んだ。

第四十二話 キノコの触感が苦手です

side 優子

まったく、アイツは昔から変わってない！
そりゃ、本人は多少変わってるつもりだろうが根っこの部分ではあの頃から変わってないじゃない！
やっぱりアタシが“木下”でアイツが“神木”だからなのかな…

ボタン

全員の視線がシュートされたボールへ集まっているときに会場の中
心…センリがいるあたりから音がした
そしてほとんどの人がその音のした方へ顔を向ける

そこでは…センリが倒れていた

「センリ!?!」

思わずアタシは人前ではあまり呼ばない呼び方で彼を呼びながら彼のもとへ駆けていく

「ふえ…優ちゃん?」

「大丈夫なの!?!」

「ん…優ちゃんが3人に見える…!?!」

うん。コイツ大丈夫じゃないわ。と、とりあえず急いで保健室に運んで…

ギョッ

突如センリは優子をおもいつきり抱きしめる

「ちよ、せ、せ、センリさん？ ど、どとうされたのですか！？」

…／／／

優子はいきなり抱きしめられて顔を真っ赤にしながらセンリに問いかける

「んーとね…優ちゃんが可愛かったから抱きしめたくなったんだ！」

…よし、今は聞かなかったことにしましょう。

だって…あのセンリが女性を抱きしめたり可愛いと言ったりするのは…
…がない！！

そう、これは夢、夢なのよ！…ってあれ？そういえば…！！

「センリ？ アンタ今熱あるでしょう？…ってやっぱり」

優子はセンリのデコに手を当てながら言う

やっぱりね。

コイツあんまり風邪引かないわりに、引いたら引いたで超高熱。
薬もあんまり効かないし…そしてもっとも厄介なのがこの暴走…

「どしたの優ちゃん？」

「とりあえず、コイツを保健室へ…いや、早退させるべきなのかな

…？」

優子が対策を練っているところに

「『神木ツツ！！』 FFF団の名のもとに今こそ貴様を討つ！！』」

優子を抱きしめた所をAクラスの生徒はもちろんFクラスのメンバーにも見られていたわけで…

セリりはFFF団（一部Aクラス男子を含む）に囲まれる

「ちょっと待って！今コイツはすごい高熱で…」

「木下さん、待っててね！ 今から君をこの諸悪の根源から救い出してみせるからね！！」

ああ…まったく。どうしてFクラス男子は（いやまあ、Aクラスの男子も交じってるみたいだけど？）

人の言うこと最後まで聞かないかな！？

「『今ここで神木千里に肅清をつっ！！？？』」

FFF団はどこからともなくカッターを取り出しセリリに向かって投げようとしたとき“目標”を見失ってしまう。

「ぐあっ」バタン

「ウツ」バタン

そして、悲鳴とともに数人が倒れる音がする

その音の方へ視線を向けると…

「フフフ…」 と笑いながらセリりはスタンガンを持って立っていた

「なっ！神木は熱でやられているんじゃないのか！？」

「そーね、熱でやられて“手加減できなくなってる”みたいだから気をつけてね？」

ふん、私の話を最後まで聞かないから罰が当たるのよ！

「そんな!!…グハッ」

そしてもうこうなったら“あの方法”でしかアイツを止められない…

「センリ、いいかげんにしなさい!!」

そういつて優子はセンリの目の前にシイタケを持ってくる

バタン!

するとセンリは力なくその場に倒れる

「高橋先生、とりあえずAクラスの勝利ってことでいいですか?」

「え、ええ。そうですね」

「では、コイ…神木君が具合悪いみたいなんで家まで送っていきま
すね」

「はい、ではお願いしますね」

「失礼します。」

そういつて優子とセンリは会場を後にした。

第四十三話 夢で林を走り続けたことある人拳手！

-----side センリ-----

ここは…どこだ？

センリが周りを見渡すと現代ではあまり見られない景色が広がっていた

センリの背後には森林があり、今立っている丘のような場所の遠くには海が見えていた。

でも…この景色どこかで見たことあるような…

するとセンリの後ろの森から若い男女がやってくる

「 様、そんなに急がれていては転んでしまいますよ」

「大丈夫よ 。たとえ転んでしまっても が助けに来てくれるんでしょ？」

男性の方は暗めの銀髪で、腰に剣のようなものを提げていた
女性の方は茶髪でことなく秀吉と優子を足して2で割って（＝ど
ちらかそのまんま）成長させたような顔だった

そして、一番注目すべきは彼女らの服装が現代と大きく違うところ
だった。

青年の方は騎士のような鎧をし、女性のほうは貴族の人が着るよう
な（かといってそこまで派手でもない）服装だった

あれ？俺たしか日本にいたはずなんだが…？

…ってそうか！また“例の夢”か！

“例の夢”とは彼が中学生になってからたびたび見るようになった夢。否、“前世の記憶”のようなものである。最初は夢と思っていたが前世関係者のリオの登場でその夢が実は“前世”だとわかったらしい。

たしかリオが言うにはこっちの銀髪が俺で…
んであつちの女性が優ちゃんの前世だったはずだ。

…っていつかなんだろ…このむず痒さは…!

何!? 前世の俺! そんな王子様的なキャラだったの!?

毎度毎度恥ずかしいんだが!?

『そろそろ戻りましょうか? 風も強くなってきましたし…!』

『ええー もう帰らなくてはいけないの? お願い! もう少しだけ

…ね?』

そついうと女性は上目遣いで青年を見つめる

『うつ… しょ、しょうがないですね／＼ あと少しだけですよ

!』

『わーい。 大好き!』

『ふえ? ちょ、 様!?!』

青年は突然女性に抱きつかれてすんごいテンパっていた

ああ…なんか、FFF団の気持ちをはじめてわかった気がする…
今すぐにでもこの銀髪王子様キャラ野郎をぶっ飛ばしたい!
で、でもなんか他人事のようにじゃない気がする(涙目)

しばらくすると少し離れた場所から銀髪の青年がもう一人やってくる

『おーい！ お前らいくら人があまり来ない場所だからといって昼間からイチャイチャするんじゃないぞ！』

『何処をどうみたらそうなる！？』

『あら？ じゃないの。 久しぶりね』

『これはこれは 様。 久しぶりと言っても2日ぶりですけどね』

あつー！コイツはたしか…！！

『おい 、 てめえ何しにきやがった…！！』

『ほほう、実の兄が弟を心配してはいけないのですか？』

『兄といっても俺より数分早く生まれただけじゃねーか！』

『甘いな…正しくは3分33秒だ』

『細けーよ…！！』

『ふふ…あいかわらず仲がいいのね』

みなさま、もうお気づきでしょうか？

そう、後から来た銀髪野郎はリオの前世です。

なんと俺とリオは昔は兄弟だったのです…しかも双子の。

しかしまあ…あいつは昔も今も変わらないなあとしみじみ思うのであった。

第四十三話 夢で林を走り続けたことある人挙手！（後書き）

更新遅くてすいません（汗）

あとオリ展開ですw w

気に入っていただけるとうれしいです！

こんなんですがこれからもよろしくお願いします！

第四十四話 病人食の王道はお粥である… か×か!?

『ところで一体全体なんのようだ!?!』

『相つ変わらず連れないな。ほらっ! 弁当持ってきたから一緒に食おうぜい』

そういつてリオの前世は一人ずつに弁当を配る

『本当ですか!?! 食べましょ食べましょ。 の料理はとっても美味しいし!』

『そうですよ! 様の言う通り俺の料理は美味なんだぞ! ありがたく食え!』

『むー… 様が言うのなら仕方ありませんね。 ではいただくとうしましうか。』

『俺のセリフは丸無視か!』

『パク…』

センリの前世は“キノコ”を口に入れる…

『どうだ? うまいだろ??!』

モグモグ、モグモ… バタツ

センリの前世は急に青ざめ倒れた

『ゴフツ… てんめえ!! 今回は材料になにを仕込みやがった!?!』

『仕込むってなんだよ! 俺は美味しくなるようにただ…』

『ただ…?』

『ただ材料にハバネロと水飴、ところによりそば粉と強力粉を混ぜて3日間寝かせた特性ダレを隠し味に入れただけさ!!!』

『それアウト!! アウトだから!』

『そう？ 結構美味しかったけど…』
『黙れこの超味覚音痴野郎が…』

すると優子の前世がセンリの前世に駆け寄る

『大丈夫！？』

『ああ 様、俺、やっと決意しました』

『決意って…何を？』

『…俺はもう二度と』

『二度と？』

『キノコと兄の料理は食べないって誓います…バタツ』

そうしてセンリの前世は意識を失った

『うーん…弟の気持ちがいまいち分からんので』
『端のほうでは例の“特性ダレ”を片手に弟が倒れた原因の弁当を黙々と食べている兄の姿があった。』

『うう…キノコは…キノコはもう…ってはっ！ここはダレ？私はドコ？』

『おっ！やっと起きた？ 寝坊助な“弟君”？』

寝ぼけていてぼんやりとする頭で今の声の主を検索する

『チツ！リオの野郎がなんで俺の部屋に居やがる！？ しかも今後ろに隠したものはなんだ！？』

『なんでって…お見舞い？ ちなみにお前が寝ている間ずっとこのキノコを目の前に置いといてあげたんだぜ！ 感謝しろよ！』

「だれが感謝するか！ お前のせいで変な夢まで見たんだぞ！」
「まあまあ、お前をここまで運んでやったのはこの俺だよ？ 少しは感謝してくれてもいいんじゃないの？」
「くっ… ってそういや試召戦争どうなった!？」
三本目のシュートから記憶がないが俺と優ちゃんの勝負はどうなったんだ？

「ああ… たしか結果はAクラスの勝利だったかな」
「なっ… 雄二は負けたのか」
あれほど自信满满だったのに… さすがは学年一位というところか。

「ちなみに霧島って言うやつのお前の99点に対しお前のクラスの代表は自信满满に52点って所はすっごいおもしろかったな！」
雄二め… 本当に勉強してなかったんだな…

「そっぴやお前は優子ちゃんとの勝負の結果は知らなかったんだっけ？」

「予想だが… “俺のシュートは入らなかった” だろ？」
「正解。よくわかったな！ …もしかして意識あつたの？」

「いや全然。まあ俺のシュートが入ってたら確実にFクラスの勝利だったはずだ。」

Aクラスの勝利ってことは俺のシュートは外れて次の対戦で結果が決まったって所だろ？」

さてさて今後どうやって俺は優ちゃんに許してもらおうか… まずは土下座からか？ それとも…

「そっぴ意識なくてやったわけか」
リオは少しニヤニヤしながら言う

「は？ “やった” って… なにを？」

「いや、大したことじゃないんだ。お前が優子ちゃんを“みんなが見ている前で”抱きしめたただけさ」
ほーう…俺が優ちゃんを…

「…って！ えっ！？はっ！？何！？どゆことデスカ！？」

「言葉の通りさ！ どうやらお前は高熱出すと頭が緩むらしく暴走しちゃうらしいぞ」

「ぼ、暴走って…」

ガチャ

「あら？目が覚めてたのね。 ちょうどよかったわ、梓と一緒にお粥作ってきたから…」

「ゆ、ゆ、ゆゆ優ちゃん！？」

「なによ。まだ病人なんだからおとなしく寝てなさいって」

「リオ先輩もニヤニヤしてないで空気読んでください」

「ほいほい…っ」と

「あっ梓、また来週ね。先輩はセンリ運んでくれてありがとう」
ざいました」

「いえいえ、どつたまして んじゃまたなセンリ君、優子ちゃん。お
「お邪魔しました」

そういうと2人は部屋から出ていく

どこからどう見ても普通と思うが…

「そうかな？ 別に“普通”だと思うけど…」

「ふーん“普通”…ねえ？」

そういつて優ちゃんは俺のベッドにあるモノを掴む

「じゃあなんで“普通”の男子高校生のベッドの上にはキツネさんやクマさんのぬいぐるみがあるのかしら？」

そう俺のベッドの上にはぬいぐるみがたくさんある

「なっ優ちゃん！ クマ太郎をいじめないであげて〜」

「名前まで付けてるし…」

「べ、べつにいいだろ！ かわいいんだし…」

そう言いつつ“クマ太郎”を優子の手から奪う

「昔より大分ましになったけどさ、アンタそんなんだから中学の時

“メルヘン”ってニツクネームつけられたのよ！」

「うっ…でも優ちゃんだって隠れて危ない薄い本読んでの

俺知ってるんだか…痛い痛いっ！！」

「…アンタソレナンデシツテルノ？」

優ちゃんは俺に関節技決めながら尋問を開始する…

その眼は少しも笑っていないかった…

- - - - -

数分後…

俺は優ちゃんの前で正座していた。

「ほう…この前遊びに来たときたまたま見てしまったと？」

「はい。そうでございます」（ほんとは秀に聞いたんだが…）

「いい？このこと学校で言いふらしたりしたら…どうなるか分かってるわよね？」

「了解であります！ 私、神木千里はこのことを他人に言いふらさないと誓わせていただきます！」

「よろしい。…さて試召戦争の事だけど」

そつだ！俺負けたから2個願事叶えないといけないんだっけ…
あんまり厳しくないといいんだが…

「まず1つめね。 今度の学園祭、つまり『清涼際』の前にアタシのクラスにお菓子作りを教えてほしいの」

「へ？もしかしてAクラスってもう出し物決まってるの？」

「もしかしてFクラスはまだ決まってるのかしら？」

まじですか！？ Aクラス早すぎだよ！！ まだ学校始まって1週間もたつてないじゃん！

「まあいいけど…なんでまた俺なの？」

「その…アンタが作ったお菓子を一回持っていったら大好評で…

それで愛子達に頼まれたのよ」

「まあ簡単なお菓子でいいなら全然大歓迎ですよ。 んで2つめは？」

「2つめ…2つめはね…」

どうしたのだろう？ そんなに言いにくいもの頼まれるのかな？

…はっ！まさか女装しろとかいうのであろうか！？

さすがにこの年になって女装はイタイからなく勘弁してほしいぞ…

「アンタ、私の事まだ“優ちゃん”って言ってるじゃない？」

「うん。まあ小つちやいころからそうだったし…」

「ホラ、もう高校生だし…さ。その…いい加減“優子”って呼びなさいよ！／／／」

「…！！」

なんか最後逆ギレされた気がする…

… ってか そ、そ、そ、それって…もしかしてもしかなくても俺が優ちゃんのこと優子って言うことで…

「ほら、た、試しに呼んでみなさいよ／／／」

「ふえ…い、今！？／／／」

「そつよ！ ホラ…！！」

よし、落ち着け俺！！ 大丈夫、難しくない。そつだよ！ただ名前前で呼ぶだけじゃないか！
まずは深呼吸して…

「コホン… ゆ、ゆ、ゆう」

「…」

「優…」

バタン！

「ちよ、なんで名前呼ぶだけで倒れるのよ…！ ……ってまさかのオバーヒート!?」

優子が真っ赤になって倒れたセンのりのおでこに手をあてるとすっごく熱かった

「なによ…名前で呼ぶくらい… センのりの意気地なし…」

こうして、センのりの風邪は2、3日治ることはなかった！

第四十六話 やつと2巻突入だ〜!!の巻

「ん。 まあこんなもんでしょ！ センリ君特製“初恋の味？イチゴのクレープ”完成！」

「わあー」

「神木君って料理うまいんだね！」

「男の子なのにあつという間にいろいろ作っちゃうからすごいよね」

「いやいや、それほどでもないですよ」

みなさんこんにちは。 センリ君です！

さてさて今俺は家庭科室にて“Aクラス”の皆様にお菓子作りを教えに来てます。

そうです。俺は優ちゃ…優子の頼みでもうすぐ始まる清涼祭でのお手伝いに来てますww

え？Fクラスの方はいいのかって？

…Fクラスのみなさん外で野球してますよ！しちゃってますよ！間に合うのでしょうか!??

まあそれよりAクラスにも多少問題もあるのですが…

「それにしても神木君のお菓子おいしいよね」 女の子の私たち顔負けだもん」

「いやいや、工藤さんもなかなかうまいじゃん。

…っつかまさかAクラスでまともにお菓子作れるの工藤さんと梓ちゃんだけってどういうことだよ!!!」

そうです。まさかのAクラス、“まとも”お菓子作れる人が少なすぎるのです!!

久保君はY井A久君型のクッキー作り出すし、霧島さんはなんか変

な薬入れるし…(スタッフ(雄二)が美味しくいただきました)

「まあ神木さんのおかげで調理班はある程度作れるようになったのですし、いいじゃないですか」ポリポリ…

「まあそうだけど…って梓ちゃん、さつきからニボシばかり食べて！ いいかげん没収しちゃうぞ？」

「そうなたらあなたのマフラーを風紀委員権限で没収しますけど？」

「…すみませんでしたっ！！ 自分調子乗ってましたっ！」
「うむ。」

このマフラーだけは取られるわけにはいかないのさっ！
これは俺の宝物なんだから！！

「センリのクラスは出し物もう決まった？」

ふと後ろから優ちゃ…優子から声をかけられる

「いや、まだだよ？」

「まだなのね… でもいい加減決めないと間に合わなくなるわよ」
モグモグ

「うーん…そうなんだけどね… てか優ちゃ…優子(／／／)」

「な、なによ(／／／)」

「その…さつきから食べてばっかだけど…太るよ？」

「………」ガシッ

優子は無言でセンリの腕を掴む

「うふふふ…どうやらセンリ君には乙女心というものを教えてあげないといけないのかなあ？」

「いや、ちよっ、ごめっ…」「ゴキッゴキッ

ガラッ

優子がセンリに制裁を加えた直後、教室の扉が開く

「失礼する。スマンが神木を借りてもいいか？」

「ああ西村先生、大丈夫ですよ。というかこちらがいつも神木君をお借りしてすいません」

西村先生が教室に入る0.3秒程で優子は優等生の顔をつくる

「まあこんな奴でも役に立つならどんどん使ってくれ。」

しかし相変わらず木下は生徒の鏡だな。うちのクラスにも見習ってほしいぐらいだ……」

「いえいえそんなことないですよ」

「では、神木を借りていくぞ。」

そういつて鉄人……もとい西村先生は気を失っているセンリを担ぎながら教室を出ていく……

第四十六話 やっと2巻突入だ〜!!…の巻(後書き)

やっと2巻突入…(遅っ)

まあマイペースで頑張りますので応援していただけると嬉しいです
ww

第四十七話

テストが終わったあとの爽快感ww

「メイド喫茶　　と言いたいところだけど流石に使い古されていると思うので、ここは斬新に：「なぬ！メイド喫茶！？」」

つてあれ？俺たしか家庭科室にいたはずなんだけど…？

「おつ…神木君やつと起きたんだ」

「ん？ああ、おはよう吉井。」

「センリ…まだ寝ぼけとるようじゃの…」

「秀もおはよう…てかなんで俺はここにいるんだ？」

「鉄人…もとい西村先生が気を失ったお主を運んできたのじゃ。

あらかた姉上にもやられたのじゃろう？」

「なるほど…どつりで体中が軋むように痛いと思ったら、優ちゃ…

優子の仕業だったか」

俺の意識を奪うまで腕を上げちまうとは…

「のうセンリ？　ちとばかし気になっておったのじゃが…」

「なんだ？」

「姉上の呼び方が前と変わっているようじゃが…」

「あゝそれはそのゝ（ポン）…ん？」

秀にどう説明しようかと考えていると、ポンと肩を叩かれた
なんか背後から嫌な予感が…

「…」神木？その話俺たちも詳しく聞かせやがれ！」「」

後ろを振り向くとカッターやらナイフやら持った（かつ、とてつも

ない殺気を放ってくる）Fクラスの皆様がいた…

「ちょ、お主らなんでそんな物騒なものを…」

「秀、さっきのことは後でちゃんと説明するから…いざさらばっ！
」！」

そういつてセンリは教室を脱走する。

「待てっ神k「お前ら！さっさと出し物を決めんか！！」

Fクラス生徒（FFF団）は運悪く西村先生に見つかりセンリを追うことができなかった。

「はぁ…はぁ… ここまでくればもう大丈夫だろ…」

全速力で逃げたセンリは今屋上に来ていた。

たしか屋上には枕置いてたな… あったあった！

センリは屋上のちょうど陰になっているところに枕を置き完全に寝る体制になっていた

「ふっ…なんか眠くなってきた…」スウー

枕に頭を乗せて30秒後にはもう完全に寝ていた

????にて…

そこには2人の生徒と1人の教師がいた。

「ではこの件は君たちに任せるとしよう」

「…わかりました。しかし…いいんですか？」

「なにがだ？」

「一教師がこんな事やって…もしかしたらこの学校も潰れかねませんよ？」

「その場合の我々の安全策はすでにとつてある。もちろん君たちのもだ。」

すべては学園長脱却のため。だから安心して計画に力を入れたまえよ…海谷君、峰山君」

「へいへい。とりあえず俺らの仕事はコレでいいんだよな？」

「そういうことだ。他の事は強力な協力者がいるからね。もちろん彼らの邪魔はしないでくれよ。」

「まっ顧問がそういうなら仕方ねーか。いくぞアズちゃん」

「わかりました。では失礼しました…“教頭先生”」

屋上にて…

「お…セ…」

「んにゃもう食べられないよ〜」

「センリ！ええ加減に起きろや！！」バシッ

「はぐっ…ってライ先輩じゃないですか！？　なんでこんなところにいるんですか？」

「なんで…ってそりゃ愛しの島田さんに頼まれたからや！」

「なるほど…ってどうやって…？」

「そりゃメル友やからな！」

「行動はやっ！いつの間に関つたんですか！？」

「ちなみに彼女の家族構成は父母、妹の四大家族だ。」

「もしもし、警察ですか？ここにストーカーがいます。」

まさかメアドだけでなく家族構成まで…

この人ほっといたらいろいろ危ない気がする…

「んで俺の後ろにおる清水さん…やったかな？」

「なっ！…なぜばれたのですか？（完全に気配は消したはず…）」

「そりゃ毎日毎日襲撃されりゃ慣れてくるわ」

いや先輩！慣れちゃいかんでしょ！！

てか毎日って…ちょっと同情します。

「まあいいです。今日はお願いがあってアナタに会いに来たんですから…」

ん？島田さんが目の前にいない清水さんはいつもより冷静でおとなしいッと…メモメモ

「俺に？ 断ると言「お姉さま関連です」協力させてください」

はやっ！

内容も聞かずにOKしちゃったよこの人…

「この豚野郎にお願いするのも癪なんです、美春は…お姉さまの力になりたいのです。」

「ふむ。それは俺も同じだ。俺もできる限り彼女の力になりたい。というわけだ、一時停戦協定を結ばないか？」

「いいでしょう。“一時”ですがね」

「ああ。では商談に移りますか！ … あつ神木は一旦教室に戻
れつてさ」

「りよ、了解です…」

おおつ…何があつたか知らないがどうやら仲良く(?)(?)してくれる
みたいでよかった…のかな？

第四十七話

テストが終わったあとの爽快感ww（後書き）

更新遅くてすいません（汗）

いろいろ考えてるんですがうまく文にできずかつテストがあったので更新できませんでした

七夕に『文才ください！』ってお願いしてこようと思います（笑）

ところで感想ページについてですが『返信』という機能があったことを最近知りまして（汗）

もうこのさいなので感想いただけましたら後書きにて返させていただきます！ご了承ください。

なんかもういろいろすいません！！

これからもよろしく願いしますww

第四十八話 潜入！魅惑の女子更衣室？

廊下にて…

「あつ！神木君！ちょうどよかった。」

「おつ吉井じゃん。そんなに急いでどつたの？」

「今から雄二むかえに行くんだけど一緒に来る？」

「別にいいが…どこにいるのか知ってるのか？」

「うん！…女子更衣室だよ！」

「……………は？」

……………

「やあ雄二。奇遇だね」

吉井の言うとおり雄二は女子更衣室にいた。

道中聞いたところによると、どうやら霧島さんに追われてる身らしい…

夫婦なんだから仲良くすりゃいいのに…

「……………どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ。というか神木、なんでお前まで…」

「いや、弱点克服のための練習に良いつて吉井が言うからさ」
今のうちに何とかしないとこの先生きていけない気がするしな。

「…女子がいない女子更衣室でお前の弱点は治るもんなのか？」

「……………！！」

「そんぐらい少し考えりゃ分かるだろ…。しかしまあこんな所にいるのバレたらお前はいろいろやばいんじゃないか？神木。」

「ん？そりゃ先生とかにバレたらここにいろゝ人とも怒られるに決まってるもんね。」

「いや、まあそれもあるんだが…。ほれコレ見てみ？」
そういつと雄二は椅子に置いてあったものを指さす。

「ん？ これは……“日焼け止め”だね。誰かが忘れて行ったのかもしれないかな」

「そうだ。だがこれは“ただ”の日焼け止めではない!!」

「それってつまりどういうことさ？」

なんとなく嫌な予感がする…

「裏を見してみる。」

「裏？」

そういつて日焼け止めの裏を見ってみると…

…木下優子

と持ち主の名前が書かれてあった。

「今ちようど空き時間みたいだからな。忘れた本人もそろそろ取りに来るんじゃないか？」

そんな!! なら今すぐにここから脱走せね**ガチャッ**

「……………」

「あれ？ ここって女子更衣室だよな？」

優子が更衣室に入ってくる。

やはり男子がこんな場所にいるのが信じられないのか一旦外に出てここが本当に女子更衣室なのか調べようとしていた。

「や、やあ優子。奇遇だね？」

「秀吉の姉さんじゃないか。奇遇だな。」

「えっ、あ、うん。奇遇だね？」

突然声をかけられて思わず返事してしまう優子。
そして静寂…

「……」

優子はスウッと大きくブレスして…

「先生！！覗きです！変態です！！」

大きな声で先生を呼ぶ。

「逃げるぞ！」

「了解っ！！」

全速力で逃げようとしたときフツッと吉井と雄二の顔が悪者面に見えたのは気のせいではなかったようだ…

「明久、“アレ”やるぞ」

「うん。“アレ”だね。了解！」

「へっ？ “アレ”ってなんなのさ!？」

「“アレ”って言うのはな…必殺！神木アタック!!」

「へっ!？ ちょ!」ゴテッ

雄二の足払いで俺はつまずき転んでしまう。

そしてその上から吉井がセンリを踏みつけ

そのまま2人は女子更衣室から脱走する。

「神木君！君の命、無駄にはしないよ!!」

「なっ…ちょお前ら謀った…(ポン)な…?」

ふと肩に手を置かれ後ろから寒気がゾクッって俺の全身を襲う。
今後ろを振り向いたら鬼がいる気がする！てかいる！！マジで！！

「セーリ君？ アタシ別に怒ってないからさ、まずこっち向きなさい？」

騙されるな俺！ 俺の経験からして優子の『怒ってない』』『すんごい怒ってる』なんだ！
今振り向いたら地獄が待ってるって俺の本能が告げている！

「ふーん。向かないんだ？ じゃあ…今からこっち向くまで一つずつ関節外して行ってあげ「すいませんでしたあっ！！」」
セーリはものすごい勢いで優子の前で土下座していた。

神様、どうか俺の関節を丈夫にしてください…

第四十九話 中華のデザートってあんまり知らない…

こんにちは。神木センリ君です。

今俺の目の前には魔王がいます。

え？ 夢でも見てるんじゃないかって？

ノンノン。これは現実ですよ。だって…

土下座しても結局ほとんどの関節外されましたもん…

- - - - -

「痛ててて」

「神木、大丈夫なの？」

「ああ島田さん、心配してくれてありがとうとww ちょいと優子にやられてね…まあ自業自得なんだから仕方ないんだけどさ…」

なんとか関節治してFクラスまで帰ってこることができた。

丁度出し物も決まったみたいで結果的にはグッドタイミングだったのかも…

「しかしまさか“中華喫茶”になるなんて思わなかったぞ」

「そうじゃの。学園祭といえは焼きそばやらたこ焼きやらを売っているイメージが強いからの」

「そうね。でもあえて裏を突くって感じで結構お客さんも来てくれるんじゃないかしら？」

「なるほど。んじゃ俺はデザートやるよ。杏仁豆腐とかでいいんだろ？」

最近洋菓子ばっかだったからちょっとワクワクするな！

「マンゴープリンもお願いするのじゃww」
「はいはい、秀も甘いもの結構好きだよな」
「って神木ってお菓子作れるの!？」

そういつて島田さんは驚いている

俺がお菓子作りできるのってそんなに变なのか!？

「まあそれなりに？ 最近はAクラスの手伝いとかでお菓子作り結構してるからレパトリーは豊富だぞ？」

「あくだから最近いなかった事多かったのね」

「ああ、だけどこれからはFクラスの方にも力入れていくからよろしくな！」

よし！企画も決まったことだし頑張るぞっ！！

清涼祭初日

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力はすごいわよね」
「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「いやはやしかし！今回は島田さんにもすっごい感謝だよ！ なあ秀？」

「そうなのじゃ。 島田のおかげでテーブルが揃ったのじゃからな」
「いや、あれはアタシのおかげじゃないんだけどね…」

----- 数日前

「お姉えーさまあー！ー！ー！！」
「ちょ、美春！？」

教室で準備していると清水さんが島田さんに抱きついていて相変わらず清水さんは島田さんを慕ってるみたいで、第三者としては見ていて微笑ましい。

「ちょ、神木、見てないで助けなさい！」
「近づく豚野郎はコロシマス・・・！！」
「ごめん島田さん、俺はまだ死にたくないんだ。」

清水さんが出す殺気は本気すぎて怖い…

「っとそうでした。今日はお姉さまに頼まれていた机の件で来ましたの。」

机：ああ！そうか！
俺たちのクラスの机（？）は今現在ミカン箱でとても飲食店が使うような代物じゃないからな。
Dクラスはちょうど机を使わないって言ってたし…それで清水さんに相談してたってわけか！

「それでどうだったの？」
「それが…」

言葉に詰まる清水さん
どうやら何かあったようだ…

「申請許可がおりなかったんです」
「なっ！！」

机の貸し借りは清涼祭中は学校で許可されているはずだ
いったいどうして…

「どうやら風紀委員の妨害があつたみたいです」

「風紀委員？…ってリオの野郎がいる委員か！ アイツ…！！」

「いったい何考えてやがる！！」

「チツ！ 俺、リオの所に行つてくる！」

「待つて神木！」

「しかし…」

「大丈夫や、神木。」

「！！ ライ先輩」

「おう！ だいぶFクラスも準備進んで来とつてええ感じやな！
まあそんなことより…美波ちゃん相変わらずかわええな」

「なっ…／／／」

「おおー！ “あの” 島田さんが照れてる…だと！？」

「やっぱり面と向かつて褒められるのは苦手なのだろうか？」

「と思つていたらライ先輩の後ろで禍々しいオーラを放つ清水さん
が…」

「くっ…協定さえなければあんや奴お姉さまの視界にさえ入れさせ
ないのに…！！」

「今の独り言は聞かなかつたことにしよう！」

第五十話 勉強は机がなくてもできる…はず？

「で、ライ先輩の“大丈夫”は何が大丈夫なんですか？」

「ふっふっふ。それはやな…」パチンツ

先輩が指を鳴らすとどこから現れたのか黒服の人が教室に入ってくる

「坊ちゃん、こちらです。」

黒服の人は先輩に一枚の紙を渡す。

「坊ちゃん言うなよ…ご苦労だったな橘 タチバナ」

「いえ、これくらい楽勝ですよ坊ちゃん。では失礼」

そう言って橘さんという人は一瞬で教室から出ていく。

まるで忍びのような人だった…

「ほれ神木、受けとれ」

「はあ。なにに…『使わなくなった木材を文月学園2-Fに提供します。ハイブリッジコーポレーション』…ってええ!？」

なっなんであんな世界的有名な“ハイブリッジコーポレーション”

が…!？

提供って…どゆこと？

「えっ!？ ハイブリッジって言ったら…あの有名な!？」

やっぱり島田さんも驚いてるようだ。

ちなみにハイブリッジコーポレイションとは、電気製品から食品などなどさまざまな分野で活躍している大企業である

ちなみに文月学園のスポンサーの1人である

「そうや。んで父さんがいらなくなつた木材ある言つてたからめんどいけどそれでテーブル作りや」

「ライ先輩あんたいつたい全体何者ですか？」

「あら？知らなかつたんですか？彼はハイブリッジの社長子息ですよ」

「なるほど… ってええ！！？？」

まじかよ…人はみかけによらないんだな…

だつて先輩だよ？ 弁当の中身お好み焼き率85%の人だよ！？
タイムサービス大好きな人だよ？

「なるほど、だから清水さんは先輩に相談してたわけか。
でもなんで清水さんはそんなこと知つたの？」

「そんなものお姉さまの声聞かため盗t y:名前から連想すれば簡単です」

今この人盗聴言おうとしてた！絶対！

「名前？… ってどういうこと？」

「俺の名字に注目や」

「名字つてたしか高橋… あっ！」

「気づいたな？ 高橋を直訳するとハイとブリッジ。合わせてハイブリッジや！」

「……………」

「今『うわっ… しょーもな』 って思ったやろ！？」

いや、だつてね… そのまんますぎだろ。

.....
ということがあったのさ！

おかげでなんとかテーブルを確保できた俺たち。
もちろん清涼祭が終わったらテーブルは返さないといけないみたい
だけどな。

「別にお前たちのためにやったんとちゃうけどな」

「うおっ！先輩、どっから現れたんですか？」

「橘に教わったんや。　すごいやろ？」

……俺も今度教わりに行こうと思う。

「それより先輩は自分のクラスの出し物の準備はいいんですか？」

「おう。　出し物より美波ちゃんに会いに来るほうが重要や！」

「心配した俺がバカでした。　さっさと帰りやがれ」

「なっ！　ひどいやないか。　なっ美波ちゃん？」

「クラスに迷惑かけるのはいけないと思います」

「グハッ！」

俺の一言ではどうもなかった先輩は島田さんの一言で崩れさる。
おそるべし！！

第五十一話 味覚音痴の人ってどんな感じなんだろう？

「でも、机を確保できたのは大きいよね」

「そうよね。ライ先輩ありがとございます」

そういつて島田さんは先輩に頭を下げる

「美波ちゃんのためならたとえ火の中水の中草の中森の中や」

「先輩、二か所程多いですよ。」

ポ モンの初代OPになっちゃってますよ！

「そういえば吉井たちは？」

「そこにいるのじゃ。つとなにやらムツツリーニが試食を持ってきたようじゃの。」

ワシらも早く食べに行くのじゃ

.....

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では遠慮なく……いただきます」

俺と島田さんと姫路さん、そして秀が手を伸ばし出来立ての胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチしてるわ」

「甘すぎないのもいいのう」

「ムツツリーニ、今度作り方教えてくれ！」

こんなに美味しい胡麻団子初めて食ったよ。
優子にも食べさせてやりたいな…

「お茶も美味しいです…」
「幸せ」

島田さんと姫路さんはすっかり表情が緩んでいる。
やっぱり女の子は甘いものを食べてる時が幸せそうなんだよな

「それじゃ、僕もただこうかな？」
「俺も頼む」
「……………（コクコク）」

吉井とライ先輩はムツツリーニの元へ行く
ムツツリーニはさっき俺達が食べた胡麻団子の皿とは別の皿をおそ
るおそる取り出す
その動作はまるで危険物を扱うようで…ってまさか！！！！

「おい！お前らそれ食ったら死n…」「ふむふむ。表面はゴリゴ
リでありながら中はネバネバ。 表面はゴリゴ
甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても んゴパツ」って遅かつ
たか…」

先輩と吉井は同時に倒れる。
たしかアレは姫路さんが作ったやつだ（ガクブル）

「うーっす。みんな何してんだ？」
「おじゃましまーす」

教室の入り口をみると雄二が帰ってきた
どうやら聞き覚えのある声が…

「あ、雄二。お帰り〜 あとたしかリオ先輩でしたっけ、てんめ
えリオ！ いったい何しにきやがったゴルアア！！」

「はっはっは。何ってそこで倒れてるバカを引き取りに来たんだ
よ」

「バカって…明久の事か？」

「ちょ雄二！ “バカ”僕”みたいな公式勝手に作らないでよね
！」

倒れていた吉井は即座に突っ込む。

もう復活するとは…

なにげアイツの回復力は侮れないな。

「あれ？アキ違ったの？」

「美波まで… センリ君！君ならわかってくれるよね？」

「みんな！吉井はバカなんかじゃない」

「センリ君…」

「もう末期なだけさ…」

「君が一番ひどいよ！…」

あれ？違ったか？

「はっはっはっ。違う違う、ライのお坊ちゃんの方だよ」

「坊ちゃん言うなや！」

「そういえばお二人は同じクラスでしたね」

そうだったのか…姫路さんよくそんな“どうでもいい”情報知って
たな。

「ほらほら。いい加減教室に戻ってこいよ」

「いやや!! 美波ちゃんのないクラスなんか行きたくない!!」

俺は2-Fになるんや!」

「先輩：島田さん若干引いてますよ」

「神木、若干じゃない。かなりよ。」

「シクシクシク… そや!お前もこれを食えや!!」

そういつて先輩はリオに先ほどの胡麻団子を無理矢理食わせる

ちなみに雄二は先ほど食べてしまったようで現在吉井による心臓マッサージ中だ。

「モグモグ… ん?なかなか斬新な味だな。」

「なっ!?! リオ、なんでなんともないん?」

「先輩、こいつは超絶味覚音痴なんです…」

しかし、まさか姫路さんの料理も大丈夫とは…

やっぱりこいつの味覚はどうかしてるぜ!!

第五十一話 味覚音痴の人ってどんな感じなんだろう？（後書き）

いやはや9・5巻が発売されてテンションマックスの作者ですww
だって秀吉表紙ですよ！ 木下姉弟好きにはたまりません！

アニメ2期が楽しみすぎます（*^ ^*）

明日テストという現実を放棄してますww

第五十二話 買収はこつそりと！

「六万だと？ バカ言え。 普通渡し賃は六文と相場が決まって
はっ！」

どうやら雄二は無事だったみたいだ。
全然目を覚まさないから正直かなり焦った…

「坂本君、大丈夫ですか？ どうやらうなされていたみたいですけど…」

姫路さんがおずおずと雄二に質問している
あなたの団子が原因ですよとは言えない…

「雄二、足が攣ったんだよね？」

「足が攣った？ バカ言うな！ あれは明らかにあの団子の」

(ツンツン)

吉井が雄二にある人物を指さす。

その人物は先ほどから美味しそうに姫路さん特製“胡麻団子”を食べていた

(ば、バカな…“アレ”を食べてピンピンしている奴がいるとは…
！！ なんて奴なんだ風紀委員長…！！)

「コホン。 足が攣ったんだ、心配させてすまなかつたな」

まあ平気で食ってるやつ見てたら団子のせいにできないわな。

そして今一瞬雄二の心の声が聞こえた気がするのはいきつと気のせい
だろう

「しかし、リオはいつたい何個“胡麻団子”食ってるんだよ……」
「ん？ いやスマンスマン。なかなか食べたことない味付けだったからつい……な。」

「いや、つい……って。」

「つかマジでよく平気だな！ これからコイツには姫路さんの手料理係を命じたい！！」

「さあてそろそろ行くぞライ！ クラスの皆が困ってたんだ。」

「いやや〜！！」

「そついやライ先輩達のクラスは何をするんですか？」

「男女逆転コスプレ喫茶や！！」

「なるほど。戻りたくなるのもわかります」

流石の俺でもしたくないしな！！

「もう、しょうがないな…… ちょっと島田さん……だっけ？ こっちは来てくれる？」

「はい？ いいですけど……」

そついつてリオは島田さんに耳打ちする。

その後少し顔を赤くしてライ先輩に一言

「その……せ、先輩の頑張ってる姿、み、見てみたいなー……なんてy
「ホンマか！？ リオ！ぐずぐずせんでさっさといくぞ！！」

「まったく。調子いいやつだな。んじゃまお邪魔しました。島

田さん協力ありがとね。」

「い、いえ……！ こちらこそありがとございました」

ん？“ありがとうございました”ってどゆこと…島田さんの手元に吉井の写真があったのは気のせいだとしておこう！

……
吉井と雄二が試験召喚大会に行っている間とりあえず俺とムツリ
―二は昼時に向けての仕込みをしつつ
もの珍しそつにやってくるお客さんの注文の品を作る

「なあムツリーニ、やっぱ昼時は忙しいんかな？」

「…たぶん。多めに作っておいて損はない。」

「そつか。んじゃそのマンゴープリンを冷蔵庫に頼むわ」

「……了解」

「センリ、胡麻団子2つ頼むのじゃ〜」

「はいよつと」

秀は楽しいのかいつもより張り切っているように見える
ふと店内を見てみると見慣れた顔が…

「エリ、お前何しに来たんだ？」

「もちろん秀兄の活躍を“生”で見に来たのさ。」

「おい、“生”ってことはもうすでに盗聴器とか仕掛けてあるんじゃないだろうな？」

「……フツ」

「なんだよ！その『当たり前じゃないか』的なドヤ顔は！！」

最近コイツの将来が（いろんな意味で）本気で心配になってきた。

「それより兄さんはいいの？」

「なにが？」

エリが急に真面目に聞いてくるから俺も自然と真剣に聞いてみる

「優姉が今メイド服なんだよ！ 見に行かないの!？」

「……………なん、だと!！」（ブシュー）

「む、ムツツリーニ！大丈夫か!？」

ムツツリーニ、メイド服という言葉でいったい何パターン妄想したんだ…

第五十二話 買収はこつそりと！（後書き）

ヨシユア13世さん！感想ありがとうございますww

そして彼の心配してくださってありがとうございます！！

書いた自分でも驚いてます（笑）でもきつと世界には彼のように

平気で姫路さんの手料理をたいらげると信じてますww

まあ彼女の作る“肉じゃが”はさすがに無理でしょうが（死にます

ww）胡麻団子ならいけると思ってます…だって皿は溶けてないし！

まあそれでもバイオ兵器に変わりはありませんがね…

きつと今回の“胡麻団子”は塩酸かクロロ酢酸あたりで勘弁してく

れてるんだと思います！（それでもやばいですがね（笑））

第五十三話 輪っかの飾りは王道なのさ!!

「落ち着いたか？」

「……ああ。すまない神木」

「いいって事よ！（あとで優子の写真撮れたら売ってくれ）」

「（……善処しよう）」

とりあえず鼻血で貧血なムツリーニを看病すること5分、商談は成立した。

エリは今からクラスの発表会があるらしい。たしか今年の1年生は合唱だっただけ？

優子が『今年入学していたら不登校なってたわ…絶対に…』ってやけに真剣に言ってたっけ？

そっいえば昔から歌は駄目だったんだよね

「おうおうおう！邪魔するぜ！」

「いらっしやませ」

ん？どうやらお客さんが来たみたいだな。

1人はモヒカンでもう1人が丸坊主？…なんとも個性（主に髪型の）豊かなお客様で。

「ずいぶん幼稚な飾りつけだな。輪っかの飾りなんて小学生かっ
てんだ！」

輪っかの飾りの何が悪いんだ！低コストかつ華やか！
飾り付けの王道に何言いやがるんだコイツらは!!

「そっだよな」 たしかFクラスの奴らがやってんだろ？ さぞか

し机も汚…ってあれ？」

「おい？どうしたんだ？」

「おい！話が違うぞ！他の教室の机借りれなくしといたから汚いミカン箱を代用しているって聞いたのに！！」

なるほど。どうやら清水さんに情報操作頼んどいて正解だったみたいだ。

え？どういうことかって？ 実は…

- - - - -

「今日こそあなたにハッキリ言わせていただきます」「ビシッ！

清涼祭前日、俺とライ先輩は清水さんに人気の少ない第三講義室へと呼び出された。

教室に入ってそうそういきなりこんなことを言われた。

あれ？俺、なんか関係なくね？

「お姉様はあなたなんか絶対渡しませんの！！」パッパッパ

もしかして、これを言うためにわざわざ呼び出されたのか？
つかホントなんで俺まで呼び出されたんだ？

「ふん！ お前なんかに負けてたまるか。美波ちゃんは俺のモンや！！」シュツシュパッ

そういつて先輩も対抗する。

俺：関係ないじゃん… シクシク
というか二人ともしゃべりながらものすごい変な動きをしているのがすごい気になる。

「わかりました。あなたとは一度決着をつけないといけないと思
ってましたの」

「奇遇だな。実は俺もそう思ってたや。」

「しかし、学校内で暴れては先生に怒られてしまいますわ」

「ならとっておきの場所を用意しちゃう！ ついて来いや（神木、
行くで！）」

「は、はい？」

結局俺は先輩に引っ張られるまま講義室を後にする。

「・・・・・・・・」

教室を出るときにちらりと見えた人影はきつと気のせいだろう。

第五十四話 盗聴器って…欲しくありません？

「うわあ…俺、リムジンなんて初めて乗りましたよ！！」
「そうか？ まあお前んとこの両親は海外におるけん車にはあんま乗らんもんな？」

いや、両親いてもリムジンなんてそうそう乗れねーよ…なんて心の声は言わないでおいてっと。
今現在、俺と先輩…そして清水さんは先輩が用意したリムジンで先輩の言う“とっておきの場所”という所へ向かっている。

「というか結局なんで俺まで連れてかれてるんですか？ 準備終わって早く帰れそうだったからタイムサービス行こうと思ってたのに…」
「相変わらず家庭的やなセンリちゃん？」
「先輩にちゃんづけされるとか…鳥肌モノですね、気持ち悪い。」
「ひどっ！」

ああ鳥肌が…

「てか先輩？ 俺たち何処へ向かってるんですか？」
「ん？ 何って…俺の家やけど？」
「ふーん…ってええ！？ とっておきの場所って先輩の家だったんですか！？」
「ああ。 盗聴対策はもちろん、安全面は確実に確保される。これ以上ない安全な場所や」
「ええーっ」と…一から説明をお願いシマス」

もう盗聴対策とか安全とか何のことだかサッパリ過ぎて混乱してきた…

「せやな。 さっきな俺たちは会話しながらこういう動きしとったる？」 パツパツパ

そういうと先輩は先ほどの動きを再現しながら説明を始める。

「これは俺と清水とで作った暗号なんや。」

「暗号つて…お二人はすごく仲が悪いのによくそんなことができましたね？」

「ああ。 まあ今は一時休戦つてことになつとるんや。」

「休戦つて…？」

「そのことについては私からお話しさせていただきます。 実は…力クカクシカジカポポポーン」

「えっ！？つてことはつまり清水さんは教頭の会話をたまたま盗聴器で拾つて学園の危機を知り、

島田さんの笑顔を守るため先輩に仕方なく協力を要請したつてこと！？」

「今のでようわかつたな！」

フツ俺をなめてもらつちや困るぜ

「んでなんで俺まで巻き込まれなきゃいけないんですか…？ そういふのは風紀委員か試召戦争管理委員かなんかに…」

「それなら相談する相手は間違つてませんよね？ “アスカ”の神木さん？」

「……………先輩？」

「いや！俺やないぞ！！ 断じて！」

「んならどうして…ってああ！」

なるほど！盗聴器か！

「まっそういうことです。協力してくれますよね？ “アスカ”さん？」

「うっ… まあそういうことなら仕方ない。」

「ああ！忘れとったけど顧問は委員として動いてくれて構わんってさ！」

「はあ…まったく。」

こうして文月学園救済計画は始まったのであった。

第五十四話 盗聴器って…欲しくありません？（後書き）

相変わらずの駄文すいませぬ！

清水さんの口調がいまいち掴めなくて…すいません！！

誤字脱字矛盾といろいろ欠陥ではありますがこれからもよろしくおねがいしますww

.....
そして今に至る・・・

というわけで作戦の1！

どうやら教頭はFクラスを重点的に攻めてくるということなので（学園長室での吉井と雄二の会話は盗聴済み）『妨害を妨害しよう作戦』を実行中である。

「くそっ！こうなったら料理に文句言ってるぜ」

「そうだな！おい！注文したいんだけど？」

「はい。少々お待ちください。」

秀が変な頭2人組の元へ注文を取りに行く。

「ご注文は何でございましょうか？」

「そっだn... 貴方で。」

「おい！常村！お前何言ってるんだよ！」

「ご、胡麻団子ですね？ 少々お待ちくださいませ」

...若干秀の笑顔が引きつっていたが見なかったことにしよう。

「胡麻団子を1皿頼むのじゃ...」

「秀、休憩入っていいぞ」

「あ、ありがとなのじゃ」

.....

というわけで俺が胡麻団子を持っていくことになった。

「おい！この店の机はみんな腐ってんのか？ 簡単に壊れちまったよー！」

坊主野郎の言うとおりどうやら木が若干腐りかけていた所だったらしい。

だからと言ってみんなで一生懸命作った机を壊されるとは…なあ？

「お客様？」

「あん？」

「昇竜拳！！（という名の右アッパー！）」

「グハッ！」

「な、何すんだてmコペッ」

「お客様、店内で暴れられては困りますなあ？」

おっ雄二たちが帰ってきたみたいだ。

「雄二、コイツら俺たちが作った机壊しやがったんだぜ？」

「そうか… んじゃま、覚悟はいいでしょうか？」

「「こ、こんな店二度と来るかつっ！！」「」

迷惑客コンビは雄二の気迫に負けたのかダッシュで教室から逃げに行った。

「ふむ、まだまだ殴れると思ったんだがな…」

うん。 やっぱり雄二はドエスだな！

第五十五話 アニメ2期絶賛放送中!! (後書き)

本日バカテス二期の1話を見てきました!

やばいですねww

島田さんの浴衣姿が早く見たいですww

でも一番は優子と秀吉の絡みが楽しすぎて大変です(私が!)

木下姉弟にはもっと活躍してほしいですね!

第五十六話 楽器が違えば曲の印象も大きく変わるものさ

「どうする雄二？ テーブルをアイツらに1つ壊されちゃったし…
もう予備もないよ」

ただでさえ少ないテーブルなのに…
アイツら次に出会ったら姫路さん特製“胡麻団子”を食わせてやる
う。

「大丈夫想定内だ。 明久、行くぞ」

「了解！ ってことだからちよつと待っててね」

「え？ あ、ちよつと！！ ……行っちゃった」

あの二人はいつたどこへ行ったんだらうか？

- - - - -

数分後…

ピーピーピー ピーピーピー ピーピーピー (ダースベ
ー) のテーマ口笛バージョン) ピッ…

誰の携帯だよ。物好きだな。つか口笛バージョンってすごいマ
ヌケに聞こえるな…

「もしもしなのじゃ。 おつ明久かの？ どうしたのじゃ？」

秀のかよ！！ お前のセンスは一体どうなってるんですか！？

「わかったのじゃ。 今からそこへ向かうのじゃ」

「えっとその…葉月は今お兄ちゃんを探してるです」
「お兄ちゃんの名前は？」
「あう…わからないです…」

どうやら家族ではないみたいだ。
そしてお兄ちゃん…いい響きだ。

「そのお兄ちゃんの特徴はわかるか？」
「ええっと…バカなお兄ちゃんでした。」
「ふむ…それはいつぱいいるんだが」

まあFクラスのほとんどバカだからな

「他には？」
「えっと…すごいバカなお兄ちゃんでした。」
「なるほど。吉井だな。」

うん、すつごくわかりやすいヒントだった。
教室にいた吉井が涙目で俺らを見ているのは見間違いであろう。

「失礼な！僕はそこまでバカじゃな」
「あっ！！バカなお兄ちゃんだ
！！」
「グハツ！」
そういつて葉月ちゃんという子は吉井にタツクルする。
あれ鳩尾に入るとけっこう痛いんだよな。

「んで？お前とこの子はどついう関係なんだ？」
「いや…それが覚えてがなくなつて」
「えっ？ お兄ちゃん…。覚えてないつてひどい……」

葉月ちゃんは一気に泣きそうな顔になる。

「明久　ではなくバカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな、バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかの？」

「バカなお兄ちゃんはモノを覚えるの苦手なんだよ。スマンな」

逆に今度は吉井が泣きそうになっていた。

「ただい…でもでも、葉月はバカなお兄ちゃんと結婚の約束までしたのに…」瑞希！！」

「はい、美波ちゃん！」

「殺るわよ（ます）」

「ゴブアツ！！」

ナイスタイミングで帰ってきてしまったお二方に関節技決められている吉井。

たしかアレはなかなか抜け出せないタイプの奴だな。ふっ…島田さん、また腕を上げたな。

「姫路に島田か、どうやら勝ったみたいな」

「お疲れなのじゃ」

「ちょ、助けてくれないの！？　それに僕は結婚の約束なんて全然

「ふえええん！酷いですっ！ファーストキスもあげたのに！！」

「神木！ナイフ貸してくれない？　5本もあれば足りると思うから

「りょーかいww　今ならおまけで3本つけとくよ」

「あ、私にもお願いします」

「はいはい」

「ちょ、神木君！そんな物騒なもの渡しちゃだめだからね！！　そ

して2人は僕の話聞いてえー!!」

「しょうがないわね。 ナイフ2本差したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい。」

「美波、ナイフは一本でも致命傷だからね?」

うん。 今日も2・Fは平和であった。

第五十七話 胸の大きさなんて関係ない!…関係ないよね?

数分後、吉井はなんとか誤解を解き、ちびっ子：葉月ちゃんの事を思い出した。

「そっぴや、どうして美波は葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何もウチの妹だもの」

「へ?」

やっぱりか。なんか似てると思ったんだよな!

成長しなさそうな胸とk「グハツツ!!」

「なんかよくわかんないけど急に神木を殴んなきゃいけない気がしたのよ」

「葉月もです」

二人の息のあったストレートをもろに食らった俺はフラフラと立ち上がりつつ…

「なぜだ! 別に貧n…」バタツ

島田さんに音もなく俺の両腕の関節を外され且つ意識まで奪われる。彼女の前世はきつとやり手のアサシンだ…な…

- - - - -

「ん…ここは?」

「あつ! 神木君、気がついた?」

気が付くと俺は2-Aの店の前にいた。

どうやら吉井がここまで肩を貸してくれていたようだ。
ていうか最近倒れることが多い気がする…
最近日課（素振りなどなど）してないからかな？

「ああ、吉井。ありがとな。　ところでいったいなぜ俺達はここに
いるんだ？」

「この中に僕らの営業妨害をしている奴がいるらしんだ。」

「まあ大方先ほどの奴らだと思うがな。　あとついでに昼食休憩だ。
」

「なるほど。　んでなんで雄二はさっきから逃げようとしてんの？」

「いや、ちよつと用事を思い出して…」

そっか、ここはたしか雄二の苦手とする（いい意味で）霧島さんの
クラスだったな。

「まあまあ。　そんな用事ほつといてさっさと入ろう！」

「そうだよ雄二、こんな機会めつたにないんだよ？」

「か、神木！明久！　後生だ！やめてくれー！ー！！」

雄二の意見お構いなしに俺と吉井で雄二を引つ張って中に入れる。
人の恋路は盛り上げてこそだっておじいちゃんが言ってたしな！

第五十八話 キャラじゃない？寝言は寝て言え！！

「…おかえりなさいませ。ご主人様にお嬢様。」

中に入ってみるとメイド服を着た霧島さんが俺たちをむかえてくれた。

クールな雰囲気とメイド服が見事にマッチしとても似合っている。

「お姉さんきれ〜。」

「……チツ」

葉月ちゃんは霧島さんのメイド服姿に見とれているようだ。

しかし雄二はいくら照れ隠しとはいえ舌打ちはいけないんじゃないか？霧島さんが傷ついちゃうんじゃないか？

「…おかえりなさいませ。今夜は帰らせませんダーリン。」

うん。俺の心配は杞憂だったようで。

「霧島さん大胆です……！！」

「ウチも見習わないとね……！！」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様のリアクション。吉井も大変だな！

「では、お席にご案内します。」

昼時に近いからか結構人でいっぱいだった。

心配そうに吉井に声をかける姫路さんと学園祭でテンションが上がっているのかいつもより積極的な島田さん。
なんか…がんばれって言いたくなるな！

「ホント！？　ありがとう美波！！」

そんな彼女の心境も知らずこの天然無自覚野郎は嬉しそうに目を輝かせている。

あれ…おかしいな？　吉井に犬耳と尻尾がついてるように見えた。

「べ、別にアキのためなんかじゃなくて……そう！あとでしっかり働いてもらうためなんだからね！！」

「うん！任せてよ。」

そんな二人の周りでは姫路さんと久保君が悔しそうに……ってアレ？

「吉井君……」

久保君いつのまに……（汗）

第五十九話 祭りの季節になりましたww

「よし。僕は『とろとろオムライス』で！」

「ウチは…『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです。」

「葉月もー！！」

オムライスとシフォンケーキが…

オムライスはどうかかわかんないがシフォンケーキは俺のお墨付きだ。

あんだだけ特訓したんだしぜったいおいしい…と信じてる！

「んじゃ霧島さん。俺は…（ゴニョゴニョ）」

「……わかった。」

「んじゃ俺は」

「……ご注文を繰り返します。『とろとろオムライス』が1つ。『ふわふわシフォンケーキ』が3つ。」

神木の注文が1つ。『メイドとの婚姻届』が1つ以上でよろしいですか？

「あ、はい。大丈夫です」

「全然よろしくねえぞつ！！」

「どうしたんだよ雄二。ちゃんと注文通りじゃないか。 なっ？」

「神木…あとで覚えとけよ」

「そついや神木はAクラスに料理教えてたんだよね？」

「うんそだよ。デザートしか教えてないけどね」

「そういえば神木君はお菓子作りが上手でしたよね。」

「この間持ってきてくれたクッキーとってもおいしかったですね。今度は私も作ってきますね。」

「いやいやいやいや！！ そんな姫路さん！ここは菓子作り得意な俺に任しときなさい！！」

「いや、でも…」

「お待たせしました。」

どうやら料理が来たみたいだ。店員さんマジナイスタイミング！！料理を持ってきた人はどうやら霧島さんじゃないみたいだが…！！！！

「ゆ、ゆゆ、優子さん！？ なしてあなたがこんなところに！？」

「何言ってるのよ？ ここはAクラス、私のクラスに決まってんじゃない。」

「いやだってエリの情報によれば貴方様はこの時間帯には入ってないって…」

「いや、私この時間帯しか入ってないんだけど…」

エリめ！謀ったな！！！！

…でもでもよくよく見れば優子のメイド服姿はすんごいかわいい。

胸元のふりふりと黒を基調としたメイド服は優子の慎ましやかな胸を隠しかつ大人なクールなイメージを…って俺は何を！落ち着け自分！！

「さっきから何ブツブツ言ってるのよ。」

「はっ！いやその…優子のメイド服姿が…」

「何よ…ハッキリ言いなさい」

「俺の好きなキャラみたいで可愛肩の関節をはずされてすっごく痛い
…！！！！！！」

「あれは神木の自業自得ね」

「そうですね」

「そのまま見ろ」

ほ、褒めたつもりなのに…

第五十九話 祭りの季節になりましたww(後書き)

更新遅くてすいません(汗)

ここ三日間テストだったので…

え？もうテスト終わったかって？

明日までありますよ(笑)

頑張ってくださいww

第六十話 明日から夏休み！ 8日間しかないけどね！

「はい。こちら『ふわふわシフォンケーキ』と『とろとろオムライ
ス』になります。」

「わぁーおいしそうww」

「久しぶりのカロリーだよ。ありがとね美波。」

「ど……どういたしまして！」

はは、島田さん照れてるな。

あんなに顔赤くしちゃって…微笑ましすぎるっ！！

教室の外で『ヨシイコロス』と聞こえたのはきつと気のせいだろう。

「……雄二、はいコレ。」

どうやら雄二のは霧島さんが持ってきたみたいだな。

婚姻届って言ってたけど流石に冗談だよな？

「ちよ、翔子！ コレ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入
れたんだ！！」

「……今日学校行くとき、雄二のお母さんが渡してくれた。」

なんだと！！ すでに親公認か！！公認なのか！？公認のです
か！！！？？

つかまさかの本物！！しかもあとは判押して名前書いたら完成の状
態じゃねーか！用意周到すぎるよー！！

「つとあとは『お子様ランチ（玩具付き）』だけど…頼んだのは一体どのお子ちゃまかしら？」

優子はニヤニヤしながら聞いてくる。

絶対わかって言ってるよこの人…

「えっそんなの頼みましたっけ？」

「葉月が頼んだの？」

「いや葉月じゃないですよ」

「えっ？ じゃあ…」

こっそりと俯きながら手を挙げてる人物が…

「やっぱりアンタだったのね。そんなに恥ずかしがるくらいなら頼まなけりゃいいのに…」

「いや待て優子。俺は別に玩具が欲しくて頼んだんじゃないんだ。お子様ランチが美味しそうだったから…」

「そう…ならこのオマケの“ノインちゃんのヌイグルミ”はアタシがもらつと…「スイマセンでした！！ オマケ目当てで頼みましたっつ…！！」」

「初めから正直に言えばいいのよ。 んじゃ…あとでちよつと話あるから。食べたならアタシのところに来なさいよ」

そういうと優子は勝ち誇った顔でセンリにヌイグルミを差し出す。

センリはあとで何があるんだろかと考えながらもとりあえず頷いた。

.....

しばらくご飯を食べていると見たことある（髪型の）2人が店内に入ってきた。

「邪魔するぜ」

「邪魔するなら帰って〜」

「あいよ〜…って何さすんじゃないライ!」

「あははは。相変わらず面白い奴らやな」

どうやら入り口の近くにライ先輩がいたようで（気づかなかったが）有名な新 劇の定番ネタ（？）をやってくれた。

さすがライ先輩だ。毎週録画しているだけあるな!

ってそういえばいつの間にか雄二と吉井がいなくなってる?

「お前ら何しに来たん?」

「何しにつて飯食いに来ただけだが…」

「そか、いやなんかな、噂でお前らがどっかのクラスの営業妨害しとるきいたからな…まさかな〜と思って」

ライ先輩は笑顔だが目が笑っていなかった。どうやら怒ってるみたいだ（ガクブル）

噂というのはきつとFクラスの事だろう。加えて吉井に対する恨みも交じってんじゃないだろか?…常夏コンビどんまいww

「い、いや俺たちはそんなことしてないぞ! なっ?夏か…わ?」

モヒカンさんが後ろを振り向くと坊主さんは頭にブラジャーと呼ばれるものをつけていた。

「ククツ…なんや? 夏川君はそんな趣味あつたんか?」

「ご、誤解だ高橋!! クソツ…これ外れねーじゃねえか!」

「しょうがない出直すぞ夏川!」

「畜生覚えてろよ!」

「逃がすかつ! 追うぞアキちゃん」

「了解、でもその呼び方やめて！」

どうやら近くにいた女の子は吉井だったようだ。

アキちゃんか…なかなかのネーミングセンスだな！

第六十話 明日から夏休み！ 8日間しかないけどね！（後書き）

とりあえずテスト終了!!

追試の可能性大ですがまあ頑張ります W W

第六十一話 ロミオとジュリエット…どんな話だっけ？

あのあと俺たちは会計を済ませ俺は優子のところに、女性3人は少し清涼祭を見て回るらしく、雄二と吉井は常夏コンビを追い掛け見事になった。

会計の時に雄二が千円で売られていたことは黙っておこう。

「んで話ってなんだ??」

俺は約束通り優子のところへ行き話を聞きに行く。

どうやら優子は今から休憩のようのでメイド服はすでにいつもの制服へとなっていた。ちよつと残念…

「今から少し付き合っってほしいところがあるんだけど…アンタしばらく店番とかないんでしょ？」

「そうだけど…ってなんで知ってんのさ!？」

「秀吉脅し…コホン。秀吉に聞いたのよ。」

秀…だからお前、朝ボロボロだったんだな!

.....

「んでどこに行くんだ？」

「……演劇部」

「へ？」

「だーかーら！演劇部見に行くって言うてんのよ!」

「でもでも優子、この間は『絶対見に行かない』言っってなかったか？」

「そっ…それは………そう！チケットが余ってたから仕方なくよ!」

素直じゃないな

実は優子は演劇部の定期発表会などでいつも『行かない』と言いな
がら結局変装して毎回行ってるらしい。
なんだかんだ言って弟思いなのだ！

「な、何ニヤニヤしてんのよ。 気持ち悪い。」

「ひどっ!!」

「ホラホラ早くしないと席無くなっちゃうわよ」

.....

ブ

『只今より演劇部の発表会を始めたいと思います。』

ロミオとジュリエット（文月学園バージョン）

『ああ秀吉、あなたはどうして秀吉なの?』

『姫、それは貴方が私を秀吉と呼ぶからですよ』

..... あれ?これって本当に“ロミオとジュリエット”なのか??
つか相変わらず秀の演劇はすごいな! こう...言葉では表せない感
動があるというか.....

数十分後...

『こうして二人は文月学園に入学したとさ! めでたしめでた

し
』

ちよ…!! ロミジュリ成分どこ行つた!!
しかも周りの人泣いてる人多いし!!

「なあ…優子、どうだ…っただって優子さんも泣いてるし!」
「グスっ…べ、別に泣いてないわよ。これは目薬よ!」

普段泣かない優子を泣かすなんて…演劇部すげえ!

「まあ…秀すごかったもんな。 やっぱ将来はそっちのほうへ行く
んかな?」

「たぶんそうみたいよ。 アイツがここまでハマるのは生まれて初
めてだったしね。」

「そうだよな〜今じゃかなりの演劇バカだし」

「でも少し羨ましいかな… 同じ双子なのにアタシにはまだ将来な
りたいものがないもの」

「…優子」

将来か…俺もまだそんなにハッキリとやりたいものないんだよな。
ただ今の生活が長く楽しく平和に続けばいいな

「はあーやめやめ! ホラ、アタシお昼まだなのよね! アンタの
クラスで何か御馳走しなさい?」

「りよーかいww」

せっかくだから美味しいマンゴープリンでもご馳走しますか!..!

第六十二話 女子より女装した男子の方が女の子らしいコトについて…

俺と優子は少し寄り道しつつFクラスに戻ってきた。

「あ、いらつしゃいませー！中華喫茶ヨーロッパへようこ…そ…」

店に入るとチャイナ服の女の子…ではなく、チャイナ服の秀が出迎えてくれた。

相変わらず演技モードのなると別人みたいになるんだよな。

しかし…気のせいだろうか？隣にいる優子さんからもものすごい殺気を感じる…（ガクブル）

「あら秀吉、ちょーつとこっちに…来なさい？」

そついつて秀の腕を掴む優子。目が！目が笑ってない！！

秀…死んだな。

「あ、姉上？ そつちはスタッフルームなのじゃ！！ 関係者以外立ち入りは…」

「センリ、いいわよね？？」

「ど、どどどぞぞ…！ご自由にお使いくださいませ…！」

「ほら、関係者がそつ言ってるわよ？」

「後生じゃー！！センリ助け！」秀、俺はやっぱりまだ死にたくない…」

スタッフルームから『姉上！ワシの関節はそれ以上増えないのじゃー…』と聞こえた気がする。

.....
「んで…どうすんだよ…接客。 雄二や吉井たちは今試召大会中だし…」

「し、仕方ないじゃない！！ つい手が出ちゃったんだから…」

どうやら優子のなかでは“秀の女装＝粛清”が定義づけられているらしい…

まあ実際問題秀はモテるからな…男子に。

「こうなったら…！アタシが秀吉の代わりにチャイナ服着て接客するから…」

なんか嫌な予感…！！

「アンタも女装して接客しなさい…！」

「はっ!?!」

「そうよ、それで万事解決じゃない！」

「いや待って優子さん！！勘弁！それだけは勘弁だから …！」

.....

「かわいいじゃない、千里 ちさと ちゃん？」

「シクシクシク」

セリはスタッフルームにあった黒のチャイナ服に結んでいた髪をおろしさらにエクステをつけさせられた。

なぜエクステとチャイナ服があつたかは…内緒だ。

セリはもともと中性的な顔立ちをしていたので髪が長く見えることにより余計女性らしく見えてしまう。

(千里 ちさと って…いやまあ昔からそうやって弄られてきたけども…)

「ほら、行くわよ」

そういう優子は青のチャイナ服を着てささと店のほうへ行く。
ええい！男は度胸だ！きつとなんとかなる…はず！

第六十三話 夏休みってこんなに短いものなの!?

「ねえ君、どこのクラスなの?」

「あとで一緒にお化け屋敷とかどう?」

「いや…その…」

全国のみなさんこんにちは。

俺は今大変な状況にありますのです。なんとまあ……………ナンパされておるのですよ……………

なんで!男の俺が!男にモテなきゃいけないんですか!?!
畜生!どうせなら女の子にモテたいよ!

「千里ー! さつさと胡麻団子運びなさい?」

「へえ〜“ちさと”ちゃんっていうんだ?かわいいね。」

「え、えーっと…し、失礼します!!!」

なんとかその場を脱出するセンリ。

急いで厨房のほうへ向かっていった。

「たく…いつまであんなのに絡まれてるのよ。あんなの三秒で終わらせなさいよね」

「いやだって…(人生で初めてモテたのが女装したときでかつ相手が男とか心が折れるからね!…っていう心中はあえて隠してみたり)」

「だって…じゃないの!! なんか急に忙しくなってきたんだか

らちゃんとしなさいよね!」

「……………了解でアリマス」

…数分後…

「ただいまー…つてええー!!」

「あ、おかえり吉井。 やっと帰ってきたんだね。 待ちくたびれたよ」

「アキ！（吉井君！） この女はいったい誰なのよ（ですか）！！
??」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 僕はこの子のこと知らないんだけど…」

むむむ、どうやら皆俺の事気づいてないみたいだし少しおちよくつてやるのかな？

「ひどいわ吉井君！私との事は遊びだったのね！！」

「…なんだと！！??」

突如教室にFFF団の格好した集団があらわれた。

「皆のモノ！！今の千里ちゃん言葉を聞いたか!?!」「おう！！」

「今ここに！容疑者吉井明久をFFF団の名の元に肅清する！」

「ご、誤解だよ！！僕の知り合いには千里ちゃんなんていないし…」

「みんな待ちなさい！」

「美波：美波はわかってくれるんだね？」

「肅清はウチ達で行うわ」

なんとというか…ほんと騙してごめんね吉井…

そろそろばらしてあげようかn「あ、帰ってきたみたいね。 ホラホ

ラさっさと手伝なさいよ。」

「おい…どうしてAクラスの木下がここにいるんだ？…ってことは
その奴は神木か!？」

「ははは…雄二正解！」

「『『『『 ええっ!!』『』『』」

なんかそこまで驚かれると逆に傷つくんだが……

第六十四話 時給690円!!…って安いのだろうか？

とりあえず俺たちは事の経緯を雄二たちに話した。(一部を除く)

「ってことはつまり突如倒れた秀吉の替わりにお前たちがウェイトレスをやっていたと…そういうことだな？」

「そうそう(まあ倒れた原因は優子なんだがな!)」

「でも秀吉大丈夫かな？」

「だ、大丈夫よ。ちよろつと働き過ぎたんじゃないかしら？ ホラ、演劇のあとだったし…」

「そ、そっぴや試召大会どうだったんだ？」

とりあえず話題をそらそうとネタを変えてみる。
すると雄二を除く三人は若干目をそらしつつ…

「あー…雄二の勝ちかな？」

「そうね、坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「うーん……なんというか」

なぜか吉井が囿に使われた光景が目には浮かんだ。

「ところで神木はいつまで女装してるのよ？」

「うっ…俺も早く着替えたいんだがな…(チラッ)」

「駄目だ。どうやらお前目当ての客もいるみたいだししっかり稼いでもらうぞ。“ちさと”ちゃん？」

店のためといいながらさまあみろという顔で言う雄二。

「ひどいよ雄二……（いつぞやの仕返しかコンチクショウ！後で覚えとけよー！）」

「そうだ。せっかくだから木下さんはここで昼食食べて行ってよ。手伝ってもらったみたいだしサービスするわよ？」

「いいの？じゃあお言葉に甘えて……」

島田さんのご厚意に甘えて優子は2人用の席に座る。

「ホラ神木も行ってきたさい？」

「えっ……いいの？」

「ちよっとだけよ。でも服装はそのままだね？」

「……うっ……了解でアリマス」

「わかればよろしい。」

「ごちそうさま。はぁーおいしかった。ありがとっね島田さん。」

「いえいえこちらこそ」

どうやらこの二人は仲良くなれそうな雰囲気だ。

「んじゃアタシはそろそろ試召大会あるから戻るわね」

「えっ？木下さんたちもでてるの？」

「そうよ。次勝ったらたしかあなた達と勝負みたいだし……よろしくね？」

じゃあまたと言って優子はFクラスをあとにした。

数分後……

「むっ…」こはどこじゃ？」
「お、秀が目覚ました。大丈夫か？」
「むーなぜか意識を失う前の記憶がないのじゃが…」
「ほ、ほら働きすぎて疲労で倒れちゃったんだよ…！」
「うむ…あとなぜか関節がギシギシと痛むのじゃが…」
「あー…きつと気のせいだよ。」
「そうかの？ まあとにかく休んでしまった分働かねば…！」
「そうだね！がんばろう！」

秀も意識を取り戻したようなのでようやくFクラスフル稼働のよう
です。

「ところでなぜセンリは女装しておるのじゃ？」
「うう…気づいてくれたのは秀だけだよ…」

今日の事を通して秀の気持ちがいさしわかったような気がした気がす
る……

第六十五話 落とし穴ってはまってみたくなるなあ…

「それじゃ、準決勝行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わかってるって」

「雄二も頑張れよ〜」

「ふん。言われなくても！」

これから雄二と吉井はAクラス霧島さんと優子のタッグと勝負らしい。

俺としてはやっぱり優子に勝ってほしいがクラスのためにFクラスにも頑張ってもらいたいんだけど…

「でもでも雄二は大丈夫なのか？ 相手は霧島さんみたいだし…」

「ふっふっふ…いつもの俺と思うなよ！ ちゃんと作戦は用意してある…！」

こうは言っているがコイツは霧島さんのことになると全然頭働かないからな〜

「まあ正々堂々戦ってこいよ？」

「うっ…うん！もちろんだよ…！じゃ、じゃあ行ってきまーす」

…なるほど、卑怯な手を使うのか…

…

「神木！。ちょっと頼みたいことがあるんだけど…」

吉井たちが大会に行つて数分たったころライが教室に入つてきた。

「あーライ先輩。クラスの方はどうですか？」

「もちのろんで大盛況…と言いたいところやけどイマイチな…っ
と言つことで神木をちょい借りてくわｗｗ」

「えっ！ちよ！」

こうしてセンリは強制的にライの教室に連れてかれるのでした。

- - - - -

数十分後…

「っ、疲れた…もうダメ。……つてアレ？秀達がない??」

センリはライに連れられ“男女逆転喫茶”で存分に働かせられた。
もちろんチサトちゃんの名前で働かせられたので疲れたといつても精神的なものが80%を占めている。

やっとのことで帰つてきたFクラスを見渡してみると先ほどまで働いていた秀吉や島田さん、姫路さんがいなくなっていることに気付いた。

あたりを見渡してみると慌てたように教室に向かつてくる吉井たちを見つけた。

「神木君！丁度いいところに！！ どうやら姫路さんたちが連れ去られたみたいなんだ！」

「な、なんだって!!……ということとはもしかして秀も!？」

「ああ、そうみたいd「兄さん!!秀兄が!秀兄が!!」

雄二のセリフを遮つてセンリの妹エリが教室に勢いよく入ってくる。その表情は焦りと怒りが混じつたようだった。

「場所は何処だっ!！」

「神木、落ち着け。焦っていても何も始まらないぞ。場所は今ムツツリーニが調べているから」

「……場所がわかった」

「よくやったムツツリーニ。調べ方はあえて聞かないとしよう。

さてさて、悪者さっさと退治して姫を救出いたしますか。王子様方？」

「私も行くからね!」

「エリちゃんは残ってなきゃ!女の子には危ないよ!」

「いや、大丈夫だ吉井。コイツはお前より強いからな」

「へ?どういうこと?」

「コイツは実は男^{バキッ}、伊達に“神木”の名を名乗ってるってわけじゃないってことですよ?」

エリはセンリの右手首の関節を一瞬ではずし平然と笑顔で吉井の質問に答える。

「さあ俺たちを敵に回したこと後悔させてやるっぜ!」

第六十六話 シリアス？ それっておいしいの？

とあるカラオケボックスの一室にて…

そこは少し広めの部屋でカラオケボックス特有の薄暗さが怪しい雰囲気を作り出していた。

中には男が7人とその男たちに囲まれて怯えている女の子達（一部秀吉が）いた。

捕まっているのは姫路、島田姉妹、秀吉、そして丁度遊びに来ていた優子と霧島さん。

抵抗できないのは葉月ちゃんが人質になっているからだった。

side 木下優子

（どうしよう…葉月ちゃんが人質にとられて代表も抵抗できないし…。

つかなんで秀吉は尻撫でられて涙目にコッチ見てんのよ！少しは男らしくなんかしなさいよね！）

「さて…どうする？坂本と吉井…だったか？ たしか依頼はその二人の足止めすればいいんだったよな？ 楽勝じゃね？」

（依頼…どうやら坂本君と吉井君が狙われているみたいね。 でもいったいどうして…？）

「そおだよなー コッチには人質もいるんだし？ アイツらも手は出せねえだろ」

「待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが中学時代は相当鳴らしてたらしいからな」

「坂本って…まさか“アノ”坂本か!？」

「ああ…できれば事を構えたくはないんだが…」

(へへそうなんだ。まあ体格いいから何かスポーツやってたのかなとは思ってたけど…)

「だが我らが請け負った依頼はアイツらを動けなくすることだ。衝突は避けられないぞ?」

「だからこその人質だろ? ほらこいつ等だつてこのちびっ子人質にとればあっさりと捕まってくれたんだし、楽勝じゃん」

ある男は葉月ちゃんにナイフを突きつけながら言う。

「お、お姉ちゃん…」

葉月ちゃんは恐怖のためか声を震わせ涙目で姉に助けを求めるが美波達はロープで縛られて動けないでいた。

「アンタ達! いい加減葉月を放しなさいよ!！」

「おお! 姉妹愛ですか? いいねえ。」

「俺涙が出ちゃうよ! …なあーんてな!」

(コイツ等…!！)

「(…優子、落ち着いて。今動いたら駄目)」

優子は抗議しようと若干腰を浮かせるが隣にいる霧島さんの小声でなんとか冷静さを保つ

「(でも代表…このままじゃ…)」

「(…大丈夫。雄二達がきつと助けに来てくれるから…)」

そういう霧島さんの表情は本当は雄二にこんな危ない場所に来てほしくないという感情が出ているようだった。

(でも…もし彼らが間に合わなかったらその時はアタシが…)

side 神木千里

『俺涙が出ちゃうよー…なあーんてな!』

ムツツリーニの持っていた受信機から音楽とこんな会話が聞こえてきた。

(依頼…ねえ。 やっぱりあのクソ教頭が絡んでんのだろうか?)

「待て明久。勝手に行動するな。気持ちは分かるがまずは人質の救出が先だ。ムツツリーニが潜入し中の詳細を掴むまで待て」
「くっ…わかったよ」

(どうやら吉井は今にも突入しようとしていたようだ。その気持ちは痛いほどわかるがこういう場合冷静さを欠くと後々大変なことになるからな)

『……灰皿をお取替えします』

(どうやらムツツリーニは潜入に成功したらしい。 周りの皆もそのことに気づきてないみたいだ。)

『ああ、頼むな。 そっぴやさ人質の女の子達結構レベル高くな?』

『それそれ！俺も今思ってたんよ！』

『アイツら来るまで暇だからさ…ちょっと遊んでもいいんじゃないの？』

『だよなあ！』

(やばい！ なんか話が危ない方向に行きかけてる… そろそろ行動せなやばいかもしれない)

『あ、あの…葉月ちゃんを放して私達を帰らせてください！』

『だってさ〜 どおする？』

『お嬢ちゃん？ 君たちは今“人質”ってこと分かってんのかな？
そんな要求通るわけねえだろ？』

『やつ！ さ、触らないで』

『やめさない！』

(……この声…も、もしかして……！！)

第六十六話 シリアス？ それっておいしいの？（後書き）

いやはや…読みにくい&文才なくてすいません!!
しよ…精進します!!

(痛っ……)

バンツ!!

突如扉を開ける大きな音に失いかけた意識を一瞬取り戻す…

『おいてめえら…覚悟はできてんだろうなっ!!…!』

(この声は…セン…り?…)

…がしかし、だんだんと朦朧とする意識の中、アタシは幼馴染の声を聴いて意識を失った。

- - - - -

side 神木千里

『きゃっ…』 ガシヤアアン!!

「「「!!」」」

優子!?

「……吉井、行くぞ」

「…了解だよ」

自分でも驚くぐらい冷静に吉井に声をかけつつ俺は思いっきりドアを開ける

バンツ!!

「おいてめえら…覚悟はできてんだろうなっ!!…!」

「なっ！誰だ！」

「よ、吉井君？」

「アキ……」

「まあ言いたいことは色々あるが……まずは……」

「「よくも優子（美波）に手をあげてくれやがって！！（たな！！）
全員ぶち殺してやるッ！」」

と意味つつ俺と吉井は近くにいた2人を殴った

「こ、コイツ吉井って野郎じゃ……！？」

「んじゃ隣にいる奴が坂本か！？」

「残念だったな。俺はこつちだぞ……っと！「グハッ！」 まったく
お前ら頭に血が上り過ぎだ」

「秀兄、大丈夫だった？」 バキッ！！ 「う、腕がつ……！！」

「エリ……ワシを心配してくれるのはうれしいのじゃが、今エリの掴
んでる男の腕があり得ない方向に曲がっておるのじゃが……」

そつえば優子の姿が見当たらない……どこだ！！

「おいおいおい！てめえらコツチにはあ人質がいるんだぜえ！！

この子たちがどおなつてもいいのかな？」

そこには葉月ちゃんと気を失ってる優子の首筋にナイフを突きつけ
る男二人の姿が……

俺のなかで何かがプツリと音を立てた。

第六十八話 もーいーくつ寝ーるーとー秋休みー

「いいかぁ！？おとなしくしてるよぉ？ さもないとこの子たちが
ヒデエ傷を」

「神木家家訓その23…」

俯きながらポツリとつぶやくセンリ

「な、なんだよ！ 意味わかんねえーコト言ってるじゃねえーよ！
！」

「主を脅かす存在は…徹底的にお掃除すること…！ …エリ…！」
「はいよ兄さん！」

そういつてセンリはマフラーの中からなぜかタワシを3つ取りだし
エリに投げ渡し近くに置いてあった箒をつかむ

「はあ！？ な、なんでタワシ…！」

「掃除の時間のはじまりだっ！ 神木流掃除武術…掃武連撃 そう
ぶれんげき ツ…！」

「なんかカツコいい技名ついてるけど実際は箒でタワシを打ってる
だけじゃねーかぁ…！」

「しかも地味に痛っ… しまった…！」

カラン…と音をたてて男が持っていたナイフが床に落ちる

「ムツツリーニ…！」

「………任せる」

ゴン！ゴン！

「あがっ…！」 「うがっ…！」

男たちの後ろにはクリスタルボウルの灰皿…は危ないのでマイクを
持つてるムツツリー二の姿があった（マイクも十分危ないが）
相変わらずのすばらしい潜入っぷりであった。

「お、お姉ちゃん！ お姉えちゃーん！」

「葉月っ！良かった…。怖かったよね…？」

泣いている葉月ちゃんを抱きしめる島田さん。

どうやら先ほどの2人が最後のようであり残りは雄二と吉井が片付けたらしい。

「優子は！優子は大丈夫なのか!？」

若干涙目のセンリは優子の症状を見ていたエリを揺さぶりながら聞く

「ちょ、兄さん、落ち着いて!! ……優姉は頭を強くぶつけて脳震盪をおこしてるようだけど安静にしとけば大丈夫みたい。

それとタンコブができてるから何か冷やすものもらってきて！」

「りよ、了解!..!」

センリは涙を袖口で拭きながらダッシュで受付まで行き氷とタオルを借りに行った。

- - - - -

第六十八話 もーいーくつ寝ーるーとー秋休みー (後書き)

亀更新かつクオリティ低くかつテンションが曖昧ですいません!!
地の文ってどうすればええんやろ???

第六十九話 秋眠暁を覚えずつて言葉も作るべき！ つまり眠いよ

side 優子

(ん…ここは？)

優子が目を開けると見たことない景色が広がっていた。

そこは広い草原と青い空がありそれ以外にも見えなかった

優子は先ほどまでカラオケボックスにいたことを思い出しここが夢の中だと理解する。

(ドコだっけ？なんか懐かしい感じはするんだけど…)

優子がしばらく草原を歩いていると茶髪の女性が見えた。

女性は後ろ向きで座り込んだまま何か作業をしているようだ。

話しかけようか話しかけないか迷っていた優子だったが

優子の存在に気付いたのかふと女性が少しだけ振り返る

(うわぁきれいな人だなぁ…ってなんか秀吉が女の人演じた時みた
いな人ね…)

「こんにちは！ 会えてうれしいなw」

「へ！？」

突然のあいさつに優子は驚く

「あの…ちょっとお聞きしますけど、どちら様ですか？」

「ん…どうしましょうか？ 聞きたい？」

「そりゃあ…まa」あっ！ ほらそろそろ起きなきゃ！…！

「だあー翔子！わかったから抱きつくな!!」

坂本夫妻は今日も元気にいちゃいちゃしております。はい。

「おい、神木妹！ 見てないで翔子をなんとかしてくれ！」

「いや〜まんざらでもないって顔してるのに邪魔しちゃいけないと思っんですよね。 ね〜秀兄？」

「そうじゃの。 まあ雄二は“シンデレ”じゃからの〜」

「……お前らあとで覚えとけよ」

一方その頃……

side センリ

(何か冷やすものー受付でもらえるかな?)

センリは早歩きで一階の受付を目指す。

すると受付のエントランスに見知った顔がいた。

(ん!?!アレはリオとアズちゃん? どうしてこんなところに……)

side 海谷 リオ

「教頭が勝手に動いたときは驚きましたね」

「そうなんだよな。クソッ! しっかしアイツらドコにいったよ〜つかこのカラオケボックス広くね?」

「先輩の身長がちつさいからじゃないですか？ あっ！ニボシ食べます？」モグモグ

「いやいや！ 俺の身長一応平均はあるからね！？ それとニボシ食べ過ぎだからね！？」

「ニボシは体にいいからどんだけ食べても良いんですよ！ カルシウムの摂取に最高なのです！」

「ほう…でもでもカルシウム摂ってもアズちゃんの胸はいつまでもこなぐはっ！！！」

「なな、な、なんで先輩が私の胸のサイズをつ…！！！！！」

アズサはリオの発言をアッパーで遮りその後すぐに足で踏まれていた。

『相変わらず仲良しなんですわ？ 元王室騎士団長殿、副団長殿

？』

「「！？」」

リオとアズサが声のしたほうへ振り返ると“センリ”がいた。

第六十九話 秋眠暁を覚えずつて言葉も作るべき！ つまり眠いよ（後書き）

秋休み！！

つつことと若干（ほんとに若干！！）更新早くなります…たぶん！！

もうすぐトリックオアトリートww

友人の筆箱のペンのキャップをすべて入れ替えてやらねば！！

第七十話 男装執事ってなんか…いいですね！

side アズサ

『こんばんは…いやこんにちは？室内だからわかんねーや。まあどっちでもいいけど…』

“セシリ”は頭を掻きながら若干困ったように言う

「お前…セシリじゃないな？」

『あり？バレちった？』

いやまあバレるとは思ってたけど…と笑いながら言う“セシリ”は見た目はセシリなのだがいつも学校とかで肌身離さず身に着けているはずのマフラーを手に持っていた

『んじゃまあ、あらためて…お久しぶりだな兄上達！』

「やっぱりお前か…！ 元女王専属騎士様よ…！！」

「どうして貴方がここに！ セシリ君は！？」

『アイツ？アイツは今眠ってるよ。 いや〜出てくるの大変だったなあ。』

何でか知らねーけど俺の事抑えられてたみたいだし？』

「何が目的だ！」

『なんだよ、せっかく見知った顔が居たから声かけてやっただけなのにー。 第一俺の目的ぐらいアンタらはすでに掴んでるんでしょ？』

でもまあ…何か事を起こそうにもそろそろ時間切れみたいだし？ 今日のところは何もしないけどなー』

「くっ…！」

『まっそのうちまた会うことになるんだからガツカリするなよ…』

そついいながら“センリ”はマフラーを巻きながら言う

『ではではごきげんよう』

「なっ！おい待て！！」ガシッ

リオはセンリの肩を掴む。

「なんだ？………なっ！！ 俺にそういう趣味はありませーん！！」
バキッ

「グハッ！！」

どうやら“センリ”は再び眠りについたようで、気が付いたセンリはいきなり肩を掴まれたことに驚きお得意の護身術（という名の右ストレート）で
リオを思いっきり殴った

「はあはあ…き、貴様！！10mぐらい離れていたはずなのにいきなり俺の目の前に現れるとは…」

「どこぞのテレポーターさんですかオラァ！！」

「そうですね先輩。 気持ち悪いです」

「グハッ！！ ぼ、暴力だけでなく言葉の暴力まで…シクシク」

リオは端っこのほうで体操座りしながら「どうせ俺は…」や「俺だつて頑張ったんですよ…」などと独り言を言い始めた。

「はあ…また始まった。 まあいいや、それより…センリさん？あなたは今まで何してたんですか？」

「ん？ そうそう優ちゃんが脳震盪起こして何か冷やすものを…つてそうだった！アンタらの相手している場合じゃなかったんだった

「……！」

そういつてセンリはダッシュで受付のほうへ行き冷やすものとやらをもらいに行った。

（どうやら“センリ”の言つとおり眠らされていたのは本当のようですね…

しっかし…めんどろな事になりました。まあ“奴”の目的はおそらく“あの事”で間違いないでしょうが…）

アズサは自分の上司に目をやりまたため息をつきながら

（とりあえず今は文月学園存続のために頑張りますか…）

そう思いつつポケットからニボシの小袋を取りだし（ついでに今だ落ち込んでいるリオを引きずりながら）吉井たちがいる部屋へ向かっていった

第七十一話 歯医者が怖いんだが…なにか？

side センリ

「ひ、冷やすものもってきて「遅い！！」 イテッ」

センリが勢いよくドアを開けた時、ほぼ同時にエリはドアに向けてタワシを投げつける
どっから持ってきたんだよ！…と思ったらさつき使った奴じゃん。

「どこまで取りに行つてたんだよ！ 日が暮れるかと思つたよ！！」
「す、すいません！（急いだんだけどな…）」

「まあいいや、兄さんが使えないのは今に始まつたことじゃないしね！」

「ほう… んじゃあ明日から部屋の掃除と洗濯その他もろもろやつてくれるんだね？」

「！！！」

「いやーだつて俺“使えない奴”だし？ “使える” エリちゃんがやつてくれたほうか効率良いんじゃないのかにやー？」

「うう… 兄さん、謝るからそれだけは勘弁して…」

「しよーがないなあ。 ホラ氷とタオルもらつてきたから早く優ちやんこ…」

「りよーかい！」

ふっ…家事ができない妹はチヨロイゼ！！…いやまあここで『やつてやる』って言われてたらもつと大変だつただけだな。

エリはセンリから氷とタオルを受け取ると素早く優子のタンコブができているあたりを冷やし始める。

もちろん冷たすぎないようにタオルの上から氷を当てているので大丈夫だ。

「ねえ雄二、これからどうするの？」

「まあとりあえず木下姉の意識が戻ったら学校に戻るぞ。まだ清涼祭の途中だしな。」

「そっか…そうい「どーも。お邪魔しまーす」

ドアのほうを見るとアズサとリオがいた。

リオはいまだに体操座りのまま何か独り言をブツブツと言っていた。

「ほら、先輩！ 着きましたよ〜」

「…どーせ俺は………」

「…着・き・ま・し・た・よ！」ゴソツ

「痛っ！！ って何をする！！」

「いや〜先輩があまりにも私の言葉をシカトしやがるんでつい…（
テへ）」

「つい…じゃないよ！！ もっとマシな方法とかあったでしょう！
？あつたよね！？」

「…じゃあ正直にいいいます。ウザかったから殴りました（キリッ」
「キリッ…ってこの場面で使う表情じゃないからね！？」

「あの…結局何しに来たんですか？」

島田さんナイス質問！ このままいったらまたリオが体操座りに
逆戻りしていた所だったよ！

「そうそう。俺たち風紀委員じゃん？ 顧問の教頭にさ、「校外清
掃」頼まれたわけよ」

「“校外清掃”？」

「そうそう。 んで内容が…」

「 “2・Fの坂本雄二と吉井明久を召喚大会の決勝に出れなくなる ようにせよ” なんだけど? 」

第七十二話 ナンにハマってます。アレです。カレーにつけるとうまいアレ！

- - - - -
side センリ

「2-Fの坂本雄二と吉井明久を召喚大会の決勝に出れなくなるようにせよ” なんだけど？」

「「「なっ！！」「」」

リオの突然の発言に俺たちは驚き、とっさに俺とエリは構える
ハア…とリオは溜息を吐きながら

「まあそう言うことで……………大人しくあきらめてくれねえか？」

左手で頭をめんどくさそうに掻きながら普段より低めの声で言うリオ
シーンと一気に静まり返った室内は2、3 温度が下がったように
感じられた

クソッ！なんとかして雄二たちをココから逃がさないと……………！！

「……………なーんちゃって！！」

突然真剣な表情を崩しニカツと笑顔になるリオ

「「「はあっ！？」」「」」

突然のことについていけなかった俺たちは変な声をあげてしまう

「プククク…こいつら、プツ…騙されてやんの…ククツ…超真剣な顔してたしププツ…」

「先輩の笑い方は相変わらず気持ち悪い…ですが騙されたあなた方の顔は大変面白かったです」

「どういうことだ、峰山！」

「どういうことって言われましても…まあ簡単に説明申し上げますと我々風紀委員が今回教頭に頼まれたのはあくまで“校外清掃”です。」

先ほど述べた“2-Fうんぬん”は我々にとってはサブタイトルのなモノ。

遠回しに且つ、分かりにくく説明いたしました、頭の良い貴方はここまで言えばご理解いただけると思います。

………どうですか坂本君？」

ニコツつと坂本に笑顔を向けるアズちゃん

ふむふむなるほど…つまり俺には全然わからねえってことは分かった！！

「なるほどな…だったら話は早い。おいみんな！これから俺たちは速やかに学校に戻り明日の準備をするぞ！」

風紀委員の方々はこれから“校外清掃で”忙しいみたいだから邪魔するなよ」

「坂本君それはどういう…」「えっ…それってつまり…」

「姫路、明久、ごちゃごちゃ言っただねえでさっさと行くぞー」

とりあえず意味も分からぬままに坂本にうながされて部屋から退出する吉井たち

俺はまだ意識を失ってる優ちゃ…優子をどっいう風に学校まで連れて行くのか思案しているよ

「おいセンリ、いい事教えてやるよ」

「なんだよ…俺は今忙しいんだけど…」

「Lady…つまり女性を運ぶ時はな………こつやっつて、運ぶんだよ」

リオはそついうと隣にいたアズちゃんをお姫様抱っこする

「キヤツ…ちょ、先輩!!(ノノノ)」

「まあまあ、たまには俺にもこんな得があってもいいじゃない」

ニヤニヤしながら言っていたリオの頬が腫れる30秒前の出来事であった。

第七十三話 12月24日の夜に煙突から忍び込んでくるお髭のおじさんを信

学校へ戻ってきたセンリ達。(結局優子はセンリがおんぶして連れて帰った)

教室に戻ったところにはほとんど清涼祭1日目は終わりがけていたしかし喫茶店の方はなんとか須川君達が動いてくれたおかげでセンリ達がいなくなった後もちゃんと回ってたようだった。

side 優子

「ん…ここは?…」

まだ安定してない意識の中、目を開けると自分の部屋ではない天井があった。

(たしか……Fクラスの出し物見に行つて…葉月ちゃんが変な奴らに、そして…)

「ゆ、優子!大丈夫!?痛いとかかないか!?記憶とかハッキリしてるか!?!」

順番に起こつた出来事を思い出していると、心配そうにアタシの顔を覗き込んでくるセンリと目があった。

(そうか、たしか頭をぶつけて、それで意識を失つて…)

優子が記憶の整理をしている時にセンリは返事がないのはもしかしたら頭を打った衝撃で記憶がとんでしまっているのではないかと心配になり…

「ゆ、優子もしかして記憶喪失なのか!? な、なら3年前冷蔵庫の棚の中央奥に隠してあつた優子の楽しみにしていたプリンを俺が

食べてしまつて2階から3時間ほど吊るしたり

演劇部の定期発表会の時秀に『絶対行かない』って言いつつもしつかりこっそり見に行つてたり、

最近ムツリーニからいろいろと怪しげな写s…痛い且つ腕がもげるといふかそのまま行くと俺の腕が取り外し可能になつちゃうからっ!!」

いろいろ秘密を暴露していたセンリの腕を本来曲がるべきではない方向に曲げつつ

「アンタね！ココとぞばかりに人の秘密をベラベラと話すとはい度胸してるじゃないの！」

こうなつたらこの学校の屋上からアンタの事吊るして帰つてもいいのよ？」

と、どこからともなくロープを取り出す。

スイマセンでした、と瞬時に土下座するセンリ。

(アイツ最近土下座の上達度が上がってきてるような…ていうか土下座の上達度つてなんなのよ！)

と優子は心の中で1人漫才をしていた。

「お！木下姉、もう大丈夫なのか？」

「……優子、大丈夫？」

「心配ありがとう坂本君、代表。頭が若干痛いけど、どうやらタシコブのようだし一応大丈夫よ。」

「そうか。ところで木下姉、今から“とある人物”がこの教室にやってくるがお前も話聞いてくか？」

「“とある人物”って？」

坂本君が話を聞くとと言う程の人物なのだから結構な大物なのかな？もしかして今回の件に関係ある人物じゃ…

「ババアだ」

「ば、ババアじゃ分かんないわよ！」

「ああ学園長ね。」

「……！ よ、吉井君なんで分かったの！？」

「雄二がババアって言ったら学園長しかいないよ。そのくらい僕でも分かるしね」

（？ええっ！っ、つまり吉井君には坂本君がアレとかコレとか言っても分かるのかしら……ということはコレって……！！！！）

優子が両頬に手をあて内心『キヤー！』と叫びながらワクワクしたように体を少し揺らす妄想モードに入ってしまった。（妄想の内容は……察してあげてください）

「ええつと……木下さん？大丈夫？ ……はっ！もしかして頭の打ちどころとか悪かったとか？」

「明久、大丈夫じゃ。姉上の持病じゃから……」

「えっ！木下さんってなんか病気とか患ってるの！？ きゅ、救急車とか呼ばなくて大丈夫なの秀吉！？」

「ははは、吉井先輩って素直かつ単純なんですわ。今日改めて思い知らされました。気をつけないと彼は将来“オレオレ詐欺”にさえ引っかけりそうで心配です。将来のお嫁さんがこの上なく心配ですよ」

「え、エリちゃん それってどういうこと？」

「先輩はやさしいですね。っと言うことですよ」

「エへへ。褒められるの久しぶりだからうれしいなあ」

「待て明久よ！エリはお主のことまったく褒めてなかったぞ！」

「……はあ（鈍感すぎる……瑞希先輩も美波先輩もいろいろと大変なんだらうなあ）」

2人の女の先輩の将来が一番心配なエリであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677q/>

バカとマフラーと召喚獣

2011年12月2日01時55分発行